

報 告 書

[illegible]

はじめに

この調査研究事業は、「行動障害」といわれるような、様々な行動上の困難さを抱えた人たち（特に、成人期の人たち）の、暮らしの場を考えることからスタートしています。

「行動障害」は、自閉症スペクトラムの人たちが持つ様々な障害特性と、環境との間に生ずるズレ・摩擦が要因のストレスが高じて起きるものであって、「自閉症スペクトラムだから起こす行動」ではないことから、私たちが彼らの障害特性を理解し、私たちの環境が寄り添うことで、彼らが社会生活を送る上でのストレス（＝ハンディキャップ）は軽減され、「行動障害」は収まってくると考えられます。

この事業は、ケアホーム（CH）という暮らしの場をつくる（建てる）ということを前提としているので、主として環境面からのアプローチとなっています。ひとりひとりの障害特性が十分にアセスメントされ、ソフト面の支援の組み立てがされていることが前提であることは言うまでもありません。適切なアセスメントに基づくソフト・ハードの環境を整えば、シビアな行動障害を起こさざるを得ない人たちも、落ち着いた暮らしを送れるようになります。日本にも、そのような支援を実践しているところがありますが、多くは、献身的な努力に支えられているのが現状です。この事業の成果が制度面に活かされれば、多くの「行動援護」対象者と、そして、その支援者が、救われることになると考えています。

この事業のもっと大きな意義は、「行動援護ハウス」の実績を積み重ねることで、自閉症スペクトラムの人たちが必要としている環境をよりクリアにできることです。それは、「行動障害」を予防するための条件として、発達期の支援に反映できるものとなり、自閉症スペクトラムをもって生まれた子どもたちが、自宅で家族と共に安心して育ち、穏やかに安定した自立生活を送れる成人期を迎えることにつながるはずです。

障害者自立支援法の成立と共に、「行動援護」という支援の類型が誕生し、多くの心ある支援者によって、それが大切に育てられ、住環境の支援という枠組みにまでその理念が届いたことは、画期的なことです。日本の家造りの技術は、多くの障害のある人たちの暮らしに役立っているように、自閉症スペクトラムの人たちの暮らしにも「やさしい」環境作りを提案してくれる可能性に満ちています。

この研究事業の成果が、今必要としている人たちはもちろん、これから生まれてくる全ての人たちにとって、穏やかで落ち着いた暮らしの礎となることを願って止みません。

（注）報告書の中では、研究の対象者が「行動援護対象者※」「行動援護対象者、重度心身障害者等、重度の障害のある人たち」「強度行動障がいをもつ人たち」「自閉症スペクトラムの人たち」など様々に想定及び表現されています。

研究の対象は「行動援護対象者および、重度心身障害者等、重度の障害のある人」ですが、現在の行動援護対象者は、知的障害を伴う自閉症スペクトラムの人たちで、行動障害を起こしている人が大半を占めるという状況です。また、自閉症の障害特性上、広汎に障害が及んでいることから、重度知的障害あるいは、重度心身障害の人たちの障害特性と重なる部分が多くあるという事実を考えて、「自閉症スペクトラムの人たち」を主な対象と考えて研究を進めました。

また、認知の障害であることから考えて、統合失調症や認知症の人たちへの支援にも般化できるのではないかと期待も抱いております。自閉症スペクトラムの人たちにとって必要な支援を考えることは、様々な障害を持つ人たち、さらには、一般の人たちにとっても、気持ちよく安心して暮らせる環境作りにつながるのではないかと考えています。

※行動援護の対象者とは

- ①知的障害又は精神障害により行動上著しい困難を有する障害者であって常時介護を必要とするもの。
- ②障害程度区分3以上。
- ③障害程度区分の認定調査項目のうち行動関連項目（11項目）等の合計点数が8点以上であるもの。

【行動援護判定基準と認定項目】

調査項目等	0点		1点	2点	
本人独自の表現方法を用いた意思表示	意思表示できる		時々、独自の方法	常に独自の方法	意思表示できない
言葉以外の手段を用いた説明理解	説明を理解できる		時々、言葉以外の方法	常に言葉以外の方法	説明を理解できない
食べられないものを口に入れる	ない	時々ある	ある（週1回以上）	毎日	
多動又は行動の停止	ない	稀にある	月に1回以上	週に1回以上	ほぼ毎日
パニックや不安定な行動	ない	稀にある	月に1回以上	週に1回以上	ほぼ毎日
自分の体を叩いたり傷つけるなどの行為	ない	稀にある	月に1回以上	週に1回以上	ほぼ毎日
叩いたり蹴ったり器物を壊したりなどの行為	ない	稀にある	月に1回以上	週に1回以上	ほぼ毎日
他人に抱きついたり断りもなく物を持ってくる	ない	稀にある	月に1回以上	週に1回以上	ほぼ毎日
環境の変化により突発的に通常と違う声を出す	ない	稀にある	週に1回以上	日に1回以上	日に数回
突然走っていなくなるような突発的の行為	ない	稀にある	週に1回以上	日に1回以上	日に数回
過食・反すうなどの食事に関する行動	ない	稀にある	月に1回以上	週に1回以上	ほぼ毎日
てんかん発作（医師意見書）	年に1回以上 換算せず		月に1回以上	週1回以上	

目 次

第1章 調査・研究の概要	5
1. 調査・研究の目的	6
2. 調査・研究の内容	6
3. 調査・研究の実施状況	7
第2章 研究のフレーム・考え方	15
1. 研究領域と関係性	16
2. 研究のアプローチ	17
3. 年齢と住環境機能	19
4. 既存技術とアセスメント	23
第3章 予備調査	25
1. 調査表	26
2. 調査結果	27
第4章 先進事例調査	29
1. 社会福祉法人はるにれの里の実践	30
2. GHAの実践	37
3. 大手住宅メーカーの取り組み	39
4. 考察	44
第5章 支援システムと住環境の研究	59
1. 小規模、分散化支援システムの効果	60
2. 自閉症の特性と必要な住環境配慮	63
3. 住宅メーカー技術の適応分析	70
4. 行動特性からのアプローチ	77
5. 住環境アセスメントシートの開発	84
6. CH 物件アセスメントシートの開発	108
第6章 課題と提言	123
1. ハード整備	127
2. アセスメント	128
3. 在宅の環境づくり（療育ハウス）	129
4. 給付、補助等、資金面での支援	129
おわりに	130

第 1 章

調査・研究の概要

1. 調査・研究の目的

行動援護対象者や重度心身障害者等、重度の障害のある方は、様々な障害特性により、通常の住宅での一般（健常）の人たちとの共同生活において、過刺激を感じたり、過反応・誤反応を起こしてしまうことが多い。そのために、生活上常に多くのストレスにさらされ、成人期になって二次障害を起こしてしまうケースは少なくない。

とりわけ、「行動障害」と言われる一連の行動（障害程度区分行動援護評価基準参照）は、主に自閉症スペクトラムの人たちが、環境（社会）との間に生じるストレスのために起こさざるを得なかった大変シビアな二次障害であり、対策と予防が急務となっている。

彼らの「行動障害」は、人間的関係性まで含めた生活環境を整えることによって、収まり、通常の暮らしを取り戻すことができることは、多くの先進事例から明らかである。

そこで、主に住環境に焦点を絞り、重度の障害のある人たちにとって必要な環境はなにか、また、そのような環境を整えるためにどのような条件整備が必要かを、調査・研究することで、入所施設、病院、あるいは家庭から、安心して穏やかに暮らせるケアホーム等（以下 CH）への移行を促進することを目的とする。

2. 調査・研究の内容

CH 等への移行が進みにくい行動援護対象者等、重度の障害のある人たちに必要な住環境および支援システムのありかたを、住宅メーカーと福祉事業所で調査・研究する。

1) 暮らしの中での障害体験と、必要な住（宅）環境の検討

大手メーカーとの共同により、福祉事業者や障害のある方の親等が、障害体験（キャップハンディ）をすることで、重度の障害のある人たちにとって必要な住（宅）環境への配慮、工夫、整備を調査・研究する。

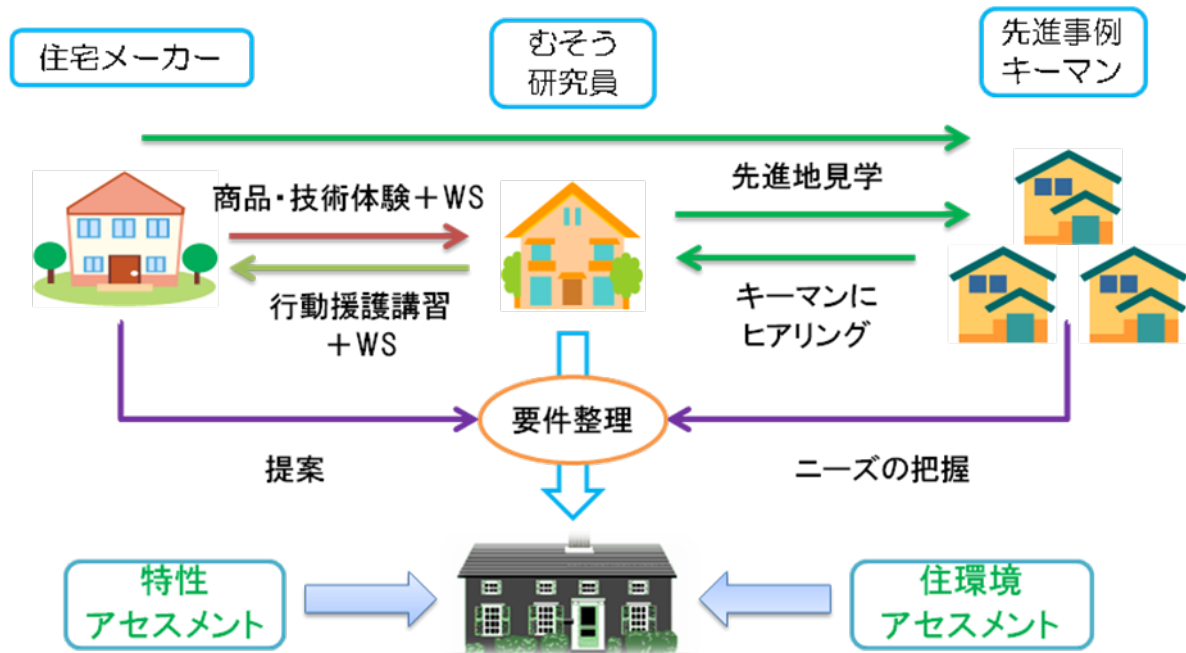
2) 行動援護対象者に必要な、住（宅）環境への配慮についての検討

行動援護対象者の障害特性（行動援護従事者養成研修資料参照）への支援（構造化）の中で、特に、住（宅）環境への配慮・工夫をどのようにアセスメントし、実際の環境整備、環境づくりに活かせるか。

3) 先進地事例の聞き取り調査の実施

住環境及び支援システムにおける、先進地、先進事例の聞き取り・実地調査を行う。

図表 1-1：調査研究の全体図



3. 調査・研究の実施状況

1) 現場ニーズの把握

タイトル：障害特性に合ったケアホームの住宅環境整備に関するアンケート

調査方法：調査票による記入式

調査対象：富山県内で地域移行を進めている、もしくは地域移行を考えている事業所

調査内容：①住環境で現在、住居者に対して配慮している点

②どんな行動・感覚・反応について特に配慮が必要か

③そのような状況に対して住環境整備面でどのような配慮や工夫が必要か

日 時：2009 年 8 月 29 日

場 所：高岡市ふれあい福祉センター

回答者：地域生活支援事所の経営者、現場責任者クラス

入所施設の施設長、現場責任者クラス

計 34 名

有効回答：24 名

2) 先進地視察

先進地視察では、社会福祉法人はるにれの里、NPO 法人それいゆ、GHA（アルバマーレ）を訪問し、ハード面の工夫や支援システムについて聞き取り調査を実施した。

①社会福祉法人はるにれの里

【訪問スケジュール】

2009 年 10 月 9 日（金）

13：30～ ゆい（プレゼンテーション）

14：30～ りれい、ほしの窓、空、らいふ

17：00～ 法人本部（ミーティング）

2009 年 10 月 10 日（土）

9：30～10：00 はばたき

10：00～10：00 たんぽぽ、ふりっぱー、あしり、こすもす

13：30～16：00 厚田（203、205、207、こもれび）

16：00～17：00 きのこ村

2009 年 10 月 11 日（日）

9：30～12：00 えみな、ほしのみ、さりゅう

2010 年 1 月 16 日（土）

13：00～13：30 ほしの窓・空

14：30～15：00 やすらぎ 205、207

15：30～16：30 法人本部（ミーティング）

【調査項目】

○現在の建物について、困っている点、工夫している点

- ・利用者さんの部屋（広さ、位置、家具、就寝様式：ベッド・ふとん、私物の管理、ドアは小窓付きか、窓の施錠・開口調整）
- ・部屋以外の居場所
- ・世話人の部屋（広さ、位置、設備）
- ・照明（照明器具の種類：蛍光灯・白熱灯、カバー付き・カバーなし、スイッチ）
- ・空調（冷暖房の設備の種類：壁掛け式・天井カセット式、リモコンの管理、部屋の換気）
- ・洗面所（数、位置、水栓の種類：自働・手動、水遊び）
- ・トイレ（便器の種類：洋便器・小便器、自働水洗か、タンク式か、トイレでの水遊び、トイレトペーパーの管理、トイレのドアと鍵、トイレの電気）

②NPO 法人それいゆ西部地域センター通所部（武雄市）

【訪問スケジュール】

2009 年 10 月 30 日（金）

13：30～15：00 プレゼンテーション

14：30～16：00 見学

17：00～17：00 ミーティング

【調査項目】

○強度行動障害者の空間づくりの工夫について

- ・ 仕事スペース
- ・ 休憩スペース
- ・ 学びスペース
- ・ 食事スペース
- ・ 通路
- ・ 出入り口
- ・ 窓
- ・ 照明
- ・ 床
- ・ 空間の仕切り
- ・ 支援システム
- ・ 人材育成システム

③GHA（Group Home at Albemarle）

【訪問スケジュール】

2009 年 11 月 30 日（月）～12 月 6 日（日）

11/30 日本発：同日現地着（シャーロット）→アルバマーレ移動

12/1～4：見学およびディスカッション

12/5 早朝米国発：12/6 日本着

【調査内容】

アメリカのノースカロライナ大学（TEACCH という自閉症向けプログラムを開発した大学）の近くで、強度行動障害を持たれた方を支援しているグループホーム（GH：17 件保有）で世界最先端の地域生活事例の情報収集・意見交換会を行う。

3) キーマンへのヒアリング

先進地視察事業所のリーダークラス及び、行動援護スペシャリストに随時ヒアリングを行い、必要に応じて情報提供やアドバイスを求めた。

対象者：先進地視察事業所のリーダークラス及び、行動援護スペシャリスト 5 名

調査方法：訪問、電話、メール等状況や内容に応じて実施

調査内容：①住環境が与える影響と効果

②障害特性からみて必要な住環境整備

③住環境のアセスメントについて

4) 先進地技術の見学・適応研究

住宅大手メーカーの研究所を見学し、先進技術の理解を深め、さらにその技術が CH の住環境整備に適応可能かどうかの検証を行った。

日 時：2009 年 11 月 24 日（火） 13：00～17：00

場 所：住宅大手メーカー研究所

ファシリテータ：鈴木直也（NPO 法人起業支援ネット）

【訪問メンバー】

- ・福祉事業所経営者
 - ・サービス管理責任者
 - ・世話人
 - ・CH スタッフ
 - ・相談支援従事者
 - ・行動援護専門家
 - ・利用者
 - ・入居者の親
- 計 22 名

【スケジュール】

- 13：00～13：30 オリエンテーション
- 13：30～15：00 見学
- 15：00～15：30 質疑応答
- 15：30～17：00 ワークショップ

5) 住環境を考える行動援護講習会

住宅大手メーカーの研究職、設計職・営業職を対象に「自閉症などの強度行動障害者対応住宅の要件整理に向けた行動援護理論」講習を実施し、住宅メーカー側からみた CH の住環境整備の方向性や可能性について意見交換を行った。

講 師 : 水野敦之 (講習対応)

鈴木直也 (ワークショップ対応)

講習対象 : 住宅大手メーカーの研究職、設計職・営業職

講習内容 : ①行動援護対象者の障害特性理解と支援のあり方

②講習から考えられる CH のアイデア出し

日 時 : 2009 年 12 月 17 日 (水) 10:00~17:30

場 所 : 住宅大手メーカー研究所

【プログラム】

『自閉症などの強度行動障害者対応住宅の要件整理に向けた
行動援護理論研修プログラム』

	内容	形態	説明
10:00	自閉症の特性理解	講義	自閉症の特性の解説
11:30	障害のアセスメントに関して	講義	アセスメントの考え方、とくに冰山モデルの視点の解説
13:00	特性と行動のアセスメント	演習	簡単な事例でシートを使って検討する演習
13:30	生活デザインの考え方	講義	支援計画と生活づくりの個別化の視点を整理します
14:30	屋内での中の行動支援 ※住宅に特化すると事例が少ないので、屋内での想定で準備します。	演習	住宅で想定される場面に対して、環境、ハード面の側面と、ソフト面の支援の計画をいくつかのステップでの演習。
15:00	質疑応答	討議	
16:00	ワークショップ	演習	行動援護ハウスのアイデア
17:30	終了		

6) 公開フォーラムでの研究・検証

本研究の中間成果を広く一般の関係者に公開しながら、多様な視点を交えての意見交換を行うことで研究成果の検証を行った。

【アメニティ・ネットワーク・フォーラム】

日 時 : 2010 年 2 月 5 日 (金) 21 : 30～23 : 30
 場 所 : 大津プリンスホテル
 聴 衆 : 福祉事業者、行政関係者、大学関係者等 約 1000 名
 タイトル : 安心できる地域生活の構築のために「拠点的ケアホームの可能性」
 発表者 : 松上利男 (社会福祉法人北摂杉の子会)、小林繁市 (北海道 太陽の園)
 梶原厚子 (株式会社クロスサービス 訪問看護ステーションほのか)
 田中眞二 (積水ハウス株式会社総合住宅研究所)、福岡たかまる (前衆議院議員)
 コメンテーター : 中島誠 (厚生労働省障害福祉課長)
 コーディネーター : 田中正博 (全国地域生活支援ネットワーク)

【米国・日本のケアホーム先進事例～研究報告・公開討議～】

日 時 : 2010 年 3 月 12 日 (金) 13 : 00～17 : 20
 場 所 : 高槻市総合センター
 聴 衆 : 事業者、行政関係者、大学関係者等 約 200 名

【プログラム】

	内容	講師
13:10	基調講演「GHA の実践」	川崎医療福祉大学 医福祉学部 医療福祉学科 准教授 小林信篤 先生
14:30	公開討論 「ケアホームの先進事例とこれから」 【コーディネーター】 NPO 法人ふわり 代表 戸枝陽基	社会福祉法人はるにれの里 副所長 佐藤貴志 積水ハウス株式会社 住生活研究所 課長 田中眞二 社会福祉法人北摂杉の子会 常務理事 松上利夫 NPO 法人全国地域支援ネットワーク 代表 田中正博
17:20		

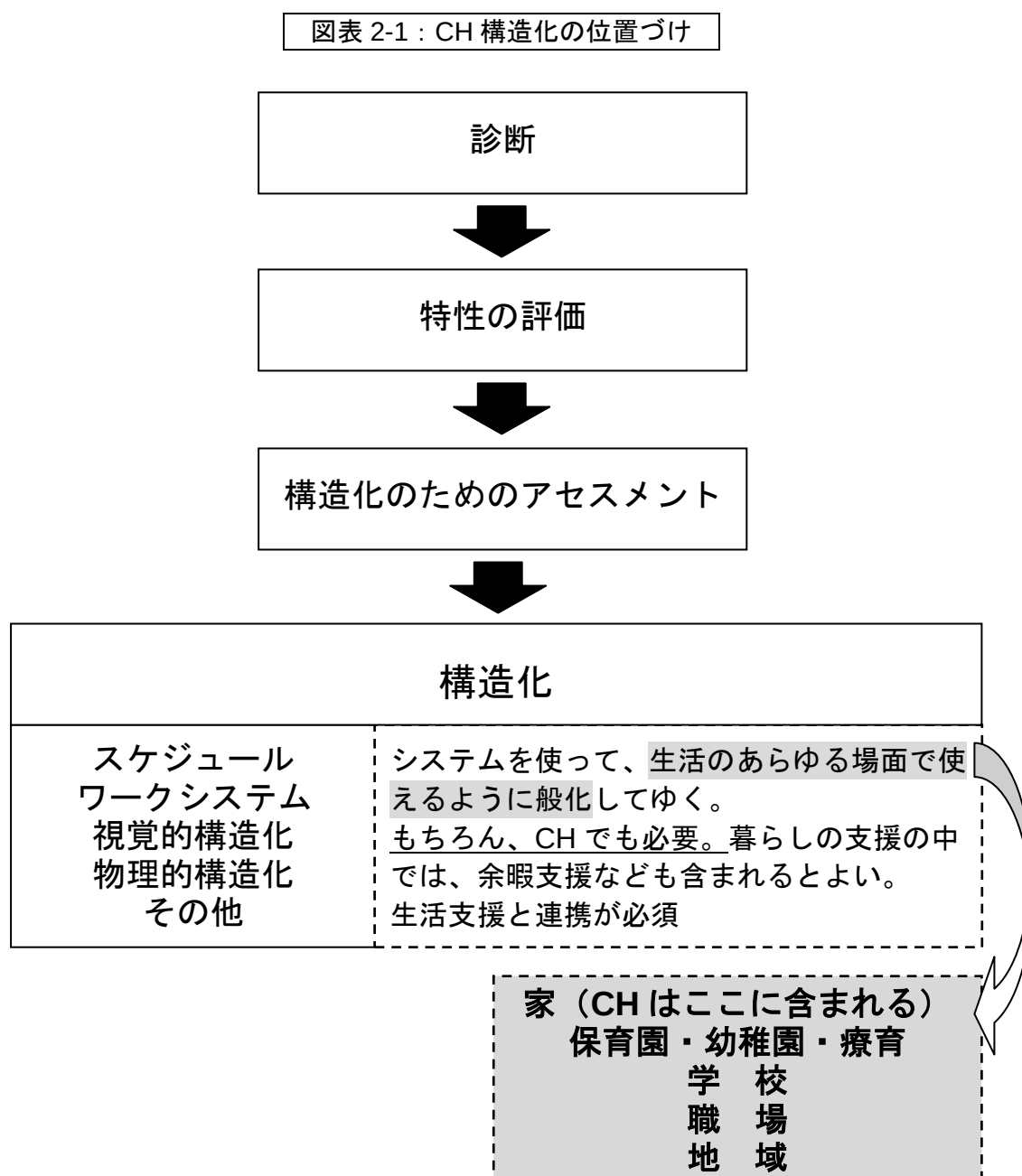
第 2 章

研究のフレーム・考え方

1. 研究領域と関係性

本研究は、行動援護対象者（現状では、知的障害を伴う自閉症スペクトラムの人たちが大半を占める）の CH の構造化を中心テーマとしている。CH の構造化のためには正しい診断、障害特性の評価、構造化のためのアセスメントというステップが必要である。そして、構造化のためのアセスメントの後には、スケジュール、ワークシステム、視覚的構造化、物理的構造化等のそれぞれのシステムが明らかとなり、それは CH での暮らしにも当然反映される。

図表 2-1 は CH の構造化の位置づけをあらわしたものである。



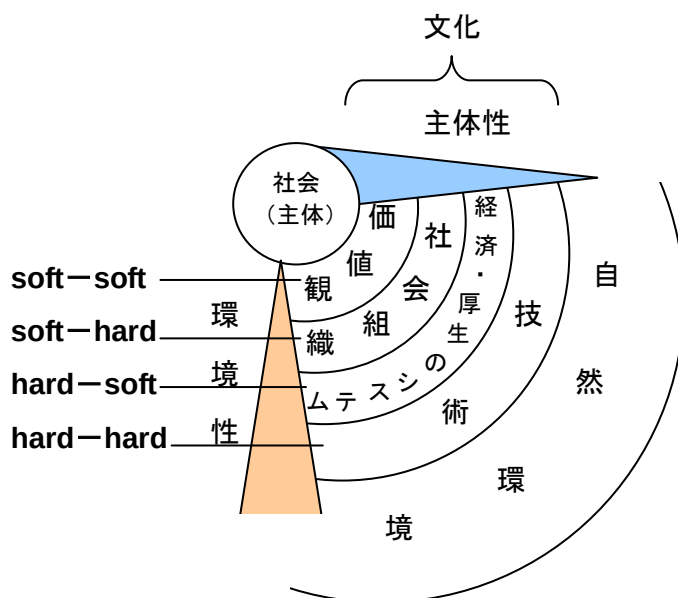
2. 研究のアプローチ

本研究を進めるにあたって最初に押さえておかなければならない点は、ハードの研究とソフトの研究を切り離しては考えられないということである。CHはソフトとハードの組み合わせによって利用者の生活を支えていることは言うまでもなく、ソフトのレベルによって必要とされるハードのレベルも変わってくるという関係にある。

ここでソフトとハードについて文化人類学者・川喜田二郎氏の考え方を引用しながら研究のアプローチを考えてみたい。川喜田氏によれば、社会は自然環境からのアプローチで技術革命（hard-hard）⇒経済・厚生システム革命（hard-soft）⇒社会組織革命（soft-hard）⇒価値観の革命（soft-soft）が起きているとされる。一方で前述のアプローチを「環境性」と表現したことに対比して社会からのアプローチは「主体性」と呼び、この領域を文化として捉えている。（図表 2-2 を参照）

ハードは換えやすく、逆に心理に根ざしたソフトは換えにくい（問題点を意識しにくく抵抗も大きい）とされている。

図表 2-2：社会変化のパターン



行動援護対象者や重症心身障害者の支援を考える時、この価値観の転換（soft-soft）が重要な要素であり、その価値観をベースとした組織やシステムの転換（soft-hard、hard-soft）、技術の転換（hard-hard）が求められるのである。自閉症の人達の文化を理解することの重要性が強調されるのは、支援現場で目にする構造やシステムばかりに注目するのではなく、その

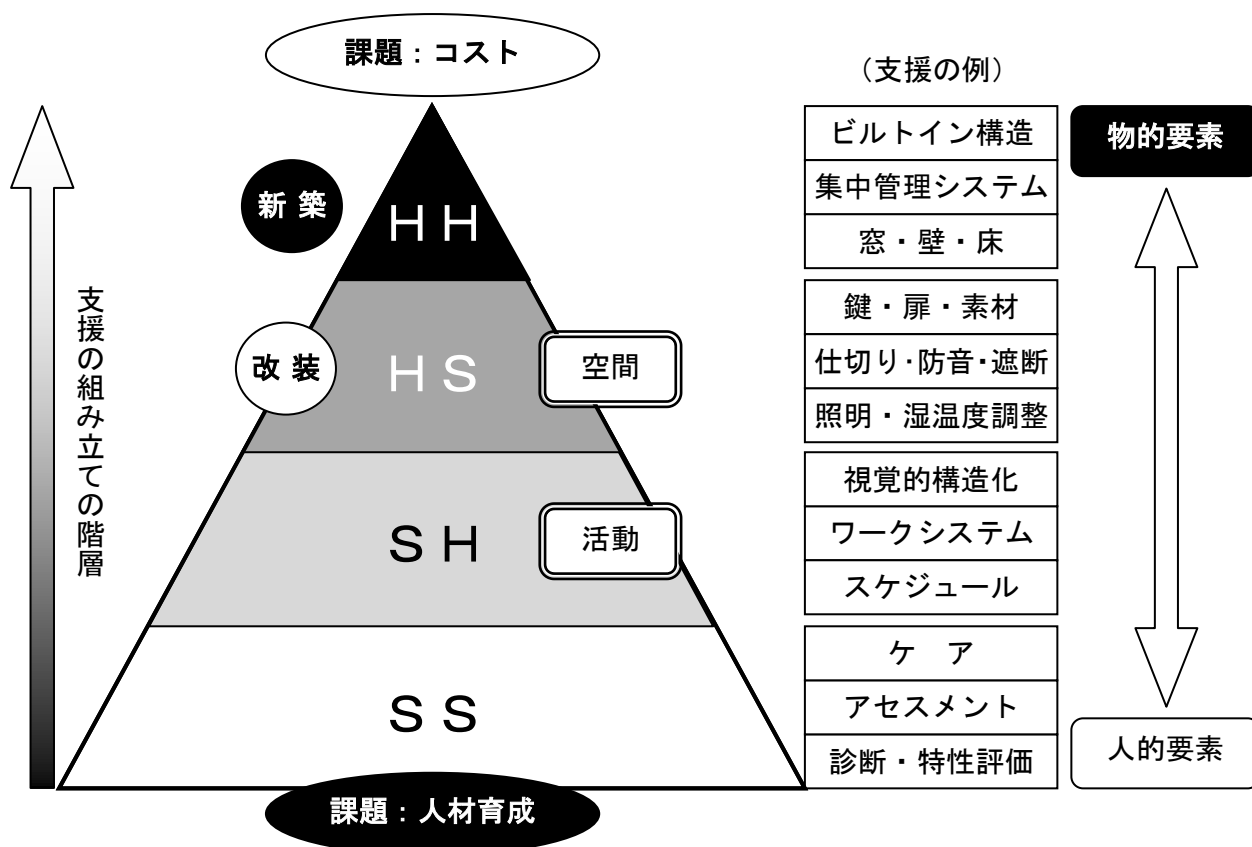
背景にある文化に意識を及ぼし、その世界観を尊重することからしか本当の支援は始まらない、ということではないだろうか。

さて、本研究では、川喜田二郎氏の考え方を参考に CH における支援を 4 段階に分けて考えることにした。図表 2-3 に示した様に、新築レベルで整備する段階を Hard-Hard (以下 HH)、改装レベルで変更が可能な空間づくりの段階を Hard-Soft (以下 HS)、道具等を活用して毎日、毎週の活動を支える段階を Soft-Hard (以下 SH)、構造化の前の段階で人的な要素がほとんどを占める部分を Soft-Soft (以下 SS) と呼ぶこととした。

CH の支援の組み立ては、SS⇒SH⇒HS⇒HH の順番で行うことが望ましい。先述の通り SS からのアプローチは、障害を持つ人の世界観の理解から始まるため、彼らのストレスを軽減し、2 次的な障害の抑止にもつながる。結果として SH、HS、HH の段階での支援の量的・質的負担を抑えることができるからである。

逆に、HH からアプローチしてしまった場合は、多大なコストが必要となることは明白である。しかし、SS の人材養成が不十分な現状では、緊急対策として HH からのアプローチも考えていかなければならない状況にある。

図表 2-3：ソフトとハードの支援段階



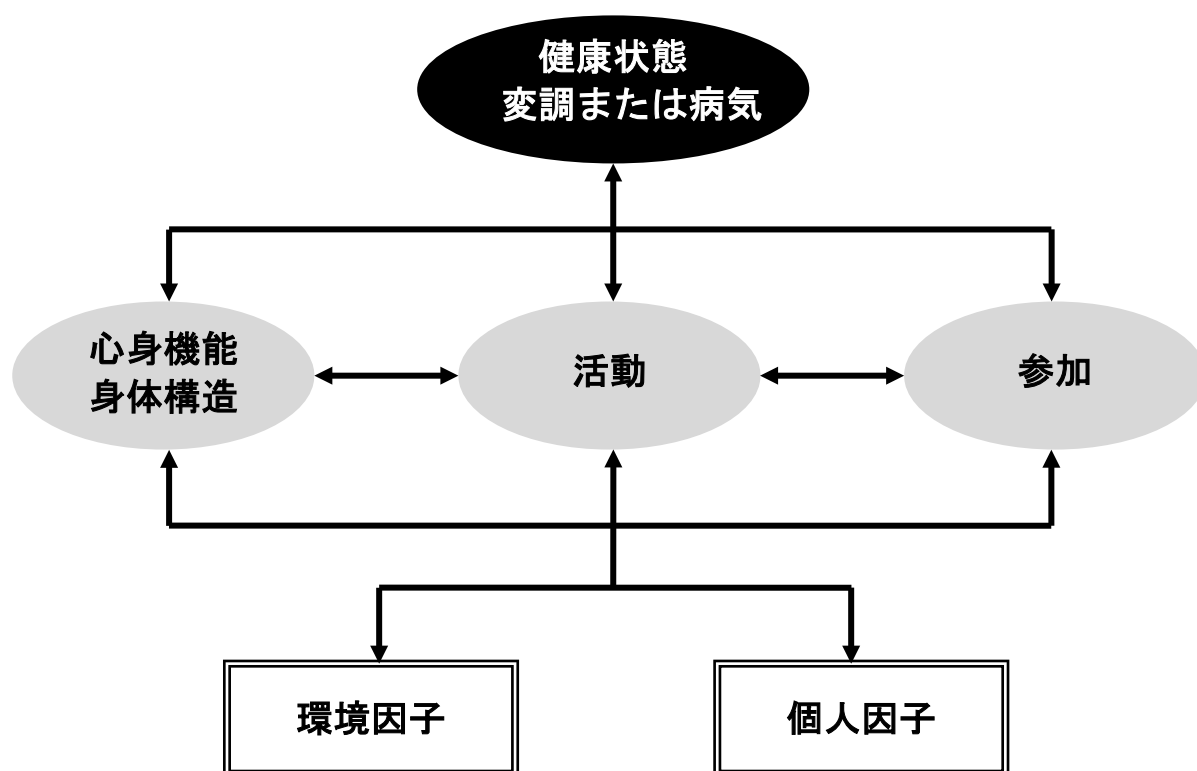
3. 年齢と住環境機能

本研究は CH を対象としているため、成人の住環境が主なテーマとなるが、成人前であっても住環境の整備が大切なことは言うまでもない。自宅での環境整備や、自宅での生活を改善する為の機能も重要となってくる。

1) ICF の考え方

ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health）は、人間の生活機能と障害の分類法として、2001 年 5 月、世界保健機関（WHO）総会において採択された。この特徴は、これまでの WHO 国際障害分類（ICIDH）がマイナス面を分類するという考え方が中心であったのに対し、ICF は、生活機能というプラス面からみるように視点を転換し、さらに環境因子等の観点を加えたことである。

図表 2-4：ICF の構成要素間の相互作用



図表 2-4 の双方向の矢印の循環に滞りのない状態が心身ともに健康な状態とされる。どこかに滞りが起きると、循環が片方向だけになったり、全くとどまってしまうことが起き、最悪の場合、廃用性萎縮というような状態も引き起こされる。

* 廃用性萎縮：例えば、下肢障害の人が、社会参加しないことで、様々な活動をしないう状態が続くと、下肢の機能障害が低下、さらには、残存機能としての上肢やその他の心身機能も低下状態となる。結果として、うつになる、病気になるなどで、さらに社会参加の機会が無くなる。個人因子としては、ネガティブシンキングとなり、周囲との関係性もネガティブとなり絶たれていく、というような悪循環がスパイラルする状態。

生まれてから成人するまでの子どもは、親、家庭、保育や教育、地域社会といった環境因子が大きく働きかけることで、ICFの良い循環がサポートされるべきである。

自閉症スペクトラムは、脳の機能レベルでの障害により、一般的な認知活動（脳を主幹とする情報処理活動）の広い範囲に制限が生じているが、その障害理解は進んでいない。結果として、親は子育てがうまくいかず、保育や教育の場でも学習が進まず、社会参加上の様々な困難を抱えることになる。

自閉症スペクトラムの子どもを持つ親のICFは、環境因子に自閉症の子どもがいるということが要因で、参加レベルでのストレスが高まり、健康状態が悪化する、という悪循環に陥りやすい。そしてICFが悪循環となっている人が社会に存在するということは、社会の人たちの環境因子に悪影響を与えるということであり、結果として社会全体が悪い循環になっていくと考えられる。

2) 療育ハウスと行動援護ハウス

よい循環をつくるためには、自閉症スペクトラムの子どもたちのICFの循環を良くし、周囲の環境の循環をよくすることが重要であり、自閉症スペクトラムの子どもがいても、よい循環の中で育った人たちが支える社会は、良い社会になっていくと考えられる。自閉症スペクトラムという障害を、正しく理解し、子どもとその子どもを育てる親をサポートし、ICFの循環を良くしていかなければ、悪循環を断つことはできない。

図表 2-5 は年齢と住まい方の現状を表したものである。

図表 2-5：年齢と住まい方の現状

年齢 0 10 20 30 40 50

自宅（親と同居）

行動対策ハウス（HH→SS）
入所施設もそのひとつ

自宅での療育が進まず、ICF の循環が良くない状態で入所施設や CH に入居する場合、入居の段階で既に 2 次障害が大きいと予測される。その行動障害への対策を重視した機能を中心に整備しなければならず、そういった住居（施設）を「行動対策ハウス」と呼ぶことにする。「行動対策ハウス」は HH で困り込むことで障害に対応するため、ICF の循環の改善にはつながりにくく、さらに悪い循環を招く可能性が大きい。

また整備コストも高くつくことから、行動対策ハウスを日本中に増やしていくという方向はコスト面から考えても現実的ではない。しかも、費用をかければかけるほど ICF の循環をさらに悪い方へ作用させてしまい、コストがどんどん増加してゆくことが懸念される。

ICF の循環を良くするためには、自宅での療育が重要であるが、先述の通り、親と子の関係だけでは一度陥った悪循環から抜け出すことが難しい。自宅ではない場所で療育・子育て支援を行い家へ戻るといった機能の提供も支援として必要となってくる。このような住居（施設）を「療育ハウス」と呼ぶことにする。

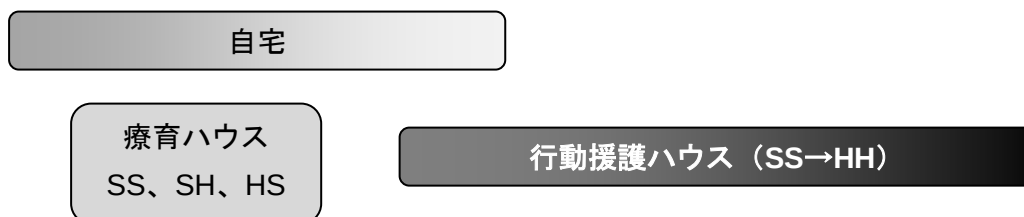
また、2 次障害がない、もしくは比較的抑えられた状態で CH に入居できる場合、行動障害の対策という目的ではなく、行動を援護する目的で CH を整備することが重要となってくる。このような住居（施設）を「行動援護ハウス」と呼ぶことにする。

「行動対策ハウス」がハードの機能を中心に組み立てられているのに対し、「行動援護ハウス」はソフトの機能を中心に組み立ててゆき、ハードの部分を最小限に抑えるという方向性を持っている。

図表 2-6 は年齢と住まいのあり方を示したものである。

図表 2-6：年齢と住まい方のあり方

年齢 0 10 20 30 40 50



「療育ハウス」、「行動援護ハウス」は支援者の人材育成が重要な鍵である。支援者の育成には時間もコストもかかるが、結果として、良い循環を創り出し、社会全体を良い方向へと導くことが可能となる。今後は支援のソフト面の評価軸、ハード面の評価軸、そしてコストパフォーマンスの評価軸をしっかりと定め、評価していくことが求められる。

また、行動援護対象者の評価軸の見直しも大きなテーマである。アメリカ、ADA 法の評価表では支援の必要度に応じたものになっていて、予防効果が期待できる。

図表 2-7 は療育ハウスと行動援護ハウスを比較しながら、その目的や機能などを説明したものである。

本研究では、CH の機能をテーマの中心に据えているため、療育ハウスについて詳細に言及することは他の機会に譲るが、行動援護ハウスの研究成果の内容と共通する事項は数多くあると考えられる。

図表 2-7：療育ハウスと行動援護ハウスの比較

	療育ハウス	行動援護ハウス
目的	家族との分離	家族からの自立
	家族との暮らしの仕切り直し	大人の暮らしへのチャレンジ
	家族との関係性の修復	社会との関係性の修復と創造
	わかりにくくストレスの多い環境から離れ、ストレスを下げる	チャレンジによるストレスや疲れをとる
	構造化された環境・暮らしの意味理解・練習	自分にとって必要な支援が整っている暮らしの継続
目標	家・家族のもとに戻ることが前提	住み続ける、住み続けられる保障
	日中は学校へ	日中は仕事・役割
準備	必要な支援・環境をアセスメント	成人期から終末期にむけてのアセスメントと支援計画
コスト	家の改修や模様替え	ホームの新築や改修、模様替え
機能	基本の建物 (できるだけ一般家庭的であること)	その人の暮らす建物
	可動式・可変式	必要な構造
	いろいろなパターンの部屋や空間	ひとりひとりに合わせた部屋や空間
	家族のスペース	職員のスペース
	行動観察室、相談室	交流スペース
	構造化のための資材、素材スペース	構造化のための資材、素材スペース
スタッフ	支援・アセスメントのできるスタッフ	アセスメントのできる SV と世話人、パート、アルバイトなど

4. 既存技術とアセスメント

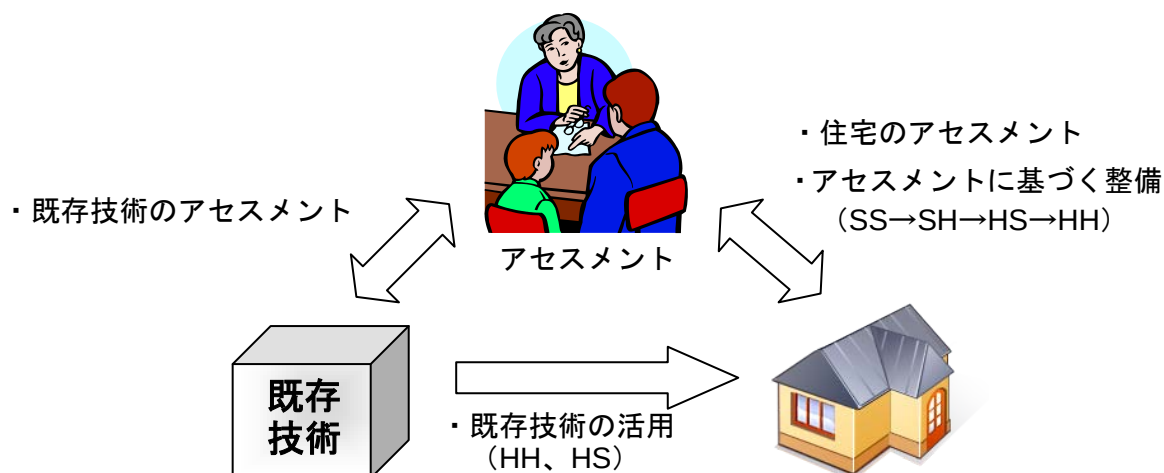
本研究では、住宅メーカーと福祉事業者合同の研修会及び話し合いを通して、お互いのニーズのすり合わせ作業を行った。福祉事業者、特に、行動障害を起こしてしまっている人たちの支援をリアルタイムでしている現場の直接支援者からは、行動障害、問題行動をなんとかするためにどうにかしたい、というニーズが出てきた。それに対して、住宅メーカーとしては、コストはかかるが、やろうと思えば大抵のことはできる、という解答であった。

これは、行動障害を、支援者主体の「支援者が困っている行動」としてとらえていることにより、HH でなんとかするしかないという間違った方向の発想から生じた食い違いである。自閉症スペクトラム、特に、行動障害を起こしてしまっている人たちにとって必要なことは、障害特性のアセスメントとそれに基づく構造化であり、その構造化の中には、SS→SH→HS→HH のそれぞれの段階がある。そのどこで対応するかを決めるのは支援者であり、それに応じてつくるのが住宅メーカーである。それぞれの役割をはっきりさせると、表面にでてくる行動に対する構造化の段階がはっきりしてくる。

SS から HH までのどの段階で支援案を作成するかは、利用者の特性への必要度と、その CH の支援者の資質や量（支援の時間数＝支援者の給料）と、新築・改修どちらにしても HH につけられる予算とを勘案することで決まってくる。当然のことであるが、そのどちらにも、コストはかかる。判断はそれぞれの事業所または法人の管理者にゆだねられることになる。このとき、判断の基準としては、ICF の循環を良くするかどうか、になるのではないだろうか。

しかし、SS からのアプローチは支援者の育成に時間がかかるため、現実としては CH 整備の緊急性から HH や HS からのアプローチでできることは整備してゆく必要がある。既に開発されている既存技術の中にも、有効なものは数多くあるはずであるが、まだ十分に発掘、検証されていない。また、本来の目的が違う技術でも、機能を読み替えれば行動援護ハウスに活かせるものがあるかも知れず、その可能性を探る分析も必要であろう。

図表 2-8：既存技術とアセスメント



第 3 章

予備調査

1. 調査票

障害特性に合ったケアホームの住宅環境整備に関するアンケート

このアンケートは、行動援護対象者および重症心身障害者のケアホームへの移行における住宅環境および支援システムのあり方を調査するものです。誰もが24時間365日地域で暮らすことができる社会の実現に向けて、是非ともご協力をお願いいたします。

社会福祉法人むそう

1. ケアホームを現在運営している事業者にお聞きします。

住宅環境（ハード面の整備）で現在、住居者に対して配慮している点をお聞かせ下さい。

2. 全ての方にお聞きします。

行動援護対象者や重症心身障害者が暮らすケアホームの住宅環境（ハード面の整備）で、今後、配慮すべき点についてご意見をお聞かせ下さい。

1) どんな行動・感覚・反応について特に配慮が必要だとお考えですか？

2) 上記の行動・感覚・反応に対応するためには、住宅環境整備（ハード面）でどのような配慮や工夫が必要だとお考えですか？

1) 配慮が必要な行動・感覚・反応	2) 住宅環境整備（ハード面）での配慮や工夫

3. その他、ご意見があればお聞かせ下さい。

2. 調査結果

分類		配慮が必要な行動・感覚・反応	住環境整備(ハード面)での配慮や工夫
壁	音	奇声、大声、多動	壁を厚くする、防音壁
		聴覚過敏	防音効果のある壁
	素材	朝、明け方になると戸を開ける	壁や戸を蹴っても音を吸収する。但し、破れたりしがたりできないもの
		破壊行動	壁をむしる人が多いので、どうすればよいでしょう？
車イス	素材	突起物など破壊	TV・スイッチ類など壁に埋め込み(タッチパネル化?)。世話人がPCから予定、メニューその他の必要な情報が送信できる。
		(電動車イスを使用)重さにより床面が浮いた状態が6年目程より発生する	重さに対応した床材が必要
		車イス利用者に対して	災害時の避難設備を必ず設置して欲しい(または体制づくり)
個室	音	車イス対応	玄関に屋根が必要。室内外への移乗など。ナースコール
		音・音楽の大きさに対する反応が個人によって大きく違う	個人スペースの遮音、かつ隣の部屋で異常発生時間こえる、わかる
		光、音、臭い	自分の空間が保つことができる部屋(光、音…気になりトラブルが多い)
		部屋の中での行動	部屋の中、プライバシー守りつつ中の様子感じられるづくり
食堂		ベツド、畳敷き、段差付きの居室を設け、各人に合わせた物をつくる	
洗面所		器物破損	食堂スペース(椅子、テーブル)、食器の片付け場所に工夫が必要
台所		水の流れへのこだわり	自動的に(一定時間で)水が止まる洗面所など
通路	視覚	冷蔵庫の確認が多い	リビングから冷蔵庫がみえにくい
		歩行が不安定、転びやすい	エレベーター、バリアフリー、角(かど)がない家具、床暖房
		寝室から浴室までの移動が楽、もしくは寝室が浴室に変身	寝室から浴室までの移動が楽、もしくは寝室が浴室に変身
		階段が好きな方が多い	踏み板の幅大きい、座れる
ドア	音	出入口	玄関から廊下までの段差を解消する必要がある
		ドアの開閉のこだわり	窓やドアを閉めても「バタン」と音がしない工夫
		ドアを閉める確認が多い	しっかりしまった音、感覚
		自由に過ごせる環境が必要な反面、勝手に屋外に出て行く行動がある事から	施錠をするのではなく、目でわかるなど、扉を開けると介助者に分かるしくみ
トイレ	視覚	引戸について	電動、自動ドアを使用して介助者による室内移動をスムーズに行うこと
		サッシの鍵を自力で開けて外に出て行くとする	
		入ってはいけない場所に侵入する	簡易的な施錠付き扉
		異食行為(排泄に関して)	排泄物が目で見えないような便器(確認がとれないと不便でしょうか?)
		トイレ	トイレの壁、床は木ではなく防水性の洗い流せる素材、落ち着いた色
		トイレでの拘り…物、窓、臭い	生理用品をトイレに流す人が多いのでトイレの配管の工夫、生理用品の工夫
		放尿、放便、掃除がしやすいもの	掃除がしやすいもの
		トイレにこだわる方が多い(水をあふれさせたり)	音や雰囲気を感じられるようリビングに近い(つまり解消しやすい)
トイレ	素材	便器に上手く排泄できない(臭いがつきやすい、水を流して毎日トイレ掃除が必要な時がある)	便器が大きい、消臭、水掃除しやすい
		トイレの温度、配置、暗さ	リビング感覚に近い
		トイレ使用時、はいていた下着等をトイレに流す	汚物以外の物を流せない、回収できるトイレ

分類		配慮が必要な行動・感覚・反応	住環境整備(ハード面)での配慮や工夫
窓	視覚	家にも気持ちひきこまらないように(重度の方)	外の景色が良く見える窓とか？四季の変化わかる。
	素材	窓ガラスに頭突きする(興奮状態)	割れにくい窓の選択
		窓の大きさ、高さ、階層によっても違う	2Fの窓の場合、高さによっては転落防止のための高さと防御システム
床	素材		床下は滑りにくいものか、滑りやすいものか、各人の援助スタイルに合わせる
		てんかん発作による転倒など	クッション性の高い床材、壁を使用
		自傷行為・・・壁、床に体を打つ	クッション性の高い床材、壁を使用
		床の感覚が好きな方が多い	
		突発的に動いてしまいケガをする恐れある	やわらかい壁、クッション性のある床、段差が少ない床、低い階段、ドアや窓にケガをしにくい優しい設計を。
浴室	温度	浴室、シャワー、水道栓の温度管理の困難	なるべく簡単かつ分かりやすい操作しやすい形状のもの
		浴室の広さについて	浴室、更衣室は車イス、介助者が十分活動できる広さとする
他	色	個人スペースを明確に伝える	色などで表示
		視覚による情報が判りやすい	各居室の色を分けたり、ロッカーの色を分けたり、自分が使う範囲と他人が使う範囲を判り易くする
		色彩の過剰反応	色彩、柄の配慮
	音	音が苦手	普段、音の鳴る物の鳴らない為の開発
	温度	体温調整が難しいと思う	室内温度が年間通じて一定になると良い(温度差が少ない)。湿度に強い家が良い(富山は湿度が高いので)
	視覚	ゴミにこだわる方が多い	ゴミ箱がめにつつきにくい、収納型
			視覚誘導
		歩行が難しい方の部屋へ来客が来た時にスムーズに確認できない	コードレスのモニター→モニターにカギの開閉のスイッチなど。声・モニターでの本人による確認
	臭い	嗅覚過敏	空調のながれにより、臭いが残らない工夫
	光	頭上に電灯があるとまぶしい	浴室にはやわらかい光を使う、間接照明を使用する
		停電時	段差解消機を含め、電気化のみでハードを整えたと停電時対応不可
		ぶつかりやすい	角が少ない、段差がないこと、柱、部屋のカベをなるべく少なくすること
		車から降りてすぐに道に飛び出す可能性	車庫から玄関までの動きで刺激が少ない
		水まわり、トイレ、浴室には	医療的な処置ができるように収納を設置したら良い
		異食行為(何でも食べる)	ゴム製の食器や家具(噛んでも噛みちぎれないもの)
		感覚マヒ	
			安全優先で本人の部屋を他者の集まるリビングなどに隣接するとうるさい
			床の段差はもちろんだが、収納などの凹凸
			緊急時の屋外への伝達手段
			配線、コンセントへホコリがたまるのを防止(見えない、気付かない)
		電気等のスイッチONのまま放置あり得る	センサー機付きの天井照明(人の影を室内で確認できない状態が一定時間(1時間程)続くとOFFとなる。エアコンがタイマー設定を自動で組み込む(夜中も連続運転を避ける)。TVやTELも連続3時間で自動OFFも可能とする。)
		転倒、もたれかかり、たたく動作あり得る	窓、出入り口のガラスにはフィルム貼る。(割れにくく、飛散防止)。角は突起させない。丸み帯びたカバー取り付け
		火の用心理解困難	ガスコンロ式は不可。IH式(連続稼働防止付き)

第 4 章

先進事例調査

1. 社会福祉法人はるにれの里の実践

社会福祉法人はるにれの里は強度行動障害を持つ自閉症の人たちの地域での暮らしを支えている事業所である。ここでは CH のハード面の整備について、主にその実践を紹介する。

1) 基本的な考え方

「障害が重くても、行動障がいがあっても地域へ向けた生活をめざす。地域の暮らしは自閉症の人ご本人が望んでいるからであり、その思いを支え、お手伝いすることが私たちの仕事である。」

2) ビジョン

- ・ 自閉症の特性を尊重、理解し、一人ひとりのバリアフリーを具体的につくりあげる。
- ・ からみあった糸をほどこしながら、情報処理不全という困難さを少しでも補ってゆけるよう、一人ひとりの発達的な状態像と不均衡さにあわせて、環境から発信される情報を読み取りやすいよう整理、工夫して見せる。
- ・ 行動障害を 100%なくすことは不可能であるが、低減を図ることはできる。
- ・ 40～60%低減したら、残りは地域で、長い人生の中で低減が図られるよう支援すればよい。

3) ケアホームの同居者

個別支援計画に基づき、特に、食事や入浴、居間や居室で余暇を過ごす時間の割合と過ごし方、廊下の移動、トイレや洗面所などの共有部分の使い方。エコラリアや奇声、物に対する同一性保持、反復する行動、他者の声や視覚的な刺激に対する反応など、感覚の特徴に注目しながら、利用者が暮らしの中で相互に発する刺激に不快感や混乱、困惑しないかを観察しながら、利用者の組み合わせを評価してゆく。

4) ケアホームのタイプ

ハード面（建物）は、一軒家 5LDK タイプ（4LDK も可能だが改装を要す）を基準としている。個室 4 室は、利用者の部屋として、1 室を夜の時間を支える専任職員の事務室兼寝室としている。

5) 場所

- ①地域特性と住民の障がい理解
- ②公園に面しているかあるいは比較的近い
- ③隣の家との距離（建築上1.8mは必要）
- ④生活改善センターなどの公的施設が隣接している

- ⑤コンビニエンスストアや大型商業施設が歩いて行ける
- ⑥バス停など公共交通機関が歩いて行けるところにある
- ⑦車3台の駐車スペースがある
- ⑧周辺に衝動的、反社会的行動へと発展する刺激が少ない
- ⑨契約できる医療機関ができるだけ近くにある
- ⑩バツクアップする事業所との距離が離れすぎではない。

6) 家賃

確実に受け取れることができる1級年金のみを前提に設計。20,000円～25,000円程度。

7) ハード面

①個室

部屋数は、4人の利用者4室と1人の専任職員用の計5室が標準である。自閉症利用者の中には、身体的な困難や視覚の特異性（見え方によって階段の昇降がこわいと感じる）があって階段を利用できないという事例もあるので、そのような場合は、1階側に2室を設けている。都市部では通常は2階建となり、利用者の部屋が2階3室（～4室）、職員の部屋が1階1室（～2室）という構成となっている。



<図表 4-1 ある自閉症男性の部屋>

昔から押し入れに入って寝るのが落ち着くので、親が独自で半分押し入れに入れたベッドを製作。破壊行動があり家具などを配置できない。



<図表 4-2 扉の工夫>

扉を思い切り開けた時の衝撃を吸収。音も吸収できる。

[illegible]

Architectural floor plan of a 2-story building. The plan shows various rooms including bedrooms (居室), a living area (LDK), a kitchen (キッチン), a bathroom (バス), and a toilet (トイレ). It also features multiple balconies (バルコニー) and roof areas (ルーフ). Dimensions are provided for various sections and the overall plot. A north arrow is located in the top right corner. A legend in the bottom right corner explains the symbols for fireproof doors and fire-resistant walls.

Legend:

- ☒ 天井点検口 450角 (アルミ製)
- == 防火上主要な壁仕切 PB t (8.5+12.5)

②冷暖房

自閉症の人たちの中には、暑さの感じ方に過敏で、ひどく暑く感じて不快になってしまう方もいるため、北海道といっても、クーラーは標準設置にしている。

暖房は火災のリスクを考えて灯油やガスを取り扱う暖房機器ではなくオール電化の暖房機器を使用している。破壊行動があり、壁から少しでも浮きでているものがあれば、はがしてしまうといった事例の場合は、経費がかかっても、最初からパネルヒーターなどストーブ本体を覆い、壁にしっかり固定できるストーブガードの設置を行っている。新築の場合は、設計段階から、壁の中にパネルヒーターを埋め込み、壁がフラットになり、視覚的にも目立たない工夫をしている。



＜図表 4-5 壁と一体的に設置された冷房＞
冷房機の動作音の低減と、機械本体が見えないように設置されている。



＜図表 4-6 保護された暖房機＞
火災や触ってやけどしてしまうことを避けるために保護されている。

③柱・コーナー



＜図表 4-7 安全に配慮したコーナー＞
角があると危ないので、要所にコーナーカバーを設置している。

④居間



＜図表 4-8 居間のテーブル＞

重厚な机、かつ脚は床に固定し、ひっくり返らないようにしている。



＜図表 4-9 ビルトインタイプの TV＞

テレビは見たいが壊してしまう可能性がある人向けに、透明ガラスをはめ込み、ビルトインタイプのテレビボックスを準備している。

⑤壁・天井

壁や天井については、できるだけ模様の入らないシンプルな色合いを選んでいる。木目模様や、詳細なデザインを素敵、綺麗と感じる人もいるが、自閉症の特性として、細部の模様に注意を奪われしめることがあるからである。

自傷行為があり、激しく床や壁に頭部を打ちつけたり、素手で強く叩く人の場合、あまり壁の強度を高めるとダメージが大きくなり受傷してしまうので、肩から頭部にかけては柔らかめ、それよりも下は、蹴られてもある程度強度があり容易には穴があかないという二段構造になっている。

また、音声チックや遅延性反響言語があり、頻回に大声で叫ぶ、壁を叩く、独語を繰り返すといった自閉症の人が暮らしているホームでは、必要に応じて、吸音材を内壁及び天井部に使用し、防音効果を高める方法もとっている。

⑥照明

ある程度の天井の高さがあって、照明器具に手を伸ばしても届かないよう設置している。蛍光灯のチラツキチラツキに注目したり、刺激になってしまうということが起こる可能性があるので、なるべく直接蛍光灯が見えないようにしている。

⑦トイレ

女性のケアホームでは、洋式タイプを最低でも2カ所設置するよう心がけている。可能であれば2階に1カ所、1階に2カ所程度設置している。また、男性のCHでは、洋式便器タイプで小用をする際、使いづらいとされる（周辺を汚す）人も多いので、和式タイプの小便器も可能であれば設置している。



<図表 4-10 トイレの工夫>

衛生を考慮して、2タイプの便器を設置している。

⑧浴室

洗い場を含めた浴室はある程度の広さがある。浴室専用鏡は、特別な反応を示す場合はあえて取りつけないか、直接見えないようにカバーをかけている。また、湯温の調整は、標準でサーモスタット混合栓を使用することで熱傷を予防している。

脱衣所は、2人の大人が入室しても余裕があるようにスペースを確保している。脱衣所と浴室の境界にあるドアは、浴室ドアのガラス部分を割った場合を想定して、アクリルなどの材質のものに交換し、浴室内の視界を確保と、割った場合の安全の確保をはかっている。

⑨窓

2階建以上の建物は、窓からの転落防止と飛び出し防止対策を行っている。また、ガラス部分は、破壊や自傷行動が起きた場合の安全対策として強化ガラスとなっているが、更に表面にアクリル板の貼りつけ加工を行いクッション性を高めている。



<図表 4-11 窓の工夫>

二階は特に飛び降り危険なのでストッパーを利用して 15cm 以上開かない様にしている。

⑩台所

台所が独立した部屋となっているか、冷蔵庫は別室保管で調理は対面キッチンという仕様のいずれかになっている。



<図表 4-12 冷蔵庫>

気になって空けてしまうので、基本的には扉をつけている。(施錠可のもの)

⑪防火設備

小規模社会福祉施設等に関する政省令の改正に合わせて、共用部や部屋のカーテンやジュースタンを、防災加工のものにする他、消火器、誘導灯、煙感知器、熱感知器、非常ベル、非常通報装置の設置を順次行っている。



<図表 4-13 非常ベル>

簡単に押せないように、カバーを取り付けているが機能せいは損なわないように工夫している。

⑫その他



<図表 4-14 一機能につき一扉>



<図表 4-15 カームダウン空間>

2. GHA の実践

1) GHA (Group Homes for the Autistic) の理念

『各年齢層の自閉症に対する理解がなされ、価値ある個人として、自立して成長し、地域に貢献できる環境を創造する。』

『組織の使命＝自閉症スペクトラム障害を持つ方のニーズに応える為の高品質な地域サービスを展開する。』

2) パートナーシップ

ノースカロライナ州にあるノースカロライナ大学 TEACCH 部とも連携し、人材育成や研究を行っている。GHA の利用者は TEACCH で評価を受けている。



＜図表 4-16 GHA のメンバー＞
真ん中に映っているのが、GHA 代表のドーン・アレン。

3) GH (ノースカロライナ州ではグループホーム) の支援

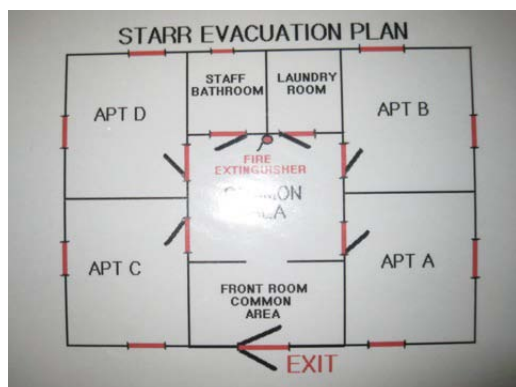
グループホーム (以下 GH) 内においては利用者 1 名に対してスタッフが 1 名、夜間の支援についても基本的には 1 対 1 での対応を行っている。

ハード面では、アメリカの住宅事情で、建物自体が大きく家間の物理的距離が離れているため、環境としてとても恵まれているといえる。



＜図表 4-17 GH の全景＞
とても大きな建物で、隣近所までかなり離れている。ここに 5 人が住んでいる。

居室については、それぞれ個室があり、ひとりひとりの興味関心にあわせた環境整備が図られている。ある GH の間取りは、真中にスタッフルームがあって、その周りに 4 つ住人の部屋があるという構造になっている。昼間はほぼマンツーマンで支援がつき、夜はひとり夜勤という体制である。部屋ごとにキッチン、風呂、トイレが付いている。自閉症の方が共同生活する場合、個別性を高めた方がいいという考え方を実践している。



＜図表 4-18 GH の間取り＞
個別の環境が保障されている。

GHA の考え方が象徴的に表れているのが、部屋の壁、家具が全て黒板になっている部屋である。ここの住人は落書きが問題行動だとされ、施設を転々としなければならない状況にあったが、GHA ではそれは本人の何らかの表現なのだから、尊重していくために、どのように工夫をするのかという考えで、本人理解と構造化を徹底している。書くことはこの利用者の表現と肯定的に捉えて、「思う存分書いたらいいじゃない！」ということで、壁もベッドも、すべてが黒板状になっている部屋を作ったのである。まず、彼らの行動を前向きなものに変える環境整備をして、精神的なゆとりを導いてから、様々な生活体験を積み上げていくことが大切にされている。また、それが GHA、TEACCH プログラムのやり方である。



＜図表 4-19 黒板の部屋＞
ドーン・アレン曰く「彼らなりのライフスタイル、彼らなりの文化があって何がいけないの？」

3. 大手住宅メーカーの取り組み

公開研究会の内容から大手住宅メーカーの取り組み事例を報告する。

障害対応の住環境整備 ～身体機能対応を中心に～

積水ハウス（株）住生活研究所 田中眞二

1. 住宅における障害対応技術開発の経緯

住宅における障害対応技術の開発の経緯について、当社が参画した公的プロジェクトを例に紹介する。

①新住宅開発プロジェクト（高齢者・身体障害者ケアシステム技術の開発）

1980 年から1985 年に実施された通商産業省のプロジェクトである。高齢者・身体障害者の居住環境整備は、障害の種類、程度が千差万別である。個別対応が基本となり、特別仕様、特注で対応することが普通である。故に、高価となり、また、技術者の知識・技量によって、完成品の性能が大きく左右されてしまう問題がある。このプロジェクトでは、障害によるニーズを体系化して、住宅・設備機器に求められる仕様を明確にすることで、工業製品として一定の性能を確保したものを安価に供給するシステムの構築を目指した。住宅用エレベーター、天井走行リフト、電動昇降キッチン、車椅子利用可能ユニットバスなど、現在、市販されているさまざまな住宅設備機器が開発された。また、「レベル移行住宅の概念」も重要な成果である。健常者から要介助者まで、いかなる移動能力であっても住み続けることができる住宅のモデルを提示した。昨今取り組みが本格化しつつある"ユニバーサルデザイン"の住宅の先駆と位置づけることができる。



図1 新住宅開発PJ プロトモデル

②長寿社会における居住環境向上技術の開発

建設省が1987 年から5カ年にわたって実施したプロジェクトである。この成果を受けて、1995 年に「長寿社会対応戸建住宅設計指針」が発表され、これからの住宅は「加齢等による身体機



図2 ウェルフェアテクノハウス 神戸

能の低下や障害が生じた場合にも基本的にそのまま住み続けることができる」³⁾ものとすべきとされた。住宅金融公庫バリアフリータイプ基準、「住宅の品質確保の促進等に関する法律」の「日本住宅性能表示基準」などに反映され、我が国の住宅のバリアフリー化に多大な貢献を果たした。同指針は、2001 年「高齢者の居住の安定確保に関する法律」の「高齢者が居住する住宅の設計に係る指針」に継承された。

③先端在宅介護機器システム開発（ウェルフェアテクノハウスプロジェクト）

1993 年に始まった、通商産業省のプロジェクトである。要介護老人の急増を防止するために、要介護者の自立促進、介護者の負担軽減資する福祉機器の研究開発を目的とした。「ウェルフェアテクノハウス」（図2）と呼ばれる実験住宅を全国に建設し、各地域における産官学の連携によって在宅福祉機器の研究開発を進める、というものであった。ウェルフェアテクノハウスは、在宅福祉機器を搭載した近未来型モデル住宅として一般に公開され、地域への啓蒙活動にも活用された。

2. 積水ハウスの取り組み

たとえ現時点で家族に高齢者がいなくとも、同じ家で20 年30 年と住み続けるならば、家族の誰かが間違いなく高齢者になる。あるいは住まい手が変わったときに、高齢者や身体障害者が入居する可能性も否定できない。年をとって、力や感覚が衰えた状態になっても、安全に快適に住み続けられる性能を持つことがすべての住宅に必要である。

このような考え方を積水ハウスでは「生涯住宅思想」と呼び、「いつもいまが快適」をキャッチフレーズとして、1980 年代半ばから、バリアフリー設計を標準的仕様として住宅に取り入れてきた。例えば、出入り口の敷居を無くす、廊下と和室との段差を無くす、階段やトイレに手摺を設置する、などといった設計である。

また、設備機器や部品について、高齢者を被験者とした人間工学的実験を重ね、その結果を反映したより安全で使いやすい製品を開発してきた。図3に示すユニットバスは、そうして開発した住宅部品の一例である。主な特徴は、敷居段差が少なくゆったりとした通過幅の出入口、



図3 人間工学的知見に基づいて開発されたユニットバス。



図4 高齢者による入浴動作実験。

浴槽に跨ぎ入る際に使用する握りやすい手摺、洗い場床・浴槽底の滑り止め加工などで、より安全で使いやすい設計となっている。普段の入浴が安全快適に行え、万一、シャワーチェアによる介助入浴を行うようになった場合にも特別な変更なしにそのまま対応することができる。

開発にあたっては、浴槽に跨ぎ入る際に握る手摺の位置、跨ぎやすい浴槽縁の高さ、適切な浴用イスの高さ、シャワーフックの位置など、様々な観点から高齢者を被験者とする実験を行い、得られたデータを分析して最適な寸法・形状を導き出した（図4）。このように、高齢者を被験者とした実験を行って設計要件を明らかにしていくアプローチによって、階段、システムキッチン、洗面化粧台、トイレ手摺など多数の部品を開発してきた。

高齢者実験から得た知見に基づいているからといって、これらの設備・部品を、高齢者のためだけの特殊なものと位置づけているわけではなく、高齢者を含む全ての顧客に対して提供できる体制をととのえている。特に、階段、ユニットバス、トイレ手摺など、安全性に関わる部品については、基本的に、積水ハウスが提供する全ての住宅に搭載されるものとしている。このように、全ての居住者にとって共通の安全・安心と使いやすさを実現する設計、部品については、住宅が持つべき当たり前の基本性能として位置づけている。現在では、主要な住宅部品について、安全性、使いやすさを実現するためのデザイン・ガイドラインを制定し、積極的な運用を行っている。



図5 昇降しやすい回り階段

同じ4段回りでも、単に45度ずつ割るより、踊り場のように使える広い段と狭い段を組み合わせるほうが、安定したリズムで昇降できる。



図6 トイレ手すり

立ち座り動作に関する高齢者実験の成果に基づいて生まれた新しい手すり。立ち座り動作時の前傾姿勢をサポートする斜め手すり部分と、立ち上がるときにしっかり手をついたり、座り姿勢を安定させるための棚部分から構成される。



図7 車いす使用者のためのトイレの例

3. 身体障害などによる特別なニーズを持つ顧客への対応

一方、身体障害などにより、個別かつ特別な建築的ニーズを持つ居住者がいる。車いすから便器に移乗するために十分なスペースが必要であるとか（図7）、床を這って移動するので便器を埋め込んで欲しいとか（図8）、また、介助者の労力を軽減するためのリフトを設置したい

（図9）、などといったニーズである。このようなニーズは、個別かつ特別であるため、前述のような基本的な性能ではカバーしきれないものであり、これらのニーズに対応するためのデザインシステムが必要となる。

積水ハウスは、身体障害者に対して配慮された住宅を、これまでに1500棟以上建設してきた。この過程で培ったノウハウを体系化して、身体障害者の個別のニーズを的確に把握して最適な解を提供するための様々な資料、ツールを整備してきた。しかし、資料やツールを整備するだけでは不十分である。これらのツールを的確に使いこなして、実際に住宅設計を行う人材を育成することが最も重要なこととなる。



図8 床を這って利用するためのトイレの例



図9 介助者の労力を軽減するためのリフトを設置した浴室

4. 障害対応設計研修（SH-UD マスタープランナー養成研修）

本研修の研修生は、全国事業所における設計部門の責任者またはそれに準ずる立場の者で、15 年程度の設計経験を持つ者が多い。これまでに約300人が修了している。筆記試験と実技試験に合格することが修了要件となっている。さらに、東京商工会議所が実施する福祉住環境コーディネーター2 級試験に合格した者に対して、「SH-UDマスタープランナー」という社内資格を与え、ユニバーサルデザインの推進役としての活躍を称揚している。

研修は、ユニバーサルデザインの概論、障害の原因と症状に関する知識、車いす等福祉機器に関する知識、事例紹介などを主として座学により学ぶ。加えて、ハンディキャップによる身体状況を研修生本人が模擬して様々な住宅部位の使い勝手を「体験」を通して学ぶ。ほぼ半日を使って、車いすを使う場合、介助される場合等々、様々な身体状況における動作の特

徴および住宅設計での対応方法を、玄関、建具、寝室、洗面、浴室、トイレ等の住宅各部位に関して、自身の体験を通して学んでいく。最も疲労するが、最も面白くかつ実践的なプログラムである。研修後の研修生のアンケートよりコメントを拾ってみると「その人（筆者注：障害対応設計の対象者のこと）の立場は頭のみでは理解することはできず実体験する事により本当の意味での理解に近づいたと思う。非常に役立つ研修だと感じた。あまり設計する事が少ない案件で学ぶ機会が少ないため、この研修で自信がついた」「全体的に濃密なスケジュールで疲れたが、たった3 日間でここまで学べてありがたかった」等、全体的に高い支持を得ている。

開始後約5年を経て、ほぼ全国事業所へ研修修了者を配置することができた。これにより、積水ハウス全体として、障害対応設計に関する能力は確実に向上した。しかし、それだけではない。冒頭にも述べたように、元々、積水ハウスは、顧客のニーズを丁寧に訊きそれを住宅の形に仕上げる「個別対応」が事業の柱である。障害対応設計は、個別対応の究極の姿と言え、事業の根本を全社で改めて確認するきっかけを持つことができたことが重要と考える。

（機関名称などはすべて当時のもの）



図10 研修風景 その1

住宅の玄関には必ず靴を脱いで上がるための段差がある。この段差が、身体障害（この例は歩行困難）の場合にどのように影響するか、適切な手すり位置や、ベンチ高さについて学ぶ



図11 研修風景 その2

車いすに乗った状態で、玄関段差を昇降する体験。車いすを常時使用する場合は、玄関段差を可能な限り低くするべきことを自らの体験を通して学ぶことができる。

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所: 日本の将来推計人口（平成14 年1 月推計），国立社会保障・人口問題研究所(2002)
- 2) 国立社会保障・人口問題研究所:日本の世帯数の将来推計(全国推計)2003(平成15)年10 月推計，国立社会保障・人口問題研究所(2003)
- 3) 建設省住宅局住宅整備課，長寿社会対応住宅設計マニュアル戸建住宅，風土社，東京(1998)

4. 考察

先進事例を調査する中で CH を取り巻く様々な課題と可能性が見えてきた。そこで本調査プロジェクトと関連する CH の調査プロジェクトとの合同で、研究成果を総括するシンポジウムを行った。そこでのパネルディスカッションを考察にかえて記載したい。

公開討議「ケア・ホームの先進事例とこれから」

NPO 法人全国地域支援ネットワーク 代表 田中正博
社会福祉法人北摂杉の子会 常務理事 松上利夫
社会福祉法人はるにれの里 副所長 佐藤貴志
積水ハウス株式会社 住生活研究所課長 田中眞二
【コーディネーター】 NPO 法人ふわり 代表 戸枝陽基

※読みやすくする為に本文は若干編集されています。

また、今回の研究の趣旨に合わせて内容を一部カットしています。

(戸枝)

これらの研究は厚生労働省の 3 本の研究事業が同時に進行しています。そのため、3 つを連動していった方がいいのではないかという、高原専門官の意見で、三研究を関連させて考えることとしました。

3 本の研究事業の一つは、全国地域支援ネットワークの田中さんが中心になって進めている「安心安全コールセンター」構想の研究です。これは、障害者自立支援法を進めていくために 1,200 億円の予算が組まれている基金事業の中のひとつです。

この研究は、ケアホーム（以下 CH）を中心として地域の中で障がいのある人が暮らしていくときに、バックアップの仕組みが必要ではないかということからスタートしています。例えば、CH の世話人さんが急に具合が悪くなった時にどうするのか、ということへの見通しは、全くないのが現状です。通所系の施設がバックアップすればいいのではと考えられなくもありませんが、基本的に、通所事業所は、夜には職員を配置していません。そういう事態が起きたときにバックアップする仕組みとして考えています。

障がいのある方の地域生活のバックアップを考えると、2 つの切り口があります。ひとつは重度心身障がいの方が CH や自宅にいる時に、お母さんや支援員が倒れた場合などでも支援ができるということ。もう一つは、行動援護対象である、自閉症や精神障がいの方への

緊急時・混乱時の行動援護ができることです。

このようなことへのバックアップ機能として、コールセンターのようなものがあって、CHや自宅にいて緊急に困ったことが起きたときなど、そこへ行けば、24時間明かりが点いているというものです。入所施設は安心だという親御さんに、グループホームやCHに比べ何が安心かを聞くと、常に明かりが点いているので、何かあった時に助けてくれるという安心感があるという答えが多く返ってきます。それを地域生活支援の中で作ったらどうなるかというのが、安心安全コールセンター構想です。

そのようなコールセンターができたとして、重い障害のある人の地域生活をバックアップできる人の存在が重要です。現在日本に、例えば自閉症の人が混乱してパニックを起こしているという現場に入った時、その人の障がい特性は何か、今現在混乱している理由は何か、家族に「こういう見立てなので、こういう関わりをして欲しい」とか、「環境をこのように変えて欲しい」といったことを、きちんとアドバイスできる人材がどれくらいいるのでしょうか。また、いるとしたら、その人達はどうやって育ってきたのでしょうか。

今、日本には約1,500の自治体がありますが、そうした自治体に一人ずつ必要として最低1,500人は必要ということになります。その人材を育てるためにはどうするのが松上さんを中心とする社会福祉法人北摂杉の子会チームの研究です。そして、もうひとつが、積水ハウスさんにも協力いただいている、社会福祉法人むそうの研究で、行動援護対象者や重度心身障害者のCHを地域に増やしていくために、何をアセスメントし、どのような建物をつくれればいいのか、ということを考えるものです。

この研究のはじめに、積水ハウスの方に、自閉症の人のバリアフリーを研究したいと言ったところ、体にハンディがあるのですかという質問をうけました。そこで、体はいたって元気な方のバリアフリーは何かということをレクチャーとキャップハンディでお伝えしたところ、例えば白色電球の光の周波数によるちらつきの加減で不安定になるとしたら、全くちらつきのない周波数のLED電球にしてはどうかというような提案が即座に出てきました。

また、自分の出した声がコンクリートの壁に反響して自分の耳に戻ってくるような部屋で、自分の出した大きな声に驚くといった具合にどんどん興奮が高まる人がいるとして、音が跳ね返ってこないようにすることはできないかということには、音楽室のシステムはどうかという提案です。音楽室の壁は柔らかく音を吸収するようにできているとのことでした。

このように、現在の建築技術が、重い障害のある人たちの暮らし・家・CHに活かせる可能性が見えてきています。

「はるにれの里」は人材養成も建物の工夫も取り組んできて、さらにバックアップセンターも備え、全体のフレームができています。

現在、行動援護対象者の大半は、自閉症と知的障がいを合併している人です。知的障がい

を伴う自閉症の人は、これまで知的障害の枠の中で教育や福祉サービスをうけてきました。そのため、自閉症は知的障害の中に含まれるように思われがちです。しかし、ふたつの障がい、全く別の障がいです。療育手帳を持っている自閉症の人というのは、実は、ふたつの障がいを合併しているということなのです。発達障害者支援法の成立により、知的障害のない自閉症スペクトラムやその他の発達障害も、障がいとして認められることになりました。

知的障がいはなく、場合によっては一般の人（自閉症ではない人）よりも計算が速くできたり、IQ が 150 くらいあったり、漢字をたくさん知っていたり、高校野球も第 1 回からの結果を全て覚えているなどという人もいます。なのに、信号を認識して道路を渡れない、挨拶が上手にできない、手伝ってもらわないと着替えもできない……。そのために、社会性がないということで就職ができない。というような人たちが、支援も受けられずにいるのが現状です。

民主党政権になってからの大きな流れのひとつに、このような発達障がいの人も自立支援法の対象にするということがあります。7 月以降の改正案で通れば対象となるわけです。

先ほど田中正博さんから説明のあった、フィジカルなケアとメンタルなケアが大変大事なポイントだと思います。

積水ハウスの田中さんに、「セキスイのバリアフリーはすごいですね。」といったところ、「ありがとうございます、だけど片落ちです」とのこと。なぜかという、フィジカルな、身体的なバリアフリーの研究はしていますが、メンタルなケアのバリアフリーをしていないということなのです。さらに、この研究をはじめてからすぐに調査してみたところ、日本ではメンタルなケアのバリアフリーは研究すら見当たらないとのこと。このことは自立支援法も介護保険法も同じです。

体に触って助けるのは、誰にもわかり易いですね。しかし、例えば、自閉症の方と一緒にお茶を飲んでいいる時に、その人がカップを投げるという行動に出たとしましょう。そこを、投げないように、さらには、そのまま落ち着いてお茶を飲めるように支援する。という時の、支援者のスキルや緊張度のようなものは、目にみえないので評価されにくい。悪いことに、もし仮に、そのままカップをなげてしまった場合、それを落ち着いて片付け、周囲に謝りつつその人を外へ連れ出すというような行為のほうが、支援者は大変であると評価されてしまうのです。

このような場合の、自閉症の人の行動と、対応した人のスキルとか緊張度がきちんと評価されないと、いつまでたってもメンタルなケアを行なう人のきちんとした支援は進まないでしょう。このことは、認知三障がい（認知症、自閉症、精神障がい）に共通していえることではないでしょうか。

前述のように、例えば建物に関しても、何ら研究が行われていないのです。置き去りにされ過ぎていないでしょうか。

福岡さんの考え出したこの表で、フィジカルなケア・メンタルなケアがあるということを言語化したことは、介護あるいは障害者支援を考える上で、革命的なことだと思います。

この表では同時に、インドアのケアとアウトドアのケアという切り口があるということが現されています。就労支援と外出支援がそれにあたると考えられます。メンタルなケアの人を外へ連れ出すという支援が行動援護だとして、そのような人たちに、CHの中できちんと寄り添う支援をどうするのか？通所系サービスではどうするのか？ということに対して、現在のところ答えはありません。

例えば4人のCHであっても、音過敏などの過刺激を受けると不安定になる人達4人だとすると、コンクリートの音が反響する室内空間で、混乱した人が奇声を発すると、次々と他の人も叫び出すということが起こるわけです。そして全員行動障がいだといわれて安定剤を服用などということが、笑い事ではなく、この国では起きているのです。

このことをどう考えますか？「親御さんたちにとってもつらいことだろうなあ」ではすまないのではないのでしょうか。私たち福祉人としてのプライドをかけて、それに対してどうするのかを考えなければいけないと思います。

不適切なインドアのケアだから混乱しているということと、外で支援する時にイレギュラーな事態にどう対処するのかということ、それは、メンタルなケアという点では、共通の課題です。

Q：メンタルなケアを多く必要とする人に個別支援をしているのが行動援護ですが、CH内行動援護や、通所施設内行動援護というような考え方についてはどうお考えになりますか？

（田中正博）

自立支援法を促進するため25億円が13億円になって、事業仕分けで廃止が決まった研究事業ですが、のぞみの園についている事業があります。行動援護研修のインストラクターの養成と中央セミナーの実施ということで今年は京都、福岡、宮城の3カ所で進めてきました。

初任者、現任者研修プログラムの開発ということと同時に、行動援護を普及するための広報的な意味合いもある研修です。自治体で実際にどんな風に行動援護が取り扱われているかということ聞いたところ、「ホームヘルプの頃の移動介護が生まれてなかったので行動援護も行なっていません」という全く話にならないような現状が明らかになってきています。8割の自治体がそんな事情でした。

障がいのある人、特に知的障がいの人に社会参加、余暇などが必要だとしたら、地域にいる間は家族が同居しているのだから家族が行なうべきだという考えです。「では、40歳、50歳になっても、年老いた母親がやるのですか？」と聞くと、当然のように「そうです」という、そんな価値観が当たり前ののです。

では、「行動援護はどういった位置付けですか？」と聞くと、「超暴れている人を押さえに行く」という答えが即座に返って来ました。

質問に関して言えば、そうした価値観を破らない限り、行動援護対象者を日常的に支えようとしても、報酬で支えるしかないということになります。

強度行動障害判定で点数が高くなればなるほどお金がもらえるという仕組みです。そういう人たちを施設へご案内して、(行動障害が)よくなって報酬が出るとしたら皆さん頑張って支援をするのかもしれませんが、放っておいて悪くなると報酬が出るという最悪の状況なのです。そういった価値観をひっくり返し、日常の支援が必要だという予防的発想がない限り、CH型行動援護や通所型行動援護は成り立たないでしょう。

今の行動援護評価12項目24点満点も、行動障害という目に見えるものが評価の基準になっているのはやはりまずいだろうということで、行動障害を起こすような引き金になる要素障がい特性を持つ人を、どうやったら見つけれられるのかというところに、この調査研究の結論をもちたいと考えています。

そうすると、それを評価できる人は誰なのかということが、重要なポイントになると思います。「行動障害を起こす引き金となるような特性をもっているかどうかを見立てる人がいて、その引き金を引かないよう見守る支援が利いてれば落ち着いた人になれるけれど、それを全部取っ払ってしまっているのが非常に困った人になっています」という見立てのできる人は恐らく全国の施設にたくさん入所されているはずですが、制度的には正しく評価されていません。そこが一番の問題だろうと考えています。

(戸枝)

施設に混乱した人が入ってくるとか、混乱していなかったのに入所したら暴れ始める人がいた場合、音過敏などの障がい特性を理解していないとさらに混乱が増すことになります。しかし、母親から離れ、夜になって寂しくなって眠ることができずに暴れていると思われたりしているわけです。音過敏の人にとっては大きなスピーカーの前に立たされているような感じで苦しいから暴れているのだし、頭を叩いているとか人に噛み付いてくるのは助けて欲しいというメッセージなのに、です。

入所施設には強度行動障害という物差しとチェック項目があり、暴れている人には国から加算金が出ます。しかし、パニックになっている人を受け入れてくれるところがないのでということで受け止めたら、本人がいい状態になった。とすると、そこを、本人状態だけで判断されるので2年で区分が2つ下がってしまった。というようなことが実際に起きます。真面目にやると貧乏になって、暴れさせると儲かるという構図です。

(松上)

行動障がいについては、ずっと支援の評価を入れなさいとってききました。頑張って取り組み、行動改善がなされると障がい程度区分が下がり報酬単価が下がるのはおかしいです。

虐待に近いような施設はたくさんのお金がもらえることになっています。高原さんは3年くらいで評価の仕組みを変えていきたいと言っていました。評価のポイントをどう作るのかが難しいと思います。

アメリカでは、例えば、GHAがたくさん報酬をもらっているというのは、まさに第三者の評価があって、事業者に対するサービスの質のレベルを評価して、それに基づいて報酬が支払われているからだと思います。だからノースカロライナでは、行動障がいを起こしてしまった人達の落ち着いた暮らしを実現しているのでしょう。こうした仕組みが日本の中でも、作られることが大事だと考えています。

(戸枝)

Q：入所施設では、音が反響する空間であったり、人がたくさんいるというような不適切な場合があって混乱はするけれど、日課などは一定でイレギュラーが少ないというような点では、自閉症の人たちにとっては落ち着いてくる要素になったりしているのでもいいとされています。

CHでは、地域生活にはイレギュラーなことが多く大変と言われますが、それが社会性を支援するチャンスが増えることと考えることができるのではないのでしょうか。例えば、近所の人が回覧板を持ってくるなどいろいろなことがあっていいと思うのですが、田中さんはその辺りについてはどうお考えですか？

(田中正博)

行動援護の研修の中に、ロールプレイングがあります。

実践から積み上げていったこと例えば、例えば移動支援で出かけたスーパーなどで、目を離したすきにもものを食べてしまったとか、商品を散らかしてしまったという時、親御さんだとその場で本人を怒り、支援者だと怒らないまでも、お店の人に謝りながら早々に出て行くということになることが多いと思います。そうしたことを乗り越え、きちんとした説明と同意を得るために職員が付き添うところまでを演習として行なっています。職員の役割として、単に本人を支援するだけでなく、社会とのつながりを意識した関わりをする事に専門性が必要になり、その分を給料としていただくのだ、ということを学んでいただくことが目的です。

そういった価値観が求められているのだと思っています。

(戸枝)

はるにれの里の実践では、入所施設の中での暮らしから地域の中での暮らしへ移行していますが、この国では行動障がいがあって大変なことになっている人達は社会の中で暮らせないから入所施設でしょ、というのが当たり前の価値観です。オリジナルの暮らしやひとりひとりの障がいに合わせた暮らしを施設で用意できればいいのですが、オーダーメイドで用意

しようとする CH でないとできません。

恐らくはるにれの里やアルバマーレ GHA の実践はその辺に気が付いたということだと思います。GHA ではグループホームばかりを行なっていますが、アメリカにも病院や入所施設があってそこをはじかれた人に対してどうするかといった時に個別支援だったということだったのだと思います。

Q:その辺りの展開について、はるにれの里の実践を通じての思いを佐藤さんお願いします。

(佐藤)

私達も当初は重度の自閉症の方たちを 8 割ほどお預かりした入所施設で、混乱の極みの中で支援していました。そうして模索している時に佐々木正美先生などのご支援をいただき、バリアフリーとはどういったものを少しずつ勉強し、支援の戦略などを職員間で統一しながらやり始めてきました。

そのような中で、統括施設長の木村から、行動上の問題が大変な人から地域への移行を進めようとの提案があった時には、何を言い出すのかと思いましたが、実際に始めて見ると、入所施設という環境の中で苦しんでいる人ほど行動上の問題が激しくなるということがわかってきました。その苦しみから解放するには環境を変える必要があると気づき、地域での暮らしを展開してきました。

自閉症の人は自分の思いをうまく伝えられないので、支援者がその思いを汲み取っていかねばなりません。それができると、例えば入所施設で 1 週間に 10 回人を叩いていた人が CH へ行くと 1~2 回しか人を叩かなくなるというデータがでます。実際にデータを取ってみると本人の困り感が減っていることがはっきりします。入所施設が駄目だということではないと思いますが、本人たちが望んでいる暮らしは入所施設の中では作り辛いのだろうという思いで地域の移行を進めています。

(戸枝)

松上さんもかつて施設での暮らしを、集団的なものから個別の暮らしへと移したとき、問題行動というか感情表現、つまり不適切に見える感情表現が明らかに減ったということを調査されていますね。

(松上)

今から 20 年ほど前、知的障がいに伴う自閉症の方に特化した入所施設の施設長になりました。施設長を任命された理由は若くて体力があるというもので、赴任をしましたが、当初はとても悲惨な状況でした。物を壊す、顔面を叩いて網膜剥離で失明状態、トイレに入れば便だらけで出てくるという状態です。また、会議をしているといきなりガラスが割られて頭の上に降ってきたこともありました。

利用者にこんな質の暮らししか提供できないのではいけない！という施設長としての責任を感じ、当時、学園の先生の研究を見ながらユニットにしてみようと考え、小グループ制を導入してみました。それまでの50人の集団の暮らしの時に、厚労省の基準である行動障がいの得点をつけてみてから、10人単位のユニットに切り替えました。

行動障がいは環境の問題です。職員も環境の一要素です。常に同一の対応をしなければ混乱させることから職員も固定して支援しました。それによって1年間で重度の行動障害が改善されました。1年で職員の専門性がそれほど高まるとは思えません。つまりは環境の問題の重要性ということを感じ取ったわけです。今は、障がいの問題は環境の問題だという流れになっています。

施設における職員による虐待問題がありますが、施設そのものが虐待になっているといえないでしょうか。音過敏の利用者に50人の暮らしの中で暮らせるのは明らかに人権侵害、虐待だと思います。そうした視点から、彼らが暮らしやすい環境を私たちが地域の中でどうやって提供していくのが重要な課題だと思っています。

（戸枝）

どう考えても今の日本の現状や、定説と思って行なってきた支援はおかしいと思われます。少なくとも行動援護や自閉症の行動障がいのある人達への適切な支援は、現在の日本では見えていません。そこで4人方々の実践や研究に基づくご意見を活かしていくことが必要だろうと考えています。

メンタルなケアのバリアフリーは絶対にあります。積水ハウスの方々にも自閉症の研修を行っていただき、いろんな提案が出されているようですが、その辺の見通しも含めたお話をお願いします。

（田中眞二）

メンタルな部分でのバリアフリーはどこから手をつけたらいいのかわからないのが現状でした。それがたまたま戸枝さんから声を掛けていただき行動援護を取っ掛かりとしてはじめることができました。

もともと我々は身体障がいのバリアフリーを行なっていました。身体障がいのバリアフリーをきちんとすることも、一人ひとりの症状が異なるので難しいことだと思います。技術があってそれをポンと提供すればいいというものではありません。

メンタルなバリアフリーはさらに難しい問題です。身体のバリアフリーは見れば、ある程度までは、必要な支援がわかります。それに対しメンタルなバリアフリーは何をどうすればいいのかを建築側の人間だけでは答えが出せません。我々ハードウェアを提供する人間と、バリアフリーを必要とする人に必要な環境支援を見立ててくれる人がいないとできないと思います。

もう一つは身体障がいの方は一人で暮らしている人がたくさんおられますが、メンタルの

バリアフリーを必要とされる方が一人で暮らすことはまずないと思います。人的な支援というソフトウェアが合体した形になるでしょう。そのため、メンタルなバリアフリーをハードだけで解決できる事例はあまりないのではないのでしょうか。

（戸枝）

田中さんは、福祉側の私たちと、ディスカッションを2～3回しただけで、「光や耳、臭いのコントロールができますか？」と言うと、できますと即答されました。そこで、光や音、臭いのコントロールの研究をなぜ行なっているのですかとお聞きすると、例えば不眠症のニーズなどがあるからだということです。技術的にはほとんどなんでも対応できると思われるとおっしゃいます。それだけ技術は進んでいるのです。

しかし、ここでもっと感動したのは、「何らかの商品はあるのです。しかし積水の技術よりも、何が必要かという見立てをきちんとできる人が重要なのです」と言われたことです。

※表（住環境アセスメント）参照

もし、5～6歳の自閉症の子どもを持つ方から家を建てる相談を受けたときどうするのかいうと、まず、本人に会って見立てをすることになります。

「相手からのメッセージをキャッチすること」、「相手に気持ちを伝えること」、さらに「感覚の特異性」、「変化への適応の困難さ」などなどといった自閉症の特性一つひとつについて、家での暮らしの部分での行動を理解しておくことが必要です。

例えば小さな変化にも混乱する、ものの場所にこだわる、初めての場所に入れない、初めての人と行動できないといったことが想定される人。そんな場合に、変化をうけとめてもらうための支援としてスケジュールやワークシステムが必要となります。そうすると、トラジッションの場所なども必要と判断するわけですね。それが、設計の段階から図面に落とし込めることになるわけです。

また、パニックになったときなど、気持ちを整理して立て直すことに対し、例えば、はるにれの里では専用の小部屋を用意しています。パニックになったり不安定になった時や落ち着きたいと思った時にこもる部屋、カームダウンスペースです。その部屋はちょっと薄暗いなど刺激を少なくし、居心地のいい場所になっています。そうした場所が必要になるのではないかとか、どこへ設置すればいいのか、寝転べる大きさがいいのか、膝を抱えてうずくまって体にぴったりあったサイズがいいのかということも人によって違います。それも、設計図に入るわけです。

この表はまだたたき台の段階で、人によってはもれる部分も出て来ると思います。でも、もれがあれば付け加えればいいのであって、今大事なことは完璧であることよりも叩き台を作ることと、こうしたチェックを設計者と一緒になって丁寧に行い、積み上げていくことではないかと考えています。

こうしたやり方をしていくと、積水ハウスの何でもできる技術と、福祉の側のきちんとした見立てのできる人とが一緒になり家を作りあげていくことで子どもの育ちが全く違ってくるのではないのでしょうか。

こうしたことが不適切な環境の中で二次障がいによる混乱に陥ってしまった人を立ち直らせる時にも役立つだろうと考えられます。

このアセスメントを、今すぐ全ての施設の職員ができるか？というところ少し難しいと思います。こうしたことのできる人がフリーでも生活できるような働き方（仕組み）を作っていくことも大切ではないのでしょうか。

私たちは仮称で行動援護士と呼んでいます。・・・。

「人が大事」ということに気付いて、松上さんの研究に戻るわけです。

こうしたことが果たして本当に本人の満足につながっているのかどうか、アメリカで見て来たことを報告しながら考えてみたいと思います。

「働く」ということでは、例えば、レストランの厨房で、冷凍のナゲットを5個ずつ袋に詰める作業を自閉症の方がやっていました。そこではその人のためのスケジュールが用意され、ワークシステムでひとつひとつ作業を確認しながら行っています。調理の段取りの仕事です。こうした仕事なら日本でもいくらでもあると感じました。

ここでうらやましいと思ったのは、マンツーマンで支援者がついていてということです。この人達は時給8ドル50セントくらいとのこと。それで、自閉症の人達に指示したり適宜支援をしたりすることのできる人が寄り添っているのです。

5億円で60人くらいの地域生活支援、日本とそう変わらないのではないのでしょうか。

また、人がいると駄目な人の場合、人がいない時に働けばいいということで、開店前の誰もいないレストランのトイレ掃除を2時間かけてしている方もいました。この人のデイサービスでの様子を見たところ、公文のような計算式や塗り絵をしたりしていたので、知的にも重度の人だと思われます。むそうでは「福祉的就労だ」という判断で地域に出せないレベルだと思います。

「よく教えましたね、受け止めてもらえましたね」と聞くと、「お金をもらわずにまずは行くんだ。役に立てたらお金くれるさ」とのこと。我々は雇用契約にこだわりすぎていると反省させられました。

暮らしぶりを見ると、何もない自由時間ということ自体が混乱を引き起こさせてしまうので、CHの暮らしでも、時間の概念がないとか、それを放っておくと混乱してしまう人に対してはきめ細かな時間のマネジメントなど組み立てがされています。例えば、封筒に何かを詰める作業をホームでのくつろぎの時間にやっている人がいましたが、何となく就労に結びつくようなワークでもあります。どうせ時間を過ごすのであれば将来的に生産に結びつけば

いい、という意識があちこちで感じられました。この人は、スケジュールが決まっていて、一連の作業が終わったらリビングへ移動して行きました。

こうした組立が暮らし全体の中にあるのです。自由時間という概念は、それを楽しめる人だけに通じるものなのです。

モップのもにやもにやした感触が大好きというこの高齢の方は、ひなたぼっこをしながらもにやもにや感を楽しんでいました。アクティブに何かを行なうというだけでなく、その人が寛げる時間を過ごすことのできるツールと時間の組み立てを作ることが支援だという考え方で貫かれていました。

日本とアメリカの人材づくりの比較ですが、日本ではヘルパーになって重度訪問介護とか行動援護などの研修を受け、さらに介護福祉士になるのは就職して大体3~4年目です。

知的障がい一旦就職してストレスを持って統合失調症に移行している方の見立てをする場合、そもそも発達障がいがあって精神障がいへ移行されているのか、ストレスによってなったのか、ということでアプローチは全然違ってくると思います。

そうした場合、精神障がいのスーパーバイズができるという人でも、発達障がい者のことが全くわからない人がまだまだ多いのが現状です。両方を勉強しなければ難しいでしょう。

本人が40~50代で面倒を見ていた親が倒れた場合、それまでは地域福祉でといっている、入所施設に投げて職員が最後まで見ている。こうしたことも地域で受け止めるようにしなければいけないでしょう。

またアメリカでわかったこととして、ケア・スーパーバイザーという人がいるということです。行動援護的アドバイスをする人材がいるのです。いくつかの施設と契約をされていて、施設のスーパーバイザーへのコンサルタントをする事を仕事としています。

それから、医療的介護士という障がいのことがよく分かっている看護師になるといったフレームがアメリカにはありますが、日本にはありません。さらに社会チームがありません。

はるにれの里の場合、木村さんを中心に補助金をとってきて、土地の転用を行ない、行政と話し合い、地域住民との合意形成を丁寧に行なえるプロがいます。そうしたことができずに、地域で暮らすといってもどうやるのか、というところでとどまっているのが障害者自立支援法の一番のつまづきだと思っています。

アメリカのGHAの代表であるドーン・アレンは大学院まで行き経営学の勉強までしているとのことでした。彼女の指摘していることで重要だと思うのは、組織の一番下の階層からきちんと上がって来た人以外は福祉の経営を行なってはいけないと言い切っていることです。要するに天下りなどでは駄目だということです。仮に天下りのような人がやるとしてもケアワーカーからやり直してもらわなければ困ると言い切っていました。現場のことがわからない人に障がい者のことはわからない。そんな人が経営者になることなどあり得ないというこ

とです。

佐藤さん、人材養成についてのお考えをお聞かせください。

(佐藤)

人材は確かに不足しています。CH では単独や夜の仕事が多く厳しい状況です。アルバマーレにお邪魔したとき、色々とお話を伺いました。アルバマーレは重度の障がいを持つ方で 1 日 45～50 ドルのお金がもらえる。その他に日本でいう障害基礎年金が別に支払われている。そういったところでは学ぶべきところはあるが、そのまま真似はできないでしょう。

一方でしっかりとした財源を付けるための戦略はアルバマーレもしっかりと行なわれて現在の実態があると思うのですが、私ども法人として、制度が整ってから地域移行を進めようとか、自閉症の方が落ち着いて入所施設で暮らせるようになったら地域へ移行しようといった考えを持っていると、いつまでたっても地域へ出られないと思っています。

入所施設に実際に暮らしてみても、いいと思えるのであればそれでいいでしょう。しかし大部分の人は入所施設で暮らすことは嫌だと言います。それを考えたとき、自分なら暮らしてもいいと思える環境を自閉症の人に提供するのが当然ではないでしょうか。誰もが暮らしたいと思える環境づくりをこれからも行なっていきたいと考えています。

(戸枝)

人材について積水ハウスさんとの協働なども含め、私たち自身で人材を育てなければいけないのですが、福祉の人に教えるのであれば積水ハウスの人を雇った方が早いのではないかと考えます・・・。積水ハウスの田中さん、人材ということで期待されることをお話ください。

(田中眞二)

個別に対応するという話しでは、当社の場合、基本的には注文住宅の受注が事業です。ご要望の異なる一軒一軒に対し、敷地の広さや形状などをきちんとお聞きしてお答えすることが事業のスタイルになっています。その中でハンディキャップを持っておられる方の家を作るにはもっと深いところまでお聞きしなければなりません。例えば、トイレについても誰が、どのように使用するのかといったことを細かくお聞きする必要があります。そうした体制が出来上がっているのも、メンタルな部分の話しについても、技術だけではなく人がやらなければならないということは社内でも理解されやすかったと思っています。

(戸枝)

私たちも、積水ハウスさんの技術や製品があるということに気付いたり学んだりしなければ、必要としている人にとどかないということです。そうした学びをする必要が私たちにあ

るのだということと、そうした市場に対し大きなニーズがあるのだと考えられるのではないのでしょうか。

(松上)

私どもの法人が最初に立ち上げたのは入所施設でしたが、その時、私はすべて新規採用の職員でいこうと決めました。というのも中途半端に変な文化を持って他の施設から来た人ではなく、自分たちの文化を自分たちで作りたいと思ったからです。

その時に一番大事にしたことが外部のスーパーバイザーを入れようということです。私は現場を歩いて施設長になったので、私がスーパーバイザーをやろうと思えばできますが、施設長の権限を持ってそれを行なうと、若い職員は自由に議論することができないだろうと思ったのです。

そこで開設時から全国レベルのスーパーバイザーに来てもらい、現場で利用者が示す行動上の問題について職員と観察の仕方や記録の書き方、組み立て方を現場に張り付いて行なってもらいました。こうしたことによってうちの職員が育ったと思います。彼らはいま中堅管理者になって現場をスーパーバイズしています。

人材育成の中で、いかに優秀なスーパーバイザーを現場から育てていくのかといった仕組みを作り、その仕組みでそれぞれの組織で人材育成のサイクルをどういう風に作っていくのかが何よりも大事だと思います。

(戸枝)

最後は本人の障がい特性をきちんと見立て、その人なりの暮らしに寄り添った支援をいかに提供できるのか、そのための人材が日本には大量に必要だろうというところにいきつきました。

アメリカ・ノースカロライナで TEACCH が始まったのは日本より 40 年も前であり、それは、40 年選手がいるということを意味しています。日本でも次の人材を育てる動きはありますが、フレームとしては民間でガッツのある人がやっているのが現状です。

田中正博さんからの、行動援護の仕組みのフレームについての話しの中にもあったように、インストラクターとして、10 年、20 年という息の長い壮大な取組で人を育てていこうということですね。そうであるとすれば 30 代の若いインストラクターをまとめなければならないでしょう。

行動援護研修のインストラクターに、自閉症の人がいる・適切な支援が必要である、ということに気付いてから、どんな本を読み、どんな研修を受け、何から学んだかについて年表をつくってもらい、まとめるという作業をしました。何となくわかる人がインストラクターをしていても広がらないので、言語化する事が必要であろうと考えたのです。言語化したことを整理していったときに、障がい特性のアセスメント、構造化のことなど、必要な項目をいくつかまとめることができました。

「障がって何だろう」というところから始まり、構造化を一つずつ勉強し、初めての自閉症の人に対応する時も、特性に基づいてアセスメントができて組み立てられるようになっていることがわかります。国が行なう行動援護の三日間の研修ではほとんど何もできません。そうすると人を育てることも含めてどうやっていくのか、どこで行なうのか、そのための資金はどうするのかということになってきます。

運動が必要となるでしょう。場合によっては行動援護学会のようなものを作ってもいいかもしれません。

全国地域生活支援ネット代表であり、国立のぞみの園参与の田中さんにその辺りのことをお聞きしたいのですが。

（田中正博）

人材育成という切り口で始まり、最後はどうなるのかと思っていましたが、相当高いハードルの質問となりました・・・。

発達障がいの特化した分野を切り開いていこうということで、戸枝さんがコーディネートして熱心に掘り下げている部分は、これまでは封印されていたところですよ。なぜかと言えば、「困っている人」というとき、「行動障がいがあって困っている状態に対応しなければならない職員が困っている」、ということだからです。

行動援護の研修も、表向きの部分を前面に出していかないといけないだろうと思います。松上さんが少し触れられていましたが、裏側で求められるのは、どうしようもなくなった時の対処方法をヘルパーとして学びたいというのが本音です。アメリカのようにきちんとした基準を持ってやらざるを得ない場面でやっていこうという高い基準を持たないといけないと考えています。国の研修で暴れた時の押さえ方を行なっていたら、これから国際権利条約に批准しようとする流れに逆行することになるでしょう。

基本的には、予防をきちんと行ない、困っている本人の困り具合がわかるレベルをきちんと作らなければならないと思います。これが行動援護にとっての大事な価値観です。そのことを人材養成の視点としてずっと続けていくためには、困り具合がわかる入り口に立つ相談事業者にきちんと学んでいただくということも大事なポイントだと思います。

行動援護研修初日の座学でそうした立場の方に参加を呼びかけたり、いろいろな仕組みの中に埋め込むため、システムエンジニア的に機能を強化しようとする時、最後に取り残されるのは行政の担当者です。行政は措置という考えでさばってきたため、困っている人は山の中へとといった価値感を強く持っています。そこも何とか掘り起こしたいと思いながら、専門家として役立つ要素ということで用意されたのが発達障がい者支援センターではないでしょうか。その流れを強化し、それを受け止める先にナショナルセンターが必要となります。

今、知的障がいの分野でナショナルといえば児童の部分で秩父学園、成人の部分でのぞみ

の園ということになります。ところが、のぞみの園は、まだ結論が出た訳ではありませんが、風向きからは非常に危ない位置に立たされています。政権交代によって独立行政法人の見直しが行なわれ、のぞみの園も第2弾の見直しに入りそうだからです。国の施設である独立行政法人の運営は国立の直営に戻すか、民間に下げるのかのいずれかで、独立行政法人はなさそうとしています。そうした中で、のぞみの園が国立に戻るとは思えません。そうなったとき、その仕組みを受け取るのが秩父学園だとすると、すぐ近くに国立リハビリテーションセンターがあるので、3障がい一元化になったことによる一分野となってしまうでしょう。

最後にどこが受け止めるのかは非常に不安定な状態ですが、高めるべきは現場の人材育成の視点です。そのためには子どもの時からの関わりが必要です。通園施設はもちろん、学校との関係をどうしていくのかも重要なファクターでしょう。それらを全て繋ぐ役割として発達障がい支援センターがあると。

今後は政権が変わっても地方分権の流れだけが変わらないと思うので、地方ごとの発達障がい支援センターのあり方がこの分野の成否を分けるのではないかと考えています。

ナショナルよりも地方分権によって中核となるところで機能が発揮できることの方が、リアリティーがあるのではないかと思います。

(戸枝)

アルバマーレは1日にして成らずとは思いますが、だからといって、このままでいいわけではありません。逆に登らなければならない階段はかなりはっきりとしてきています。それを登っていかたいと思います。

アルバマーレではクーラーが気になるのであれば埋め込めばいいということで、床に埋め込んでありました……。アルバマーレ、GHAにいる人達は、施設から追い出されるようにして出てきた方ばかりでしたが、穏やかな暮らしがそこにあると感じました。

あるコロケ屋さんで自閉症の方が働いています。その人は枝豆の豆を一つずつ鞘から押し出す仕事を1日中やっています。いい顔をして働いています。その人にここで枝豆を押し出す仕事が無かったならば、どうなっていたのだろうかと思います。

巡り会った環境がラッキーであったかどうかで人生が全て決まってしまうといいのかどうか。それを運ではなく、どんな障がいを持って生まれたとしても、この国で適切な環境に巡り会えるようになるようにしたいし、そうなることを目指したいと思います。

(シンポジウム終わり)

第 5 章

支援システムと住環境の研究

1. 小規模、分散化支援システムの効果

入所施設から地域生活という流れのなかで CH の整備が急がれているが、ここでは CH の意義を、入所施設などで行われてきた大規模集中型の支援と比べて、小規模分散型の支援の効果という側面から考えてみたい。

平成 4 年度から 5 年度行われた「強度行動障害に関する調査研究（京都府強度行動障害者処遇調査研究会）」によれば、入所施設における小規模、分散化支援の取り組みが、様々な行動障害の改善にとって有効であったという結果が報告されている。以下、内容を簡単に紹介する。

1) 研究のねらいとポイント

- ①指導の統一性・継続性、職員との対人関係・信頼関係を確立するため、生活と作業担当の役割を分け、利用者に対してそれぞれの生活・作業担当者が毎日継続して援助にあたるようにした。
- ②利用者一人ひとりの行動観察や健康管理を密にし、問題行動への改善、生活リズムの整えや生理的な（排泄・睡眠・食事）整えを進めるために、生活・作業グループを各グループ 10 人単位にグルーピングした。
- ③環境からの刺激（物理的・対人的）を少なくするために生活グループごとにくつろぎのスペース（グループルーム）を設置し、落ち着いて生活できるようにした。また、日課における大きな集団場面（全体朝礼、食事等）をなくした。全体朝礼は各生活グループごとのミーティングとして、利用者一人ひとりのコミュニケーションレベルに合わせて日課の予定や本人に関する情報を伝えるようにした。食事も各生活グループごとにグループルームで食事し、盛り付けや配膳等も自分たちで主体的に行うことにより、生活の中での役割を多く持てるように心掛けた。
- ④利用者一人ひとりが生活の中で自分自身の課題や役割を明確にするように援助し、見通しを持って安心して生活できるように生活時間帯のプログラムを工夫した。またプログラムの変更は極力避けるようにした。
- ⑤何よりも利用者の生活がより、ノーマルな状態になるよう努めた。（食事時間、入浴回数、過ごししの時間の充実、住環境、小グループによる宿泊旅行等）

2) 小規模、分散化支援の効果

図表 5-1～5-4 は小規模、分散化支援システム導入前の平成 4 年度と導入後の平成 5 年度について、48 名の利用者に対して調査した結果で、行動障害の改善に全般的に効果がみられたことを表している。

図表 5-1 同一の強度行動障害者（N=14）の平均得点

	自傷		他傷		こだわり	物こわし	睡眠障害	摂食障害	排泄傷害	多動	寡黙	総得点
	(強さ)	(頻度)	(強さ)	(頻度)								
4 年度	2.00	2.36	1.57	1.14	3.07	1.64	1.29	2.21	2.21	2.07	2.07	21.64
5 年度	1.43	1.43	0.93	0.93	2.86	0.93	0.43	2.00	1.29	1.29	1.29	14.79
差 (t)	※ 2.28	※ 2.74	1.98	1.15	0.76	※※ 3.22	※ 2.28	※ 0.90	※ 2.74	※※ 3.29	※ 2.80	※※ 6.79

※P<.05 ※※P<.01

図表 5-2 強度行動障を伴わない同一の精神遅滞者（N=34）の平均得点

	自傷		他傷		こだわり	物こわし	睡眠障害	摂食障害	排泄傷害	多動	寡黙	総得点
	(強さ)	(頻度)	(強さ)	(頻度)								
4 年度	0.59	0.35	0.65	0.53	1.29	0.38	0.68	0.91	0.50	0.91	0.74	7.53
5 年度	0.32	0.29	0.56	0.44	1.32	0.32	0.26	0.53	0.09	0.38	0.47	5.00
差 (t)	※ 2.05	0.47	0.65	0.92	-0.24	0.33	※ 2.60	※ 2.20	※ 2.69	※※ 3.92	1.60	※※ 4.92

※P<.05 ※※P<.01

図表 5-3 同一の自閉性障害者（N=28）の平均得点

	自傷		他傷		こだわり	物こわし	睡眠障害	摂食障害	排泄傷害	多動	寡黙	総得点
	(強さ)	(頻度)	(強さ)	(頻度)								
4 年度	1.54	1.54	1.14	0.86	2.61	1.11	1.32	1.79	1.29	1.68	1.57	16.43
5 年度	1.00	1.00	0.86	0.71	2.57	0.64	0.50	1.43	0.57	0.96	1.04	11.29
差 (t)	※※ 2.95	※ 2.30	1.44	1.44	0.18	※ 2.56	※※ 3.57	※ 1.63	※※ 3.20	※※ 4.42	※ 2.49	※※ 6.95

※P<.05 ※※P<.01

図表 5-4 自閉性障害を伴わない同一の精神遅滞者（N=20）の平均得点

	自傷		他傷		こだわり	物こわし	睡眠障害	摂食障害	排泄傷害	多動	寡黙	総得点
	(強さ)	(頻度)	(強さ)	(頻度)								
4 年度	0.25	0.10	0.60	0.50	0.70	0.25	0.20	0.60	0.60	0.65	0.50	4.95
5 年度	0.15	0.05	0.40	0.40	0.65	0.30	0.05	0.30	0.25	0.20	0.25	3.05
差 (t)	1.00	0.70	1.07	0.63	0.57	-0.57	0.90	2.04	※ 2.10	※ 2.65	1.42	※※ 3.23

※P<.05 ※※P<.01

この調査研究は、入所施設で行われたもので、実際の CH の環境とは異なるところも多いが、小規模、分散の支援が一定の効果を生むことを証明した意義は大きい。

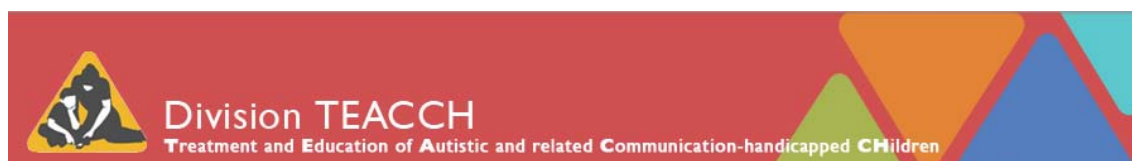
効果を見ると、行動障害の改善で「他傷」「こだわり」の項目で改善ポイントが相対的に低かったようであるが、社会福祉法人はるにれの里や GHA のように、グループの単位が 10 人よりもっと小さいことや、日課をより一人ひとりに合わせて個別化することなどが合わされば、「他傷」「(ネガティブな) こだわり」がもっと改善したかもしれないと推察できる。

2. 自閉症の特性と必要な住環境配慮

「TEACCH（＊）」の最初の「T」、Treatment が意味するように、障害によってできないことや苦手なことを、様々なツールを含む環境調整により補いながら、できること、強みを生かして、自立していけるようにする支援が重要である。

これは、自閉症の人の行動障害を予防する、という SS からのアプローチである。

* Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped CHildren



図表 5-4、図表 5-5 は、そのような考え方で、自閉症スペクトラムの人たちの障害特性を理解し、支援を具体化することを主眼にまとめられている。

自閉症支援の専門家の水野氏によれば、自閉症の特性は、11に分類されるという。

【情報処理・コミュニケーションの特性】

- ①相手からの情報・メッセージをキャッチ（理解）することの特性
- ②相手に気持ちを伝えることの特性
- ③感覚の特異性

【全体よりも細部に注目する特性】

- ④転導性・衝動性・強い注目、注意
- ⑤時間整理統合の困難さ
- ⑥空間整理統合の困難さ
- ⑦変化の対応の困難さ
- ⑧般化の特性

【記憶の特性】

- ⑨記憶の維持の困難さ
- ⑩長期記憶の特性
- ⑪社会性の質的な困難さ

それぞれの特性について、解説、想定される行動、住居内での支援について、住居での支援の例についてまとめたものが、図表 5-4 である。

また、構造化のアイデア ①物理的構造化 ②スケジュール ③ワークシステム

④視覚的構造化（視覚的指示、視覚的明瞭化、視覚的整理統合） ⑤ルーティンを軸にして、解説・目的、関係する主な特性、個別化するときのポイント、住居での工夫や配慮する視点をまとめたのが、図表 5-5 である。

物理的構造化（HH、HS）以外にも、住居内で必要な支援システム（SH）があり、これら適正な HH、HS、SH を組み立てるには、行動障害から特性を判断する SS の資質が必要不可欠である。

図表 5-4 自閉症の特性に関する解説シート(表):住居編

特性の解説			想定される行動
情報処理・コミュニケーションの特性	1. 相手からの情報・メッセージをキャッチ(理解)することの特性	・相手からのメッセージや情報を理解することの困難さ。言葉の理解の困難さ ・情報が多いことによって起こる混乱さ。 ★視覚的な情報の優位さ(強い)	・指示がわからないことにより行動できない。 ・指示や周囲で起こっていることが理解できないことによって起こる混乱や不安。 ・言葉どおりに解釈して裏の意味をとれない。 ・言われた内容の意味がとれずに、反響言語で返す。
	2. 相手に気持ちを伝えることの特性(表出)	・自分からコミュニケーションしようとするのが困難。 ・周囲の状況によって伝えられない。 ・相手にとってわかり難いメッセージ。 ・一方的なコミュニケーション	・行動や具体物などで自分の気持ちを伝える。 ・パニックや自傷他害で自分の気持ちを伝える。 ・反響言語(相手の言葉の反復や同じことばを繰り返す。コマーシャルなどの言葉を繰り返す)。 ・コミュニケーションの誤学習。
	3. 感覚の特異性	・感覚刺激に対して私たちとは違いをもつために過敏だったり鈍感だったりする。	五感の鋭敏さ、鈍感さによる反応や無反応 ・視覚刺激→避けたり、目で隠したり 等 ・聴覚刺激→耳ふさぎ、大きな声 等 ・触覚刺激→服まくり、服脱ぎ 等 ・味覚刺激→苦手な食べ物 等 ・嗅覚刺激→部屋に入れない 等
全体よりも細部に注目する特性	4. 転導性・衝動性・強い注目、注意	・様々な刺激に影響をうけて(次から次に)突き動かされて行動する。 ・注意注目の困難さ。(注目できなかったり、注目しすぎたり) ★一度注目向けると継続的に集中しやすい。	・落ち着かない行動。 ・ウロウロとアッチコッチに動き回る。 ・街の中で急に飛び出す。 ・注目しすぎて1つの活動から次に移れない。
	5. 時間整理統合の困難さ	・活動の予定を計画したり、変更したり、調整したり、全体を理解したりすることの困難さ。	・活動(予定)の見通しがもてない。 ・活動に移ることが難しい。 ・混乱したり、不安の反応をしめしたり。 ・日課の変更が困難。

住居内での支援について	住居での支援の例
・本人への情報提供(スケジュールや勉強や活動の提示)の場所:人によっては、固定した情報を提示するボードが必要になる。持ち歩いている方もいる。 (文章、単語、絵、写真、具体物等、本人にあった情報量) →提示の場所が個人でも、また成長とともに変容するので、ある程度の柔軟さが必要。(配置や大きさ) ・部屋の中に様々な情報があふれることは好ましくない。様々なものに関する収納スペースの確保が必要になる。	・自分の部屋の入口にコルクボードがあって、そこに本人のスケジュールが提示されている。 ・勉強デスクには、ワークシステムといわれる勉強をする内容がカードで提示せられていて、それを収納棚にたくさんある教材の中の1つとマッチングしてもってきて、勉強をする。
・本人にあった代替コミュニケーション(*)の活用 ・コミュニケーションに関しては、自閉症の特性と本人に特化した計画的に学習場面を設定する。その時に、コミュニケーション場面の場の工夫が必要になる。	・はじめはお母さんが向かい合って座っていて、机にあるコミュニケーションボードをお母さんに手渡して伝える。はじめカードの使い方を教える時に別の家族、支援者が後ろから手掛かりをだす。
・環境整備・環境整理(刺激の統制) ・本人にあった場所の選択 (例:刺激がすくない場所) ・できれば自分で回避する方法があった方がフラストレーションを回避しやすい。 (自己回避、自己コントロール) * 物理的構造化(刺激の統制) * イヤーマフ、サングラス等の活用 * カームダウンエリアの活用	・間接照明、蛍光灯の光の工夫 ・防音対策、遮音 ・冷暖房のポイントでの調整 ・音の少ない家電、扉などを選ぶ。 ・イヤーマフ ・消臭対策 ・お風呂の湿度管理 ・衣類、カーテン、布団などの素材の工夫
・環境整備、整理によって、本人が突き動かされている刺激を少なくする(必要ないものを見えなくする工夫)。パーティション、家具の配置。 ・必要じゃない時に収納できるスペース。 ・注目して欲しい部分(例えば、活動予定)を明確に伝える。	・部屋を、パーティションや家具で整理する。 →本人の状態的には柔軟な変更も必要。 ・本人のもの以外、また時々しか使わないものは、収納しておく。
・活動予定や行程などを視覚的に提示する。 (* スケジュール、ワークシステム等の活用) ・1つ1つの活動の終わりを明確にする。 《例:タイマー》 ・終わったら何があるのかの予告をする。 ・日課の変更も視覚的に伝える。 (* 変更のシステムの活用)	・活動を理解することの困難さ。 ・次の活動がわかって、全体活動の見通しが難しい。 ・活動の変更が困難。

図表 5-4 自閉症の特性に関する解説シート(裏):住居編

特性の解説			想定される行動
全体よりも細部に注目する特性(つづき)	6.空間整理統合の困難さ	・場所を多目的に使うことの混乱。 ・物や材料を整理しながら活動をすすめることの困難さ。	・どこで座ったり、活動するのが自動的にわからない。 ・様々な活動の準備や活動開始の難しさ。
	7.変化の対応の困難さ	・予定や状況の変更が苦手。 ・いつも同じは得意ですが(★)場所、人、予定、習慣になっているものの変化に対して不安や抵抗をしめす。	・日程の変更で混乱、不安の行動。 ・支援者が変わると混乱する ・いつもと違う道順だと混乱する。 ・スリッパなどの置き方にこだわって動けなくなる。
	8.般化の特性	・1つの場所でできていることが、違う場所でできない。 ・1つの場所で学んだスキルを他で応用することが難しい(般化しにくさ)。 ・人や場面と活動を結びつけて学んでしまう(関係づけしすぎる)。	・支援者が変わるとできていたことができない。 ・文脈が変わったら、できたことができない。 ・引っ越しの時の混乱。
記憶の特性	9.記憶の維持の困難さ(個人差がある)	・短期に記憶したことの記憶の維持が困難。 ・自分がとっている行動を持続的に記憶できない。(作業記憶の維持の困難)	・指示されたことを忘れる。指示の理解の困難さ。 ・移動途中で何処に行っているかわからなくなる。
	10.長期記憶の特性	・一度覚えたこと(経験したこと)の記憶が消えない。忘れない特性。 ★一度正しい方法も学ぶとそれを継続するのは得意。	・同じ行動を繰り返す。 ・修正がなかなかできない。 ・なにかを切っ掛けに(もしくは切っ掛けなく)フラッシュバックで混乱する。
11.社会性の質的な困難さ		・社会的な状況判断が難しい。 ・その場の状況をつかんで、瞬時に相手の気持ち、人間関係をつかむのが困難である。	・状況を判断できずに癇癢をおこす。 ・周囲の空気を読んでない暴言 ・相手と自分との気持ちの違いに気づかない。

住居内での支援について	住居での支援の例
・1つの場所をあまり多目的に使わない。 ・休憩(カームダウン)スペースを確保する。 ・椅子やマットなどで具体的場所を提示する。 ・物の置く場所等の具体的な提示する。 * <u>物理的構造化(1つの活動は1つの場所の設定、境界の明確化)</u> * <u>視覚的整理統合(材料や道具、容器等を整理して伝える)</u>	・1つの場所で、いくつかの活動をするのが難しい。 ・自分で準備して、整理して活動を進めるのが難しい。(例:調理)
・「いつも同じが得意」を活用する ・視覚的に活動予定、支援者等の予告が必要。 ・変更も視覚的に提示する。 ・1つの場所をあまり多目的に使わないのも重要。(1つの場所の意味を固定する) * <u>スケジュール(予定・変更の視覚的な提示)</u> * <u>視覚的構造化(指示の修正)</u>	
* <u>スケジュール、ワークシステム、視覚的構造化の活用</u> * <u>引っ越しの時のポイント</u> ・本人に引っ越しを参加させる ・習慣を移行させる ・新しい場面は、新しいことを教えるチャンス	・本人の記憶維持を考えて、部屋の中に様々な活動の設定をする。 ・トイレや食事等、主要な活動の場所と本人の休憩スペースや部屋の距離を離しすぎない。また動線に対して配慮する。
・視覚支援の活用。 ・リマインダの活用。(記憶を補う工夫) ・動線、活動の範囲、距離を考慮する ・視覚指示の位置にも気を配る ・刺激の特性による記憶への影響少なくする。	
・場の設定が、本人が習慣をつかみやすい設定になっている。	・お母さんと勉強のエリア ・一人で勉強のエリア ・テレビ、ゲームは社会的な場面ではなく一人で自立するエリアとして、家族と分ける。
* <u>教えてもらふスペース、一人で学ぶスペース、社会的な場所を分ける。</u> ・本人が自分のことや、周囲の人のことを確認したり整理するミーティングスペースの確保。	

図表 5-5 自閉症バリアフリーとしての構造化のアイデア解説シート：住居編

構造化のアイデア		解説・目的	関係する主な特性
物理的構造化 (環境の工夫)		環境を整える。自立を妨げる刺激を統制する(必要な情報に注目しやすくする)。	刺激に影響を受けやすい。 感覚の特異性。
		場所と活動を1対1の設定にする(1つの活動を1つの場所)ことで、その場所で期待する活動を明確にする。	1つの場所を多目的にすると混乱する。
スケジュール (活動日程を視覚的に提示)		視覚的に「いつ」「どこで」「何を」の情報を伝え、見通し、変更を伝える。	時間の整理統合。 見通しの持ちにくさ。 変更への対応の困難さ。
ワークシステム (活動とその終わり等を視覚的に提示)		1つの場面で、いくつかの活動を提示するときに活用。「何をするのか」「どれくらいするのか」「どうなったら終わりか」「終わったら次に何があるのか」の情報を伝える。	時間の整理統合。 見通しの持ちにくさ。 終わりが理解できないことによる不安や混乱。
視覚的構造化	視覚的指示	本人にとって理解できる指示で具体的に提示する。	曖昧な情報だとわかりにくい。 視覚的優位。
	視覚的明瞭化	指示をよりわかり易く明瞭にする。	注意・注目の困難さ。
	視覚的整理統合	自分で準備をしたり、整理したりすることの困難さを補う。	空間や物を整理して考えることの困難さを。
ルーティン(の活用)		慣れ親しんだシステムをいつもつかうことで理解を補う。 【注意】1日の活動は習慣化して教えない。 (それはスケジュール等を活用)	般化の困難さ。 ルーティンで覚える。 変化への対応の困難さ。

個別化する時のポイント	住居での工夫や考慮する視点
人、または場面によって影響を受ける（もしくは受けない）刺激の範囲は異なる。（どのくらいの統制で活動に注目できるか）	・パーテーションや家具などで刺激を統制。 ・防音対策、湿度調節 ・間接照明、照明の工夫 ・収納場所を確保して、不必要なものを収納 ・壁の素材、家具の素材を考慮する
人によっては、多目的な場所の活用がある程度可能。しかし、休憩する場所などは、別に用意した方が障害特性にあっている。	・本人が静かにブレイクする場所 ・自立して勉強する場所、1対1で教えてもらう場所。 ・活動・余暇のブース ・カームダウンエリア
視覚化のタイプ（具体物、写真、単語、文章）。スケジュールで提示する量。形態。個別化が必要。	・スケジュールを置いたり、貼ったりするスペース、ボードの設定。人によっては、各活動場所にスケジュールなどのカードをマッチングさせるスペースボードが必要。 ※最初から貼るスペースがあると、手立てを使ったり、再設定するときに、壁などを汚したり、傷つけなくてすむ
視覚化のタイプ（色、数字、リスト等）。提示する量。形態。個別化が必要。終わりの提示の仕方も個別化する。移動型にする（確認しながら行動）。	・勉強のエリアでのワークシステムを貼るスペース、ボード。 ・勉強の教材、道具等を収納したり、片づける棚やラックが必要。 ※最初から貼るスペースがあると、手立てを使ったり、再設定するときに、壁などを汚したり、傷つけなくてすむ
視覚化のタイプ（具体物、写真、絵、図、文字、文章、線画等）	※最初から視覚支援を貼るスペースがあると、手立てを使ったり、再設定するときに、壁などを汚したり、傷つけなくてすむ
強調させる工夫も個別化（マーキング等）	※最初から視覚支援を貼るスペースがあると、手立てを使ったり、再設定するときに、壁などを汚したり、傷つけなくてすむ
ボックスの利用、材料の配置を指示する。	・勉強の教材、道具等を収納したり、収納BOX、片づける棚やラックが必要。
システム、活動の確認の仕方。ルーティンを形成するときの教え方、支援の方法。（手添え、モデル提示、ジェスチャー、言葉）	・スケジュールやワークシステムのルーティンを教える時に導性や場所の配置は重要。

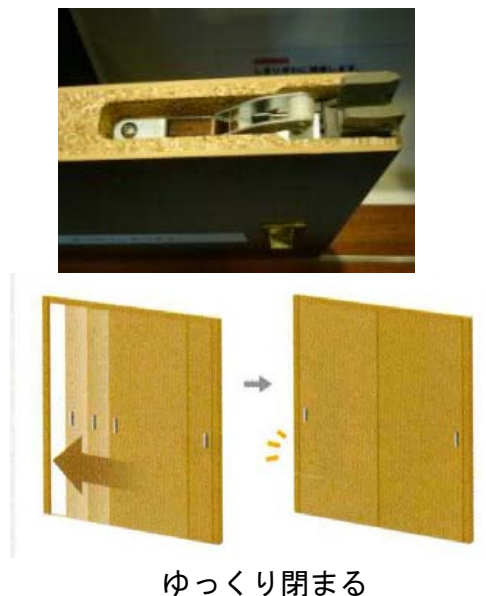
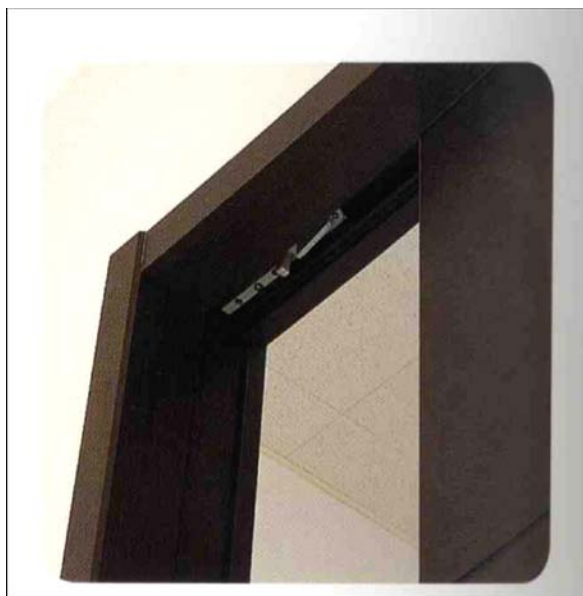
3. 住宅メーカー技術の適応分析

現在、既に存在する住宅技術（商品）は主に一般向けに開発されてきたものが大部分を占めている。しかし子供からお年寄りまで多様なニーズに応えてきた開発の歴史の中で、障害者の行動特性と類似しているケースに対応して開発された技術（商品）も少なからずあることがわかってきた。また、開発の目的は違っていても、機能を読み替えることで適応できる技術（商品）も数多く存在することが明らかになり、今後の CH の整備への活用が期待される。

1) 住宅メーカー技術と活用イメージ

例えば、引き戸（ソフトクローザー）という技術は、子供が手を挟まないようにゆっくり閉まる構造を持っているが、これは CH の利用者にも同じ目的で必要であり、怪我防止に有効である。また、ソフトクローザーは思いっきり閉めて大きな音が出たり、ドアが壊れたりすることも予防できるため、音に過敏な他の利用者がいたり、ドアを力いっぱい閉めて壊してしまう行動特性のある利用者の住む CH には非常に有効な技術である。

【ソフトクローザー】



また、物理的構造化の中でも刺激統制は重要な支援であるが、最初から壁を立ててしまうと変更が困難になり、パーテーション等を使うと簡単に動いたり、破壊されてしまうという課題を抱えている。変更が簡単で、簡単には動かず頑丈という機能を持った商品が望まれていた。例えば、可動間仕切りクローゼットという商品の中には荷物が入るので適切な重さがあ

り、なおかつ天井にも突っ張って支える構造になっており、倒れるといった危険がない。そして移動する時はローラーが着いているので、ストッパーを外せば簡単に移動することができるようになっている。このような商品は CH の現場の負担を相当軽くし、利用者の安定した環境を守ることに貢献できるものとして有効であろう。

【可動間仕切りクローゼット】



機能変換の例としては、防犯用の窓ガラスも有効な商品である。防犯用の窓ガラスは 2 枚のガラスが中間膜を挟む形で貼り合わされた構造になっている。パニックや自傷で窓ガラスを割ってしまう時、防犯の窓であればガラスが飛び散ることも無く、破片も尖らず怪我をすることが防止できる。

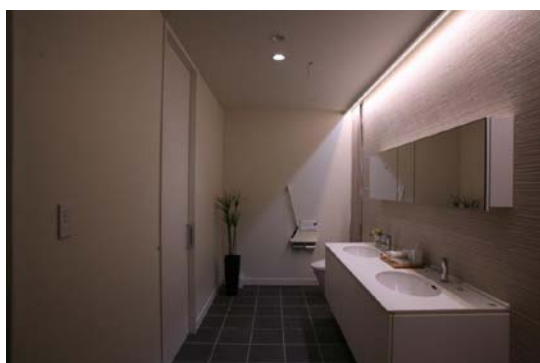
【防犯ガラスを割った時の様子】



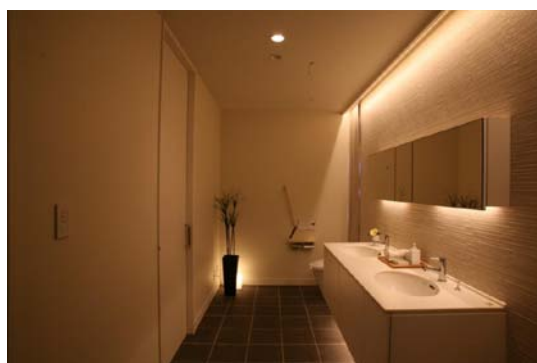
今後、様々な使い方が期待できそうな技術として LED 照明があげられる。蛍光灯の周波数が気になる利用も多いと思われるが、LED 照明に切り替えることで落ち着くことも予想される。また、LED は小型で高輝度なので間接照明に向いており、直接光を見ることが苦手な利用者の明かりとしても活用が期待できる。

更に LED 照明の特長として制御性が高いことが挙げられており、調光により様々な演出が可能であることも将来の住環境整備において魅力的な要素である。部屋からなかなか出られない利用者に四季の演出で季節感を感じさせたり、睡眠が安定しない利用者に時間に合わせてタイマー調光で演出をすることで時間感覚を取り戻すという効果も期待できる。

【朝モードの照明】

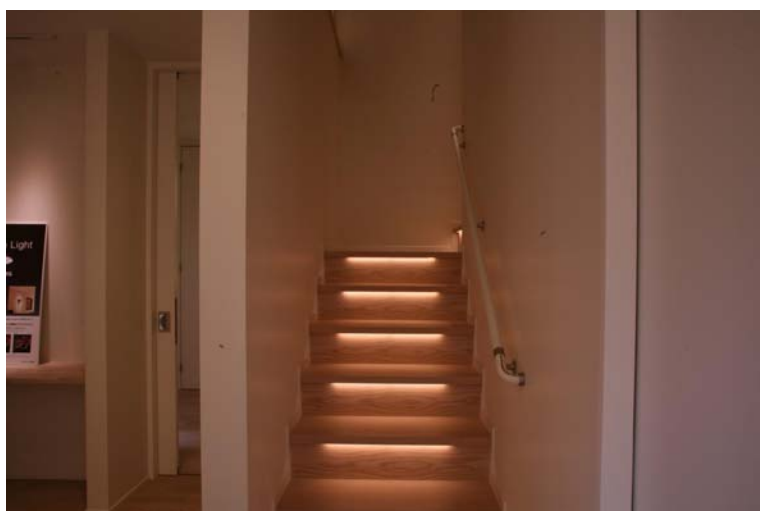


【夜モードの照明】



LED は寿命が長く小型で電気代が安いので、埋め込みの照明にも向いており、構造化支援のツールとして今後様々な活用方法が生まれてくる可能性がある。

【階段灯】 ※手すりに触れるとと点灯する



2) 住宅メーカー技術の適応検討表

住宅メーカーの技術が CH の様々な場面で起きるどのような現象や課題に対して効果が期待できるか、機能の読み替えも含めて検討した。

図表 5-6 は、既存の様々な HH、HS を、すでに CH に入居している人、あるいは、行動障害を起こしてしまっている人を対象としたときに、どのような機能として活かせるかをまとめたもの。どちらかという、HH からの、対症療法的なアプローチである。

自閉症スペクトラムの人たちの支援は、できる限り、SS から HH への方で、障害特性の評価から支援を具体化していく方向で考えたい。しかし、実際の場面では、リアルタイムで生活している人をどう支援するかを臨機応変に考えることが求められる。

図表 5-6 住宅メーカー技術の適応検討一覧 (1/4)

機能	技術商品	現象課題	対策	機能変換	場所				
					全体	二階	個室	共用	その他
UD	タッチパネル	判断力・理解力の低下	シンプルな操作性による自立	UD					浴室・キッチン
UD	タッチパネル	勝手にいじってしまう	操作できない（外からの管理）	視覚刺激抑制					浴室
UD	引き戸	ゆっくりと開けられない	指を挟まなくなる	怪我抑制	○		◎		
UD	風呂床材	滑って怪我をする（発作も）	滑りにくい+倒れても怪我しにくい	怪我抑制					風呂場
温調	温調器	温度差に弱い	温調設備	温度調整					浴室、トイレ、脱衣所
温調	床材	床で寝ころぶ／つま立ち	温かい	温度調整			◎		
温調	床材	素足が好きな人	床暖房機能	温度調整	○		◎		
快眠	ウォーターベッド	寝返りがし辛い	寝返り支援しやすい	介助支援					
壁	壁	ぶら下がることが好きな人	ビルトインでぶら下がるものを作ってしまう	構造化支援			◎		
仕切	ウォーターベッド	リビングで集中できない	映画を見るとき等、間仕切り付きソファがあると良い	間仕切り				◎	
仕切	可変テーブル	共用スペースを分けたい	リビングでの仕切りを変える	構造化支援				◎	
遮音	窓	大声を出す	遮音	遮音	○				
遮音	窓	大声を出す	窓を小さくする	遮音	○				

住宅メーカー技術の適応検討一覧 (2/4)

機能	技術商品	現象課題	対策	機能変換	場所				
					全体	二階	個室	共用	その他
遮音	窓	脱走	観音窓、スウィング窓だと脱走しにくい	脱走防止	○	◎			
遮音	窓	脱走	金具による固定	脱走防止	○	◎			
遮音	窓	声を出す／外音に反応する	観音窓、二重サッシの活用による防音効果	防音	○		◎		
遮音	窓	声を出す／外音に反応する	カーンダウンルームへの適応	精神安定	○		◎		
遮音	窓・壁	音過敏	静かな場所ができる(吸音)	吸音			◎		作業場、学習場
遮音	窓・壁	音過敏・不眠	睡眠を得やすくする	吸音・防音			◎		
遮音	壁	頭突きをする	防音だけでなく、クッション材が怪我を抑える効果も	怪我抑制	○				
遮音	壁	頭突きをする	はがせないクッション材	怪我抑制	○				
収納	TVビルドイン	いつ見ていいかわからない	扉の開閉による ON/OFF 機能	生活リズム	○		◎		
収納	TV ボード	TV をさわってしまう	クリアボードの中にしまう	暴れ防止			◎	◎	
収納	ウォークインクローゼット	混乱してしまう時	カーンダウンルームとして使う	精神安定			◎		
収納	ウォークインハウス	次の行動が判断できない	入口から構造化ができている	構造化支援	○				
収納	ゴミ箱	整理ができない	開閉が分かりやすい	構造化支援				◎	
収納	下駄箱	忘れ物がある	靴箱の裏に予備をストックしておく	備忘					下駄箱
収納	可動間仕切り	構造化でき切れない	落ち着く環境になるまで変更可能／新入居者への対応	構造化支援			◎		
収納	可変棚(高さ)	季節の入れ替えが大変	寒暖に合わせた簡単な衣替え／蒲団変えが可能	介助支援			◎		
収納	個人 BOX	片付場所が分からない／区別がつかない	名前やマークで分かりやすく	構造化支援				◎	
収納	壁面収納	モノが気になる	収納する	隠す	○		◎		
収納	壁面収納	散らかしてしまう	場合によっては鍵がかける	暴れ防止	○		◎		
収納	両面収納	見守りきれない	支援側・親が作業しながら本人の動きを確認できる	見守り			◎		

住宅メーカー技術の適応検討一覧(3/4)

機能	技術商品	現象課題	対策	機能変換	場所				
					全体	二階	個室	共用	その他
照明	LED	周波数を嫌う	電球・蛍光灯ではなく、LEDを使うと落ち着くかも	周波数の除去	○				
照明	LED	周波数を嫌う	間接照明だと落ち着くかも	周波数の除去	○				
照明	スイッチ	スイッチをいじる	スイッチを見えない所に（外部から管理）	視覚刺激抑制	○		◎		
照明	スイッチ	スイッチを使いやすくする	設置位置を選べる	構造化支援	○		◎		
照明	スポットライト	集中できない	アクションのきっかけとして使用可能	構造化支援	○		◎		
照明	タイマー調光	睡眠が安定しない・不眠	タイマー調光により、時間の概念がつけやすい	時間を伝える			◎		
照明	タイマー調光	作業に集中できない	明るさを時間帯によって使い分ける	時間を伝える	○		◎		作業場
照明	ビルトイン照明	異物が気になる	さらにカバーまでつける	視覚刺激抑制	○		◎		
照明	間接照明	夜トイレに行けない	トイレまでの道筋が分かれば行きやすい	誘導				◎	廊下
照明	間接照明	睡眠が安定しない・不眠	就寝時、下から赤を照らす	精神安定			◎		
照明	間接照明	光漏れが気になる	間接照明だとましかも	光漏れ			◎		
照明	照明全般	効率が悪い／疲れる等	位置・色・明るさの最適化で効率 up	照明	○		◎		
照明	調光	光刺激が強い	照度の調節ができる	調光			◎		
掃除	トイレ床材	汚してしまう	セパレートで洗える	掃除					トイレ
掃除	トイレ床材	潔癖症	色を付けると本人でも掃除できるようになる	構造化支援					トイレ
風呂	シャワー	水にこだわりのある人	プールに入れなくても水に触れられる	余暇支援					浴室
風呂	ベンチ付浴槽	一度座り込むと立てない	ベンチがあると座りこまない	構造化支援					浴室
風呂	ベンチ付浴槽	介助が大変	介助者が楽	介助支援					浴室
風呂	魔法瓶浴槽	風呂へのこだわり	そのまま使える	保温					浴室
風呂	浴槽の傾斜	風呂へのこだわり	入り方へのこだわりに対応	構造化支援					浴室

住宅メーカー技術の適応検討一覧(4/4)

機能	技術商品	現象課題	対策	機能変換	場所				
					全体	二階	個室	共用	その他
風呂	両開き扉	転倒時ドアを開けられない	救出しやすい	救急対応					浴室
防犯	すりガラス	ガラスをたたき割る(外部刺激)	すりガラスにする	視覚刺激抑制	○		◎		
防犯	外構の侵入ボタン	脱走	脱走した瞬間に気付く	脱走検知					外構
防犯	玄関塀	閉じこもり	地域への開示・他者からの見守り	見守り					玄関・外構
防犯	窓	窓を割ってしまう(自傷・パニック)	防犯窓を使うことで、ガラスが飛び散らず／尖らず怪我しない	怪我抑制	○	◎			
防犯	窓	ガラスをたたき音を楽しむ	割れなければ良い(防犯窓だから)	割れない	○				
防犯	内格子	衝動性がある	防犯機能にも	防犯	○				
防犯	防犯システム	外からの侵入が特に不安	情緒安定しやすい	精神安定	○				
防犯	防犯砂利、マイク	脱走	脱走した瞬間に気付く	脱走検知					外構
水周	水量調整	水を出し過ぎる	水量調整できる／場所別に管理できる	水量調整	○				

4. 行動特性からのアプローチ

図表 5-7 は、現象として現れている（周囲の人たちが見たときにわかりやすい。あるいは、行動障害を起こしている人たちの行動から他の人たちも起こしやすいと想像できる）、自閉症スペクトラムの人たちの特徴的な3つの行動特性「こだわり（強い興味関心）」「切り替えの困難さ」「パニック、自傷、他害等」に対して、暮らしの場において、SS→SH→HS→HHのそれぞれの段階で、どのような支援が必要か、可能か、をまとめたものである。

実際の支援の段階では、対象者の障害特性、現在の（行動障害の）状態、支援する人の資質や、利用する建物（学校、通所、CH など）の条件を考え合わせ、それぞれの必要度に応じた構造化をプランすることになる。

HH での支援が必要だとしても、その前に SS→SH→HS があることが前提で、逆に、SS からスタートしても、HH での対応が必要ということもある。

ポイントは、ひとりひとりの障害特性を正しくアセスメントし、必要十分な支援を具体化することである。また、できるだけ、利用者の受け入れ段階で、あるいは、建物の新築あるいは改修の段階でアセスメントし、支援を具体化してから、利用者を受け入れることが大事である。そのことで、不適切あるいは不快な環境を最小限にすることができ、落ち着いた暮らしにつながるからである。更に入居後の混乱や行動障害を予防することにもつながると考えられる。

しかし、それには、そのためのアセスメントの基準（チェック項目）と、それを使ってアセスメントし、構造化の案を作成できる人材が必要である。

図表 5-7 行動特性と支援 (1/3)

行動特性	場所	現在困っている行動	出てきたニーズ
こだわり（強い興味関心）	全般	様々なこだわり行動。	・刺激のコントロール。 ・鍵、オートロック。 など
	個室	壊す、叩く、同じ場所を繰り返し使う、歩くなど。物の位置にこだわる。何度も着替える。儀式的な行動がどんどん増える。スイッチを何度も入切する。ドアや戸をきりなく開け閉め。など	・壁やドア、ガラスなど、叩いたりぶつかっても壊れない。 ・ビルトインや固定できる家具 ・ドア、ふすまなどすべてに、ロックできるようにする。 ・出入りの管理ができる。 ・掃除しやすい、汚れにくい、においが付きにくい。など
	余暇エリア	興奮しすぎる。おもちゃなどを壊す。形にこだわる。無くなるとパニック。同じ並び方にしないと気が済まない。同じ行動を繰り返す。など	・好きなだけ好きな（こだわりの）活動ができる空間、スペースをつくる。 ・掲示物などができる固定式かつカバーつきのボード。 ・境界を明確化にエリアを分ける：パーテーション、家具、カーベット。など
	お風呂	興奮しすぎる。遊んでいて洗えない。鏡を見続けている。入らない。何度も入る。何時間も入る。着替えにこだわる。	・スイッチ、水栓などは隠せる。 ・取り外し可能な鏡。 ・丈夫なシャワーヘッド。 ・ビルトインのソープポンプ。など
	トイレ	水を何回も流す。トイレトペーパーを一度に全部使ってしまう。ゴミを流す。物を詰まらせる。トイレの水を飲んでしまう。尿や便をこすりつける。便器外への排尿・排便。など	・流す回数を制限する ・例えば2回流したら、数分間流れない調整。 ・ペーパーが1回分ずつしか出ない。 ・水道を集中管理できる。便器に水が残らない。など
	洗面	歯磨き粉を全部だしてしまう。石けんを使いすぎる。水遊び。ひげを剃りすぎる。水を飲みに行く。飲み過ぎる。手を繰り返し洗う。ずっと洗い続ける。など	・鏡を取り外しできる。シャッター付き。 ・使わないときには、シャッターorドアで見えない。 ・汚れが付きにくい・掃除しやすい（歯磨き粉、髪の毛、ひげなど） ・小分けの容器 ・2ブッシュで適量できる機械
	食事	過剰な飲食。人ものを食べてしまう。嫌いなものを投げる。嫌いなものがあると全て食べない、投げる。わざとこぼす。	・飲食の量を管理 - 例：お茶を小さな容器に小分けして、時間や要求に応じて渡す。飲食、食材を管理するスペース、本人が取り出したりできない工夫。本人が管理できる部分と支援者が管理できる部分を分ける。 ・個室型の食事スペースのある食堂。 ・対面式かつシャッターつきキッチン・食堂 ・キッチンと食堂の間の鍵（タッチセンサーやICチップで支援者だけがスムーズかつ絶対に開け閉めできる）
	休憩エリア	自己刺激行動を繰り返す。壁などをはがす。ゴミを拾って食べる。繰り返し同じ行動。大声や奇声を繰り返す。大きな音で音楽などを聴く。など	・照明機器やエアコン、スピーカーなどが、部屋に出ない構造。 ・間接照明。 ・出入りの管理。 ・怪我防止。 ・壁紙などは使わない。など
	教えてもらう場所	こだわりのものが見える、ある、聞こえる、感じるなどで落ち着けなくなる。	・こだわりの刺激が完全に OFF できる環境。 ・学校にいなくても、通学したことのできる場。 ・体験型の学校、通所、CH。など

SS	SH	HS	HH
こだわりを、ポジティブに、活動として活かしていく。意識的に変化を作り出していく支援。	スケジュール、ワークシステムなどの活用。	基本的に、スケジュールとかワークシステムの瀬愛知場所が必要。刺激のコントロールをするもの。など	空間をわける。完全に仕切る。遮断するなど。
			自室。つくりつけ(ex.黒板、鏡、ぶるさがり、ブランコなど。)つくりつけや固定の家具など。
			ex.自室以外に場所をもうける。水遊び場。など
手順をきめるなどで、スムーズに入浴できるようにする。	スケジュール、ワークシステム、手順書などの活用。	他の人の備品・日用品などは見えなくしまえる。換気がよく、前に使った湿気や臭いが残らないなど。	専用浴室。脱衣場、洗面所などを分離。など
手順をきめるなどで、スムーズにできるようにする。	スケジュール、ワークシステム、手順書などの活用。	水栓の工夫で、回数制限や自動流水。使用中がはっきりわかる表示。など	大便器、小便器を分けて設置。専用にする。
手順をきめるなどで、スムーズにできるようにする。	スケジュール、ワークシステム、手順書、視覚的構造化などの活用。	水の飛びちりを最小限にできる広さや深さ。鏡にシャッターなど。他の人の備品・日用品を収納できる。ビルトインのポンプ。など	専用にする。二層式シンク。使わない時には見えない戸やシャッターなどをつける。など
手順をきめるなどで、スムーズにで食事ができるようにする。調理の段階から配慮。など	スケジュール、ワークシステム、手順書などの活用。調理の段階で、嫌いな物は入れない、つぐらない。	自室で食べるなど。コインを入れると1回分出てくる給茶(水、他)機。など	専用の食事場所。汚れ、臭いが付きにくく、落としやすい。調理も、別(専用のキッチンなど)
手順をきめるなどで、スムーズに活動・休憩できるようにする。	スケジュール、ワークシステム、手順書などの活用。	刺激をコントロール(1人1人に合わせ、多・少、無)し、リラックスできる配慮。ソファや布団、カーペットなど好きな素材や体勢に配慮。など	こだわりの刺激を完全にシャットオフまたは好きなだけ。
手順をきめるなどで、スムーズに学習できるようにする。	スケジュール、ワークシステム、手順書、視覚的構造化などの活用。	机、椅子、パーティションなどの配置で、集中しやすくする。など	こだわりの刺激を完全にシャットオフし、活動に集中できる環境。

行動特性と支援 (2/3)

行動特性	場所	現在困っている行動	出てきたニーズ
切り替えの困難さ	全般	やっていることを、終われないで、動けない、混乱、パニックなど。(結果として、次の活動も始められない)	・動く歩道のような廊下。 ・安全に引っ張って移動できるもの。 ・時間で消えたり付いたりする照明。音響。など
	個室	終われない、出てこない	・聴覚障害者向け、ランプやバイブレーションの通報機。 ・時間になると起き上がるベッド。 ・回転する部屋(回り舞台のようなもの)。
	余暇エリア	始められない、終われない、動けなくなる。	・境界を明確に、エリアを分ける: パーテーション、家具、カーペット ・タイマー、タイムタイマー、自動照明、音響など。 ・時間で収納される遊具。など
	お風呂	始められない、終われない、動けなくなる。着替えに時間がかかる。	・防水のタイマー。 ・水で濡れることを想定した視覚支援(ボード、吸盤、磁石) ・順番に引き出せる引き出し。 ・全自動シャワー。など
		洗剤を全部使ってしまう	・小分けの容器 ・1回分しかでない、ビルトインのソープポンプ。など
	トイレ	終われない、動けなくなる、出てこない。拭き続ける。流し続ける。ペーパーを使いすぎる。	・タイマー ・視覚支援(ボード、吸盤、磁石) ・カバー付き男性小便器 ・カバー付きの水を流すボタン、カバー付きの水道。など
	洗面	洗う時間がわからない。終われない	・タイマー。 ・視覚支援(ボード、吸盤、磁石)。 ・カバー付き水道。など
		過剰に歯を磨いてしまう。	・タイマー。 ・カウントして終りを伝える機械。 ・過剰に磨いても影響がないブラシ。など
	食事	残せずに、嫌いな物まで食べる。残せずに、嫌いな物があると全てを食べない、捨てる、パニックなど。きっかけがないと(ex.いただきますの声かけがないと)食べ始められない、終われない。	・残す容器や壁についているペールボックス。 ・回転寿司の、ボタンを押すと出てくる機械。
	休憩エリア	休憩場所から次の活動に移れない。	・自動照明、音響、映像。 ・時間になるとリクライニングする椅子やソファ。など
	教えてもらう場所	学習を始められない。終われない。	・刺激のコントロール。(嫌い、好きな刺激を OFF)。 ・タイマー、タイムタイマー、音声ガイド付きアラームなど。 ・専用のスペース。 ・PC の活用。 ・体験型の教室、通所、CH。など

SS	SH	HS	HH
生活、活動、時間の見通しと、今やっていることの「終わり」をはっきりと伝える構造化。	スケジュール、ワークシステムによる見通しの提示。特にワークシステムによる、「終わり」の提示が重要。	基本的に、スケジュールや、ワークシステムの設置場所が必要。仕切りや、カーペット、カーテン、照明、色調、音響などで、刺激のコントロール(どちらかというと余計な重基礎OFFする)。など	活動のひとつひとつを、別の場所でやることで、切り替えをしやすい(スペースの確保)
		部屋の中を、活動ごとに明確に分ける。など(仕切りやカーペット、家具など)	部屋は狭くても、寝るだけとし、他にも専用スペースや部屋を確保する。など
		時間で切れる電源。スピーカー。視覚障害者用のようなランプ等でのお知らせ。など	専用余暇エリアを1つ以上。など
		防水 or ビルトインタイムタイマーやタイマー、モニター。など	自動で排水してくれる浴槽。時間で座面が上がる浴槽。など
手順をきめるなどで、スムーズに入浴できるようにする。	小分け容器、1回しか押せない容器など。	ビルトインタイプの石けん等容器(1回押したら出ないなど)など	全自動シャワー。など
手順をきめるなどで、スムーズにできるようにする。	ペーパーを1回分ずつにする。など。	自動洗浄(スイッチは壁の中などに隠せる)。モニター。全身移る鏡。水量は多く、すっきりと流れる。水の回復が早い。など	専用トイレ。大便器・小便器両方。など
手順をきめるなどで、スムーズにできるようにする。	回数などを音声で。	水量のコントロール。時間制限。モニターなど。	手洗い場や脱衣場とは分ける。など
手順をきめるなどで、スムーズにできるようにする。	回数などを音声で。歯みがきのやり方映像など。	モニター。スピーカー。など	
手順をきめるなどで、スムーズに食事ができるようにする。食べたくないものはたべなくてもいいと伝える支援。	食べたくないものを置く場所を明確にする。調理の工夫で、嫌いな物はつぐらない、入れないなど。	他の人と別に食べる、仕切りをつくるなど(他の人の食べている嫌いな物などが見えないように。)	別室で食事。(専用の食事スペース)など
休憩の終わりを明確に伝える構造化。(ワークシステム)	音楽、画像、映像などの終了で終わりを伝える。など	電源、壁面映像、プロジェクターなど。自動で切れる電源など。	他の刺激をシャットOFFできる空間。
手順をきめるなどで、スムーズに学習できるようにする。	始まりの箇所や時間、終わりの箇所や時間などを、明確に伝える。など動機付け(なぜやるのか)の支援。	タイムタイマーや音声で、時間の経過を伝える。問題が1つずつでてきて、後何問か、も表示される。など	PC やタッチパネル内蔵の部屋。他の刺激はシャット OFF。

行動特性と支援（3/3）

行動特性	場所	現在困っている行動	出てきたニーズ
パニック、自傷、他害等	全般	破壊行為：物の破壊、壁紙をはがす。大声・奇声。大暴れ。頭突き、叩く、突進などの自傷・他害行動。おう吐。唾吐き。など	・強化素材。 ・家具や仕切りなどの固定やカバー。 ・半分固定。 ・ベルクロの活用しやすい素材や場所。 ・マグネットの活用しやすい構造（スチール面）。 ・腐らない床素材。 ・安価に取替え可能な床表面。壁材。ドアやふすま。など
	個室	部屋中を破壊。特定の物や場所を壊す。頭突きや叩くなどで騒音、怪我。物を投げる。ガラスを割る、ガラスに激突。など	・専用の個室がある。 ・照明、エアコン、スピーカー、コンセントなど、部屋の中からは目に付かない構造。 ・怪我しにくい素材。 ・壊れにくい、はがれにくい、汚れが付きにくく落としやすいなどの壁や床、天井。 ・防臭や消臭機能。 ・独立のエアコン。など
	余暇エリア	大声。多動。衝動的な行動。破壊。大暴れ。他の人への他害行動。など	・好きなだけ好きな（こだわりの）活動ができる空間、スペースをつくる。 ・掲示物などができる固定式かつカバーつきのボード。 ・境界を明確化にエリアを分ける：パーテーション、家具、カーペット。など
	お風呂	大声。壊す。暴れる。頭突きなどの自傷。支援者・介助者への他害行動。など	・壊れにくい、怪我しにくい。 ・換気。エアコン。 ・防臭、消臭。など
	トイレ	大声。尿便をまき散らす、こすりつける。壊す。不適切な物を流す。水を大量に飲む。他の人とのトラブル（けんか、暴力）など	・換気、消臭、防臭。 ・掃除しやすい。隙間がない。 ・水がのこらないトイレ。 ・エアコン。 ・詰まりにくい、詰まっても取り除きやすい。 ・ひとり1カ所以上の専用トイレ。など
	洗面	大声。壊す。暴れる。頭突き、叩くなど。他害行動。など	・換気、消臭、防臭。 ・掃除しやすい。隙間がない。 ・エアコン。 ・詰まりにくい、詰まっても取り除きやすい排水口。など
	食事	食器等の破壊。テーブル・椅子を壊す、投げる。大声。他の人とのトラブル。など	・壊れない素材。 ・食器を一体化して固定する。 ・固定できる机、椅子。 ・換気、エアコン。 ・消臭、防臭。 ・防水の壁や床や天井。汚れが付きにくい・掃除しやすい。 ・完全専用食事スペース。
	休憩エリア	大声。壊す。叩く。自傷。多動。脱走。など	・刺激の統制：活動場所の配置、パーテーション、家具、防音、照明等。 ・境界の明確化：パーテーション、家具、カーペット。 ・ソファや椅子、本などを置くテーブルや机・コーピングのグッズ。 ・色々なグッズを入れる棚やラック。 ・エアコン。 ・鍵。など
	教えてもらう場所	大声。暴れる。壊す。叩く。噛みつく。多動。など	・刺激のコントロール。（嫌い、好きな刺激を OFF）。 ・照明機器（明るく、ちらつかない、1つの光源）。 ・専用のスペース。 ・体験型の教室、通所、CH。など

SS	SH	HS	HH
障害特性のアセスメントと適切な支援・構造化。	ひとりひとりに合った、構造化(スケジュール、ワークシステムは必須)。環境の意味理解を丁寧に。	基本的に、スケジュールや、ワークシステムの設置場所が必要。仕切りや、カーペット、カーテン、照明、色調、音響などで、刺激のコントロール(どちらかというと余計な重基礎 OFF する)。など	専用の個室、活動スペースなど。(ずっと、ではなく、アセスメント期間から構造化導入期くらいまで)
	個室で、特性に合わせた構造化。スケジュールやワークシステムを丁寧に。活動も静・動がバランス良く、とぎれずにあること。	活動の場所があること。収納などが、すっきりとしまえて、アクセスしやすいこと。不快・嫌いな刺激のコントロール。好きな活動、刺激の保障。など	不快刺激の完全 OFF。快刺激・好きなことなどを充分に楽しめる環境。壊れにくさ、怪我しにくさ、など。
	ひとりひとりに合った、構造化(スケジュール、ワークシステムは必須)。環境の意味理解を丁寧に。		
	スケジュール、ワークシステム、手順書など。使いやすい備品、日用品。	換気、エアコン、収納。など	専用浴室。壊れにくさ、怪我しにくさ。
		換気。消臭。防臭。エアコン。収納。など	床材(防水、防腐、部分改修可能など)。コーキング。大便要個室・小便用個室両方の設置。専用トイレ。など
		洗面台(大きさ、深さ、水道の位置や出っ張りなどを個々に合わせる)。鏡(要／不要)。収納。換気。エアコン。など	床材(防水、防腐、部分改修可能など)。コーキング。使わないときには見えなくできる(独立洗面所、洗面台にシャッターなど)。手洗い場と分ける。など
	ひとりひとりに合った、構造化(スケジュール、ワークシステムは必須)。環境の意味理解を丁寧に。調理を別に(味覚、温度、嗜好への配慮)。時間差などで、ひとりで落ち着いて食事。残したい、捨てたいものの容器。食べ終わったものから片付けられる棚。食器の工夫や配慮。など	調理のコンロ数。冷蔵庫を分ける。換気。食器・調理器具などの洗浄。食堂の換気、消臭、防臭、防水など。他の人とクロスしない構造化(仕切りなど)。など	独立・専用の調理室・食事場所。キッチンと食堂は完全に分ける／対面かつシャッター。継ぎ目や隙間のない壁や床。など
	ひとりひとりに合った、構造化(スケジュール、ワークシステムは必須)。環境の意味理解を丁寧に。	刺激のコントロール(できるだけ刺激を少なく)。リラックスできる椅子、ソファ、布団など。快・好きな音や光の遊具やリラクゼーショングッズ。など	完全に刺激が OFF できる空間。スヌーズルーム。ボールプール。ウオーターベッド。トランポリン。ブランコ。など
	ひとりひとりに合った、構造化(スケジュール、ワークシステムは必須)。視覚的構造化。十分な活動(数や時間など)。環境の意味理解を丁寧に。	刺激のコントロール。集中しやすい体勢のとれる机(座卓)、椅子(座布団や座椅子)。集中しやすい照明、音響。など	専用の個室。不快な刺激は完全 OFF できる環境。など

5. 住環境アセスメントシートの開発

現在行動援護対象者の大半を占める、自閉症スペクトラムの人たちは、様々な障害特性を持っている。（資料参照：行動援護従事者のための自閉症の特性に関するシート）

11の特性を、全て均等に、全員が持っているのではなく、ひとりひとりがそれぞれの組み合わせで、それぞれの程度に合わせ持っており、さらに、その障害特性に基づいてアウトプットされる彼らの行動は、ひとりひとり全く違うものである。そのひとりひとりの違いに対する十分な環境調整・配慮が必要となり、それを、住環境のアセスメントを主軸に、まとめたのが、表 5-8（住環境アセスメントシート）である。

図表 5-8 住環境アセスメントシート (1/2)

特性		チェック/聞き取りのポイント		設計/建築/インテリアなどへの配慮事項					
1	相手からのメッセージをキャッチ(理解)することの特性	☐ 言葉の理解が全くできない ☐ 言葉の理解が苦手 ☐ 多すぎる情報の処理は苦手/できない ☐ 理解できる情報は何か()	スケジュールシステムは?	情報理解のための形式は?	☐ 縦横 ☐ 横横 ☐ その他	☐ 設置場所(要/不要) ☐ 要 ☐ 不要	ロスケジュール/ワークシステムの設置条件を整える ☐ 変更/追加なども考えておく ☐ 外しやすさ/外したときの後が残らない/はがれないなど ☐ 他の場合でも、同じ条件で設置できるなど		
			ワークシステムは?	情報理解のための形式は?	☐ 縦横 ☐ 横横 ☐ その他	☐ 設置場所(要/不要) ☐ 要 ☐ 不要			
			コミュニケーションツールは?	情報理解のための形式は?	☐ 縦横 ☐ 横横 ☐ その他	☐ 設置場所(要/不要) ☐ 要 ☐ 不要			
2	相手に気持ちを伝えることの特性	☐ 自分の気持ち/状況/状態を、人にうまく伝えられない/全く伝えられない/伝わる/伝われないと答えられない ☐ 相手によって伝えられる/伝えられないがある ☐ 状況によって伝えられる/伝えられないがある ☐ 伝えようとするが、伝わりにくい表現/全く違うことを言っているなど	コミュニケーションツールは?	情報発信のための形式は?	☐ 縦横 ☐ 横横 ☐ その他	☐ 設置場所(要/不要) ☐ 要 ☐ 不要	ココミュニケーションツールの設置条件を整える ☐ 電話/IT/インターフォンなどの設置場所/配線/電源など		
			その他	電話	要	表示画面		要	不要
			Fax	要	表示画面	要		不要	
3	感覚の特異性	☐ 目を細めていることがある(明るい屋外/明るい室内/暗い屋外/暗い室内/物や人の多いところ) ☐ 明るいところが好き、明るいところによくいる(どこ) ☐ 暗いところが好き、暗いところによくいる(どこ) ☐ まぶしいのが嫌い(ダメ) ☐ 晴れた日の屋外が嫌い。 ☐ 蛍光灯の部屋に入らない、蛍光灯の部屋でいららすなど ☐ 白熱灯の部屋に入らない、白熱灯の部屋でいららすなど ☐ 多数の光源の部屋での活動が嫌い、本が読めない、字・絵が描けないなど。 ☐ 薄曇りの日にまぶしがする ☐ ガラス(透明/すりガラス)の好みなど ☐ カーテンを通す光、模様 ☐ 網戸の色、模様、網戸を通しての光などが気になる、嫌い ☐ 暗いところが嫌い(ダメ) ☐ 寝るときも光が必要 ☐ 暗い場所がダメ、嫌い(夜/曇り/雨/薄暗がり/部屋の一部にできる暗がりなど) ☐ 光源の好き嫌い(部屋、場所、電気など) ☐ 色の好き嫌い() ☐ キラキラしたものの、ちかちかする電気が好き/きらい ☐ TV ☐ パソコン/スクリーンセーバー/視覚エフェクト ☐ 電飾など ☐ 火、炎 ☐ 経然とした場所であらう、落ち着かない、など	光	明るさ	☐ 光源 ☐ 明度(コントラスト) Low.....High	☐ 太陽(自然光)/蛍光灯/白熱灯/ナトリウムランプ/その他() Low.....High	光源/スイッチ(調光/リモコンなど)/間接照明 ☐ 採光の配慮/照明器具のワット数など ☐ 照明器具の取り付け位置 ☐ 収納場所の見えやすさ/見えにくさ/アクセスしやすさ/しにくさなど ☐ 外装・内装の色 * 常識にとらわれない素材や色もありうる ☐ カーテンなどの配慮		
			暗さ	☐ 彩度 ☐ 天気 Low.....High	☐ ガラス(クリア/くもり)/カーテン/ブラインド/網戸など ☐ 壁・天井・床の模様/鏡(写るもの)/電飾() ☐ その他()				
			その他の視覚刺激	☐ 画面 ☐ 色 ☐ 素材 ☐ 片付け具合 ☐ 見えるようになっていないとわからない ☐ 見えると混乱	☐ TV/PC/ゲーム/他() ☐ 何色?() ☐ 何色?() ☐ 何色?() ☐ 掃除/収納				
4	音	☐ 大きな音・特定の音にびっくりする/きらい/耳をふさぐ/泣く/過剰反応するなど ☐ 大きな音・特定の音・鳴き声にびっくりする/きらい/耳をふさぐ/泣く/過剰反応するなど ☐ 低周波音を気にする(何の音?) ☐ 小さな音・声などでも聞こえる/気にする(何?) ☐ 人の足音/車の音/ドアの音などを聞き分けられる/聞き分けてさらに気にする ☐ たくさん音があるところが嫌い/ダメ/泣く/いららすなど ☐ 耳ふさぎをする(どこで?) ☐ 大きな声を出す/叫ぶなどがある ☐ 大きな音で音楽を聴く ☐ お気に入りの場所がある(音に關係する)	聴覚	敏感	☐ 音源 ☐ 人の声(誰?どんな?) ☐ Vol. 音/楽器/動物の鳴き声/低周波音(何?) ☐ レベル/その他の生活音(何?)	☐ 防音/消音の工夫 ☐ ドア/窓などの音 ☐ 2階建ての場合の生活音 ☐ 出入りの音 ☐ 駐車場の位置 ☐ 低周波音の出るものの配置 (換気扇/モーター音/冷蔵庫・室外機・パソコンなど/電気器具など)			
			純感	☐ 音源 ☐ 人の声(誰?どんな?) ☐ Vol. 音/楽器/動物の鳴き声/低周波音(何?) ☐ レベル/その他の生活音(何?)	☐ よく聴く音楽 ☐ ()				
			聴かない	レベル					
5	味覚	☐ 特定の味のもの/特定のものしか食べない ☐ 特定の温度のものしか食べない ☐ 味の変化に敏感 ☐ 湿った味はため ☐ 濃い味が好き/きらい ☐ 薄い味が好き/きらい ☐ 臭いに敏感(どんな臭い?) ☐ 嫌な臭いがある() ☐ 好きな臭いがある() ☐ よくもののにおいを嗅ぐ	味覚	敏感		☐ キッチン/食器の工夫 ☐ コンロ数を多く ☐ 冷蔵庫はできれば利用者別 ☐ 食器の素材や種類、予備 ☐ 料理器具 ☐ 洗剤/食洗機などはどうするか ☐ 換気 ☐ においの付きにくい素材 ☐ 各部屋の空気の行き来 ☐ 洗濯機・洗剤			
			純感						
			こだわり						
6	痛み	☐ 怪我/やけど/その他の痛みに気づかない ☐ ちよつとした接触でも痛がる/痛がり ☐ 痛みに対する過敏/鈍感が共存している ☐ 好きな素材がある(何?) ☐ 嫌いな素材がある(何?) ☐ 素材の模様などがダメ/気になるなど ☐ さわり心地を気にする(何?) ☐ 食べ物/食器などの触覚 ☐ 食べ物の感触/食感 ☐ コーピンググッズ()	痛み	敏感		☐ 発作のある人/怪我をしやす ☐ い人/異食のある人などへの配慮(壁/床/はがれにくさなど)			
			鈍感						
			その他						
7	さわり心地	☐ 好きな素材がある(何?) ☐ 嫌いな素材がある(何?) ☐ 素材の模様などがダメ/気になるなど ☐ さわり心地を気にする(何?) ☐ 食べ物/食器などの触覚 ☐ 食べ物の感触/食感 ☐ コーピンググッズ()	さわり心地	☐ 木 ☐ 金属 ☐ 布 ☐ 壁紙 ☐ プラ ☐ タイル ☐ 他	☐ 素材(内外の壁/床材/天井材、浴室、トイレ、洗面所、ドア、取っ手、水栓などなど) ☐ 家具 ☐ カーテン、カーペット、畳など ☐ 布団、タオルなど				
			触覚	☐ 水/湯 ☐ 暑さ ☐ 寒さ ☐ 熱 ☐ 冷	☐ エアコンは部屋ごとに独立、出力が充分であること(電気容量にも注意) ☐ 冷暖房器具の種類(温度管理、空気清浄、風などの影響への配慮)				
			湿度	☐ 乾 ☐ 湿	☐ 除湿/加湿				
8	湿度	☐ 暑がり/許容温度 ☐ 寒がり/許容温度 ☐ 温度の許容範囲がある ☐ 食べ物の温度 ☐ 体温調節が苦手/できない ☐ 体温変化による反応 ☐ 湿度が嫌い/好き ☐ 乾燥がダメ/好き その他(気圧など) こだわり	湿度	☐ 乾 ☐ 湿	☐ 除湿/加湿				

住環境アセスメントシート（2/2）

特性		チェック／聞き取りのポイント	設計／建築／インテリアなどへの配慮事項			
全体よりも細部に注目する特性	4 衝動性	☐ 見えたなら何が何でも手に入れたい／そこへ行きたい ☐ 聞こえたら気になる／確かめずにはいられない ☐ どうしてもおいを確かめたくなる／臭いに敏感でそこへ行きたくなる ☐ 口味を確かめずにはいられない ☐ さわってみずにはいられないものがある	視覚 聴覚 嗅覚 味覚 触覚 その他			☐ 可動式／フレキシブルに使える仕切り、家具、収納など ＊初めから細かく個室化するとかえって使いにくい場合が多い。変更も難しくなる。
	5 時間の整理統合の困難さ	☐ 自由な時間、休憩時間、何もすることがない時間帯に落ち着かない、うろうろする、気になることが増えるなど ☐ 先の見通しが立たない状況で落ち着かない／パニックなど ☐ 与えられた課題／活動などを、ひとつひとつ指示しないといけないなど	スケジュールシステムは？ 情報理解のための形式は？ () トランジション無し アイコンの移動	トランジション有り 縦横 設置場所(要／不要) その他 有り 要ポケット 無し 設置場所(要／不要)	☐ スケジュール／ワークシステムの設置条件を整える ☐ 変更／追加なども考えておく ☐ 外しやすい／外したときの後が残らない／はがれないなど ☐ 口の場所でも、同じ条件で設置できるなど	
	6 空間の整理統合の困難さ	☐ 決まった場所で、決まったことをする ☐ 一度行った場所を忘れず、同じことをしようとする／同じようにできる ☐ 一度使った場所を、別の活動に使うとすると混乱／パニック ☐ 場所覚えられない、よく間違える ☐ 同じテーブルで食事をする、人の物でも食べてしまう ☐ 大きな机での共同作業では、自分の空間が理解できない／人物のをつかってしまうなど ☐ ある場所で使う物は、他の場所で使えないなど	活動と場所を1対1対応とする 居室 衣類の着脱 食事？ 寝る 余暇 勉強 他 食事 居室 衣類 寝具 文具 遊具 その他 玄関 靴 傘 その他 その他	☐ ひとつの空間はひとつの目的に使われるようにする配慮(禁煙、ユニットバス、脱衣室兼洗濯室兼洗面所、食堂兼居間など) ＊水場なども、工事の合理性より、使う場所にひとつずつ設置されるなど ☐ 勉強、遊び、寝るなどによって部屋を別にする ☐ 部屋ごとの色 ☐ 必要な場所に手洗い場所を専用で ☐ 台所のシンクなど、2～3槽にわけける。 ☐ 食堂、居間、兄弟の机・部屋などの区別 ☐ 部屋、ドア、収納、備品、日用品などの色や形やマークなど		
	7 変化への対応の困難さ	☐ 小さな変化にも混乱／パニック(人／物／位置／手順など) ☐ 物の場所にごたわる ☐ 初めての場所に入れない／全然平気 ☐ 初めての人と行動できない／全然平気 ☐ 一度やったこと、度行った場所、一度一緒にやった人は、その通りにならないと混乱／パニックなど	スケジュールシステムは？ 情報理解のための形式は？ () トランジション無し アイコンの移動	トランジション有り 縦横 設置場所(要／不要) その他 有り 要ポケット 無し 設置場所(要／不要)	☐ 模様替え・修理などが必要になることを考えて、普段全く使わない部屋・トイレ、シャワー室などをつくれるといい。 ☐ 全く同じ素材などを使えるような準備(備蓄)も ☐ 可動式かつ固定できる家具、備品 ☐ 出入口り口なども、多めに(普段は使わないこともありうる)	
	8 般化の特性	☐ 般化できない ☐ ある活動を、他の場所でできない ☐ ある人とやったことは、その人としできない ☐ ある場所で使われたものを、他の場所ですつかうと混乱 ☐ 間違った般化が多い ☐ 細部に注目し、その条件があると、どこでもやってしまうなど	スケジュールシステムは？ 情報理解のための形式は？ () トランジション無し アイコンの移動	トランジション有り 縦横 設置場所(要／不要) その他 有り 要ポケット 無し 設置場所(要／不要)	☐ ワークシステム・手順書など必須。壁や、テーブル等に貼れる工夫。浴室、洗面所、トイレなども。	
記憶の特性	9 記憶の維持の困難さ	☐ その時には理解したはずが、行き先ややることを忘れてしまう／間違えてしまう ☐ やることをすぐに忘れてしまう ☐ 2つ以上の活動／情報処理を同時にできないなど	スケジュールシステムは？ 情報理解のための形式は？ () トランジション無し アイコンの移動	トランジション有り 縦横 設置場所(要／不要) その他 有り 要ポケット 無し 設置場所(要／不要)	☐ 全ての場所にポケットやメモ、リマインダーなどを(貼り)つける場所が必要になると考えておく	
	10 長期記憶の特性	☐ 一度覚えたら忘れない／忘れられない ☐ 時に失敗経験は、物・場所・人などが受け付けられなくなる ☐ 暗記力が高い／記憶力が良い ☐ 少しの変化も許容できないが、全く変わることは大丈夫など	場所 文脈 物 その他	失敗、パニックなどの経験を忘れられない。一度覚えたことの修正がとても苦手などが、あるかどうかのチェック。	☐ 全く違う空間にできるような改修の可能性を考えておく ＊壁紙、ドア、ふすま、窓、床材、天井材などの建材、家具、カーテンなど、出入口り口なども。	
11 相手の気持ちを想像すること、状況判断の困難さ	☐ ここではよくて、あらではダメなどの判断ができない ☐ あのときはよくて、今はダメなどがわからず混乱 ☐ 相手の立場になって考えられない／行動できない	☐ 共用の場所、共有のものなどの取扱が苦手	☐ 玄関、トイレ、風呂、居間、食堂、廊下など生活時間帯による動線の重なり ☐ 職員の勤務時間への配慮など	☐ 家族・入居者それぞれに専用の部屋や場所、収納、備品など。境界の曖昧な空間をつくらない。		

以下、特性のひとつひとつについて、必要な配慮のポイントと、実際の場面（先進地での事例の画像）でのツールや方法などについて説明する。

1) 特性診断と構造化の例

1	相手からのメッセージをキャッチ（理解）することの特性	☐ 言葉の理解が全くできない ☐ 言葉の理解が苦手 ☐ 多すぎる情報の処理は苦手／できない ☐ 理解できる情報は何か（ ）
---	----------------------------	--

* 情報を伝えるための、様々なツールが必要になります。

□スケジュール



実物を使って、壁面に掲示



カードボードを壁に設置



シートを壁に貼る



1日分のスケジュール

□ワークシステム



料理の手順など



洗面台に手洗いのワークシステム



洗面所での様々なワークシステム

□その他



今日の日付



何曜日？ お天気は？



避難経路



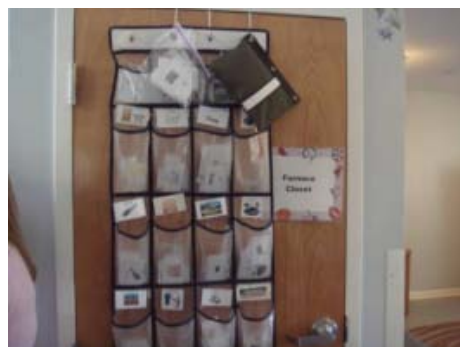
どこに何が入っているか

2	相手に気持ちを伝えることの特性	☐ 自分の気持ち／状況／状態を、人にうまく伝えられない／全く伝えられない／訊かれないと答えられない ☐ 相手によって伝えられる／伝えられないがある ☐ 状況によって伝えられる／伝えられないがある ☐ 伝えようとするが、伝わりにくい表現／全く違うことを言っているなど
---	-----------------	---

* 自分の意思や気持ちをつたえるためのコミュニケーションツールが必要になります。
(代替コミュニケーション)



ジェスチャーまたは、ポインティングしてコミュニケーション



実物とカードでコミュニケーション

3	感覚の特異性 (視覚)	☐目を細めていることがある（明るい屋外／明るい室内／暗い屋外／暗い室内／物や人の多いところ） ☐明るいところが好き、明るいところによくいる（どこ） ☐暗いところが好き、暗いところによくいる（どこ） ☐まぶしいのが嫌い（ダメ） ○晴れた日の屋外が嫌い。 ○蛍光灯の部屋に入らない、蛍光灯の部屋でいらいらするなど ○白熱灯の部屋に入らない、白熱灯の部屋でいらいらするなど ○多数の光源の部屋での活動が嫌い、本が読めない、字・絵が描けないなど。 ○薄曇りの日にまぶしがる ○ガラス（透明／すりガラス）の好みなど ○カーテンを通す光、模様 ○網戸の色、模様、網戸を通しての光などが気になる、嫌い ☐暗いところが嫌い（ダメ） ○寝るときも光が必要 ○暗い場所がダメ、嫌い（夜／曇り／雨／薄暗がり／部屋の一部にできる暗がりなど） ☐光源の好き嫌い（部屋、場所、電気など） ☐色の好き嫌い（） ☐キラキラしたもの、ちかちかする電気が好き／きらい ○TV ○パソコン／スクリーンセーバー／視覚エフェクト ○電飾など ○火、炎 ☐雑然とした場所でいらいら、落ち着かない、など
---	----------------	--

* 部屋などの照明、ガラス、カーテンなどへの配慮と、収納による視覚情報の整理が必要になってきます。



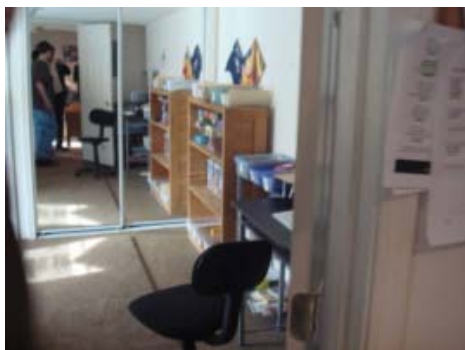
暗い照明の部屋



真っ暗にできる暗幕カーテン



いろいろな電気・電飾



鏡張りの壁



視覚的な整理（境界をはっきり・余計な刺激は見えない。）



視覚的な整理（見えたほうが良い物・見えない方がいいところ）



3	感覚の特異性 (聴覚)	☐ 大きな音・特定の音にびっくりする／きらい／耳をふさぐ／泣く／過剰反応するなど ☐ 大きな声・特定の声・鳴き声にびっくりする／きらい／耳をふさぐ／泣く／過剰反応するなど ☐ 低周波音を気にする(何の音?) ☐ 小さな音・声などでも聞こえる／気にする(何?) ☐ 人の足音／車の音／ドアの音などを聞き分けられる／聞き分けてさらに気にする ☐ たくさんの音があるところが嫌い／ダメ／泣く／いらいらするなど ☐ 耳ふさぎをする(どこで?) 　　いつ?) ☐ 大きな声を出す／叫ぶなどがある ☐ 大きな音で音楽を聴く ☐ お気に入りの場所がある(音に関係する) など
---	----------------	--

* 防音、遮音、消音などの配慮が必要になります。



北国のペアガラス・2重サッシ
は、防音・遮音効果



隣の建物との間が大きくあいて
いる

3	感覚の特異性 (味覚)	☐ 特定の味のもの／特定のものしか食べない ☐ 特定の温度のものしか食べない ☐ 味の変化に敏感 ☐ 混ざった味はだめ ☐ 濃い味が好き／きれい ☐ 薄い味が好き／きれい など
---	----------------	--

* 調理・盛りつけなどの工夫・配慮が必要となります。

3	感覚の特異性 (嗅覚)	☐ 臭いに敏感（どんな臭い？ ） ☐ 嫌な臭いがある（ ） ☐ 好きな臭いがある（ ） ☐ よくもののにおいを嗅ぐ など
---	----------------	---

* 空気の循環、換気、消臭などへの配慮が必要になります。



床にエアコンの吹き出し口

3	感覚の特異性 (触覚・痛みなど)	☐ 怪我／やけど／その他の痛み気づかない ☐ ちょっとした接触でも痛がる／痛がり ☐ 痛みに対する過敏／鈍感が共存している など
---	---------------------	--

* 怪我の防止、壊れにくさ、などへの工夫や配慮が必要になります。



角にクッション材



ドアが開いたときに指を挟まない



暖房器具のやけど防止

3	感覚の特異性 （触覚・さわり 心地など）	☐ 好きな素材がある（何？） ☐ 嫌いな素材がある（何？） ☐ 素材の模様などがダメ／気になるなど ☐ さわり心地を気にする（何？） ☐ 食べ物／食器などの触覚 ☐ 食べ物の感触／食感 ☐ コーピンググッズ（ など
---	----------------------------	---

*ひとりひとりの好みに合わせて工夫・配慮することで、より落ち着いて、心地よく過ごせます。



「SENSORY ROOM」



ペットも

3	感覚の特異性 (触覚・温度)	☐ 暑がり／許容温度 ☐ 寒がり／許容温度 ☐ 温度の許容範囲がある ☐ 食べ物の温度 ☐ 体温調節が苦手／できない ☐ 体温変化による反応 など
---	-------------------	---

* センシティブな温度管理が必要な場合もあります。ex.) 許容温度（気温）が16度という人。

3	感覚の特異性 (触覚・湿度その他)	☐ 湿気が嫌い／好き ☐ 乾燥がダメ／好き ☐ 気圧の影響を受ける など
---	----------------------	--

* エアコン、建物の工法などで工夫や配慮が必要になります。

4	衝動性	☐ 見えたら何が何でも手に入れたい／そこへ行きたい ☐ 聞こえたら気になる／確かめずにいられない ☐ どうしてもにおいを確かめたくなる／臭いに敏感でそこへ行きたくなる ☐ 味を確かめずにいられない ☐ さわってみずにいられないものがある など
---	-----	---

* こだわりになるものの刺激をコントロールする必要があります。



衝動的に引っ張りたくなったとき
外れるマジックテープのカーテン



透明強化ガラス or
アクリルボード のTV ラック



聞こえると嫌な音は OFF



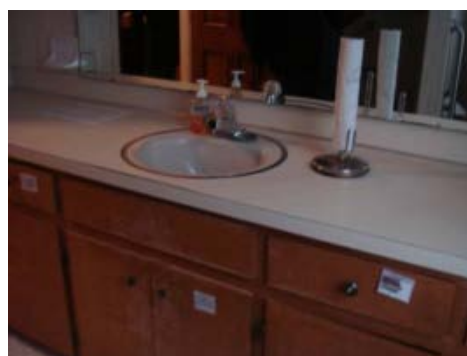
普段は押しちゃダメ



気になるスイッチは、かわいく隠す



普段はさわれない・出せない



余分なものは置かない・片付ける



室内機を隠して壊さない・視覚的にもすっきり



鏡が気になる人の洗面台



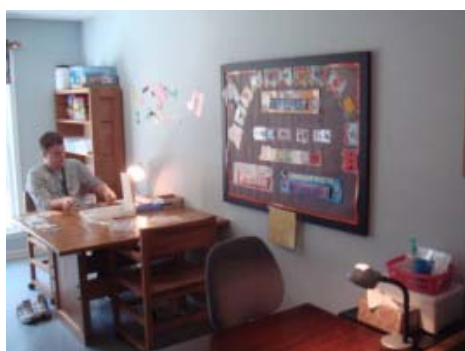
冷蔵庫も、普段はドアの中。見えない

5	時間の整理統合の 困難さ	☐ 自由な時間、休憩時間、何もすることがない時間帯に落ち着かない、うろうろする、気になることが増えるなど ☐ 先の見通しが立たない状況で落ち着かない／パニックなど ☐ 与えられた課題／活動などを、ひとつひとつ指示しないとできない など
---	-----------------	--

* スケジュールやワークシステムの設置が必要になります。(参照：特性 1)

6	空間の整理統合の 困難さ	☐ 決まった場所で、決まったことをする ☐ 一度行った場所を忘れず、同じことをしようとする／同じようにできる ☐ 一度使った場所を、別の活動に使おうとすると混乱／パニック ☐ 同じテーブルで食事をすると、人の物でも食べてしまう ☐ 大きな机での共同作業では、自分の空間が理解できない／人の物をつかってしまうなど ☐ ある場所で使う物は、他の場所で使えない など
---	-----------------	---

* 空間、場所などをわかりやすく、使いやすくする工夫や配慮が必要になります。



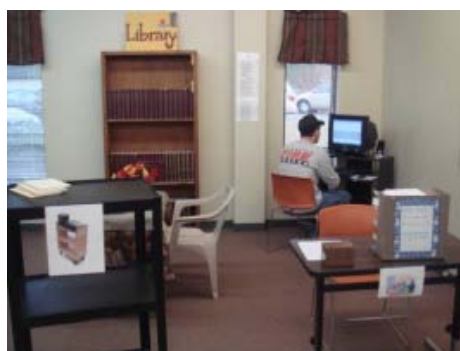
自室に、活動ごとに机



二層式で、使い分けを



オープンスペースにカーペットで境界線 1 人 1 人に専用スペースづくり





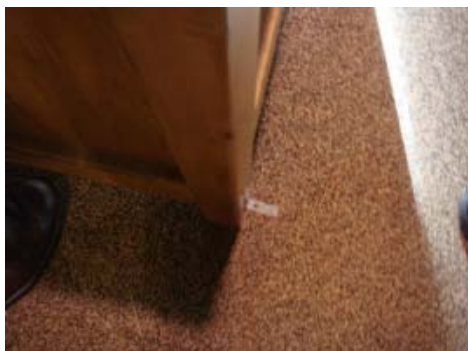
オープンスペースにカーペットで境界線 1 人 1 人に専用スペースづくり



色や容器や棚、目印などで
自分の場所、何を置く場所などを
はっきりわかりやすく

7	変化への対応の困難さ	☐ 小さな変化にも混乱／パニック（人／物／位置／手順など） ☐ 物の場所にこだわる ☐ 初めての場所に入れない／全然平気 ☐ 初めての人と行動できない／全然平気 ☐ 一度やったこと、一度行った場所、一度一緒にやった人は、その通りにならないと混乱／パニック など
---	------------	---

* 家具などの固定など、通常は、変化を少なくする配慮。支援の見直しなどで、環境を一新するような支援が必要になることもあります。



床に固定



リモコンや、ボードなども壁面に固定（その他、特性 1、特性 6 などを参照）



可変式のドアや壁

8	般化の特性	☐ 般化できない ☐ ある活動を、他の場所でできない ☐ ある人とやったことは、その人とはしかできない ☐ ある場所で使われたものを、他の場所でつかうと混乱 ☐ 間違った般化が多い ☐ 細部に注目し、その条件があると、どこでもやってしまう など
---	-------	---

* ワークシステムや手順書、ルール表その他、生活上のいろいろな場所で必要に。
 新しい活動を増やす、支援を見直すなどのたびに、新規設置が必要になります。
 （特性 1、特性 5 などを参照）

9	記憶の維持の困難さ	☐ その時には理解したはずが、行き先ややることを忘れてしまう／間違えてしまう ☐ やることをすぐに忘れてしまう ☐ 2つ以上の活動／情報処理を同時にできない など
---	-----------	--

* 移動式のスケジュールやリマインダーなどが常に必要になります。活動の場所には必ず、カードなどのマッキングポケットや、ボード置き場などが必要です。



個人スペースの様々なツール



左端ワークシステムのためのカードポケット



移動式のスケジュール



キッチンの注意事項、レシピ、手順書など



指示書を置く場所も必要

←個人スペースの指示書、リマインダー

10	長期記憶の特性	☐ 一度覚えたら忘れない／忘れられない ☐ 特に失敗経験は、もの・場所・人などが受け付けられなくなる ☐ 暗記力がよい／記憶力がよい ☐ 少しの変化も許容できないが、全く変わることは大丈夫 など
----	---------	--

* 失敗経験や、不快な経験をリセットするために、環境を全く一新するような支援が必要になることもあります。

11	相手の気持ちを想像すること、状況判断の困難さ	☐ ここではよくて、あちらではダメなどの判断ができない ☐ あときは良くて、今はダメなどがわからず混乱 ☐ 相手の立場になって考えられない／行動できない など
----	------------------------	--

* 同居の人たちとの関係性への配慮（部屋の配置、動線、共用の場所など）が必要になります。個室は前提。場合によっては、各部屋にバス・トイレ・キッチンなども。



触れ合わないよう、狭い通路



はっきりとした区切り、専用スペース

以上のような特性から、実際に CH 等をつくる場合に、環境をどのように工夫・調整できるでしょうか。表に沿って、必要なチェック項目や、配慮点などを説明します。

2) 設計・建築・インテリアなどへの配慮事項チェックリスト

①相手からのメッセージをキャッチ（理解）することの特性

スケジュールシステムは？	情報理解のための形式は？ ()	トランジッション有り	縦	設置場所 (要／不要)	☐ スケジュール／ワークシステムの設置条件を整える ☐ 変更／追加なども考えておく ☐ 外しやすさ／外したときの後が残らない／はがれないなど ☐ 他の場所でも、同じ条件で設置できるなど
		トランジッション無し	横		
			その他		
			アイコンの移動		
	有り	要ポケット			
	無し				
ワークシステムは？	情報理解のための形式は？ ()	設置場所 (要／不要)			
コミュニケーションツールは？	情報理解のための形式は？ ()	設置場所 (要／不要)			
時間の理解への支援は？	情報理解のための形式は？ ()	設置場所 (要／不要)			
その他					

* 様々なコミュニケーションツールに合わせて、設置場所や、設置条件を整えます。

支援の見直しなどで、変更や新設が常時必要となるため、基本的には、暮らしに必要な場所の全てで、設置・取り外しが必要となります。

②相手に気持ちを伝えることの特性

コミュニケーションツールは？	情報発信のための形式は？ ()				設置場所 (要／不要)	☐ コミュニケーションツールの設置条件を整える ☐ 電話／IT／インターフォンなどの設置場所／配線／電源など
その他	電話	要	表示画面	要		
		不要		不要		
	Fax	要				
		不要				
	携帯電話	要				
		不要				
	PC mail	要				
		不要				
	Mobile mail	要				
		不要				
	インターフォン					
	その他					

* 特性 1 参照。

* 他に、外部とのコミュニケーションのツール、手段を整える必要のある人もいます。

後付では、配線、電源、設置場所などに、気になる部分などができてしまう可能性がありますので、ビルトインできるよう計画できるといいでしょう。

③感覚の特異性

(1) 視覚

光	明るさ	○	光源	太陽（自然光）／蛍光灯／白熱灯／ナトリウムランプ／その他（ ）	
		×	明度（コントラスト）	Low High	
	暗さ	○	彩度	Low High	
		×	天気	晴天／薄曇り／曇り／雨	
	キラキラ、ちかちかなど	○	ガラス（クリア／くもり）／カーテン／ブラインド／網戸／壁・天井・床の模様／鏡		
×		（写るもの）／電飾（ ）／その他（ ）			
その他の視覚刺激	画面	TV／PC／ゲーム／他（ ）			
	色	○	何色？（ ）		
		×	何色？（ ）		
	素材	○			
		×			
	片付け具合	見えるようになっていないとわからない		掃除／収納	
見えると混乱					
こだわり					

☐光源／スイッチ（調光／リモコンなど）／間接照明
☐採光の配慮／照明器具のワット数など
☐照明器具の取り付け位置
☐収納場所の見えやすさ／見えにくさ／アクセスしやすさ／しにくさなど
☐外装／内装の色
 ＊常識にとらわれない素材や色もありうる
☐カーテンなどの配置

(2) 聴覚

音	敏感	音源	人の声（誰？どんな？ ）／スピーカー音／楽器／動物の鳴き声／低周波音	
		Vol.		
		レベル	（何？ ）／その他の生活音（何？ ）	
	鈍感	音源	人の声（誰？どんな？ ）／スピーカー音／楽器／動物の鳴き声／低周波音	
Vol.				
レベル		（何？ ）／その他の生活音（何？ ）		
音楽	聴く	音源	よく聴く音楽（ ）	
		Vol.		
		レベル		
	聴かない			
音感				
こだわり				
その他				

☐防音／消音の工夫
☐ドア／窓などの音
☐2階建ての場合の生活音
☐出入りの音
☐駐車場の位置
☐低周波音の出るものの配置（換気扇／モーター音：冷蔵庫・室外機・パソコンなど／電気器具など）

(3) 味覚

敏感		☐ キッチンの工夫 ☐ コンロ数を多く ☐ 冷蔵庫はできれば利用者別 ☐ 食器の素材や種類、予備 ☐ 料理器具 ☐ 洗剤／食洗機などはどうするか
鈍感		
こだわり		
その他		

(4) 嗅覚

敏感		☐ 換気 ☐ においの付きにくい素材 ☐ 各部屋の空気の行き来 ☐ 洗濯機・洗剤
鈍感		
こだわり		
その他		

(5) 触覚

痛み	敏感		☐ 発作のある人／怪我をしやすい人／異食のある人などへの配慮（壁／床／はがれにくさなど）	
	鈍感			
	その他			
さわり ごこち	木	○		☐ 素材（内外の壁／床材／天井材、浴室、トイレ、洗面所、ドア、取っ手、水栓などなど） ☐ 家具 ☐ カーテン、カーペット、畳など ☐ 布団、タオルなど
		×		
	金属	○		
		×		
	布	○		
		×		
	壁紙	○		
		×		
温度	プラ	○		☐ エアコンは部屋ごとに独立、出力が充分であること（電気容量にも注意） ☐ 冷暖房器具の種類（温度管理、空気清浄、風などの影響への配慮）
		×		
	タイル	○		
		×		
	他			
	水／湯	暑さ	○	
			×	
		寒さ	○	
			×	
湿度	食べ物	熱	○	☐ 除湿／加湿
			×	
		冷	○	
			×	
	湿度	乾	○	
			×	
		湿	○	
			×	

- * 感覚の特異性については、物理的な環境への配慮が大きな効果を発揮します。住環境においても、もっとも配慮されるべき特性です。
- * 五感全てに渡って、様々な特性を持つ人が多いので、そのひとりひとりの違いに配慮するためには、個人のスペース（CHにおいては、自室）は、個々に応じてカスタマイズされることが大事になります。（前掲：黒板の壁、電飾、照明、冷暖房、遮音・防音など）

④衝動性

視覚		☐ 可動式／フレキシブルに使える 仕切り、家具、収納など * 初めから細かく個室化するとか えて使いにくい場合が多い。変 更も難しくなる。
聴覚		
嗅覚		
味覚		
触覚		
その他		

- * 衝動性から起きる行動は、ものを壊してしまう、人と接触し怪我をする、人のものをとる・壊す、こだわり行動につながるなど、暮らしを維持・継続することを難しくする要因となります。その都度、即時に、フレキシブルに対応できる配慮が必要となってきます。

⑤時間の整理統合の困難さ

スケジュールシステムは？	情報理解のための形式は？ ()	トランジション有り	縦 横 その他	設置場所 (要／不要)	☐ スケジュール／ワークシステムの設置条件を整える ☐ 変更／追加なども考えておく ☐ 外しやすさ／外したときの後が残らない／はがれないなど ☐ 他の場所でも、同じ条件で設置できるなど
		トランジション無し			
		アイコンの移動	有り	要ポケット	
			無し		
ワークシステムは？	情報理解のための形式は？ ()			設置場所 (要／不要)	
手順書、指示書など	固定	設置場所			
	都度設置	設置場所／方法			
	持ち運び	置き場所／方法			
	その他				

- * 特性 1 を参照。
- * 指示書などに、「時間」「時間の概念」を伝える必要が出てくる場合があります。時計以外のツール（砂時計、タイマー、タイムタイマーなど）の設置やビルトインなども考慮されるとよいでしょう。
Ex.) 風呂場に、タイムタイマー（砂時計）などで、お湯から出る時間を視覚的に知らせるなど。

⑥空間の整理統合の困難さ

活動と場所を 1 対1対応とする	居室	衣類の着脱		☐ひとつの空間はひとつの目的に使用されるようにする配慮（禁ユニットバス、脱衣室兼洗濯室兼洗面所、食堂兼居間など） * 水場なども、工事の合理性より、使う場所にひとつずつ設置されるなど ☐勉強、遊び、寝るなどによって部屋を別にする ☐部屋ごとの色 ☐必要な場所に手洗い場所を専用で ☐台所のシンクなど、2～3槽にわけ る ☐食堂、居間、兄弟の机・部屋などの区別 ☐部屋、ドア、収納、備品、日用品などの色や形やマークなど
		食事？		
		寝る		
		余暇		
		勉強		
		他		
	食事			
	収納	居室	衣類	
			寝具	
			文具	
			遊具	
			その他	
		玄関	靴	
			傘	
			その他	
その他				
多目的使用OKの場所がある				

- * 前述、前掲のように、個々のスペースが、活動ごとに必要となるなど、小さく、可変的なスペースづくりが必要となります。それを前提とした、広めの個人スペース（感覚の特異性に配慮されているなど）と可動式の壁、仕切り、収納などを初めから考えておけると、後々まで使い勝手がよくなるでしょう。
- * 多目的な空間も、目的ごとに場所を区切るなどで、落ち着いて過ごせる空間にすることができます。
- * 収納場所なども、できる限り 1 対 1 対応で収納でき、アクセスしやすい配慮があるといいです。

⑦変化への対応の困難さ

スケジュールシステムは？	情報理解のための形式は？ ()	トランジション有り	縦 横 その他	設置場所 (要／不要)	☐ 模様替え・修理などが必要になることを考えて、普段全く使わない部屋・トイレ、シャワー室などをつくれるとよい。 ☐ 全く同じ素材などを使えるような準備（備蓄）も ☐ 可動式かつ固定できる家具、備品 ☐ 出入り口なども、多めに（普段は使わないこともありうる）
		トランジション無し			
		アイコンの移動	有り 無し	要ポケット	
ワークシステムは？	情報理解のための形式は？ ()			設置場所 (要／不要)	
物の位置					
ルール・手順など					
季節					
気温					
こだわり					

- * 特性 1 参照。
- * 「変化への対応が困難なので、全く変えない」という支援は、かえって、こだわりや、後々の混乱やパニックなどの要因となります。壁、収納、仕切りなど、可動かつ固定可能なものがあるとベストです。
- * 何か問題がおき、それが煮詰まってしまい行動のマネジメントができない状況になるという最悪の事態も想定し、同じ建物でも、入り口や部屋を全く違えることができるようなつくりにしておくことも、ケースによっては必要かもしれません。

⑧般化の特性

スケジュールシステムは？	情報理解のための形式は？ ()	トランジション有り	縦 横 その他	設置場所 (要／不要)	□ワークシステム・手順書など必須。壁や、テーブル等に貼れる工夫。浴室、洗面所、トイレなども。
		トランジション無し			
		アイコンの移動	有り 無し	要ポケット	
ワークシステムは？	情報理解のための形式は？ ()			設置場所 (要／不要)	
人					
場所					
文脈					
物					
その他					

- * 特性 1 参照。
- * どちらかというと SS（ソフト・ソフト）又は、SH（ソフト・ハード）で対応すべき特性です。SH のツールをあちこちに設置、掲示する必要がでてくることが考えられるので、初めから、壁面をコルクや木、スチール（マグネット可能）にするなどを考えておけるとベストでしょう。（特に、一般的な家屋では、水場での設置が難しい）

⑨記憶の維持の困難さ

スケジュールシステムは？	情報理解のための形式は？ ()	トランジション有り	縦 横 その他	設置場所 (要／不要)	□全ての場所にポケットやメモ、リマインダーなどを（貼り）つける場所が必要になると考えておく
		トランジション無し			
		アイコンの移動	有り	要ポケット	
ワークシステムは？	情報理解のための形式は？ ()			設置場所 (要／不要)	
リマインダー					
指示書・手順書など					
その他					

- * 特性 8 参照。

⑩長期記憶の特性

人		失敗、パニックなどの経験を忘れられない。一度覚えたことの修正がとても苦手などが、あるかどうかのチェック。	□全く違う空間にできるような改修の可能性を考えておく * 壁紙、ドア、ふすま、窓、床材、天井材などの建材。家具。カーテンなど。出入り口なども。
場所			
文脈			
物			
その他			

* こだわり行動などにつながりやすい特性です。

HH では、特性 8 と同様、環境を一新するなどの支援が必要となる可能性を考えておく必要があるでしょう。

⑪相手の気持ちを想像すること、状況判断の困難さ

□共用の場所、共有のものなどの取扱が苦手	□玄関、トイレ、風呂、居間、食堂、廊下など 生活時間帯による動線の重なり 職員の勤務時間への配慮など	□家族・入居者それぞれに専用の部屋や場所、収納、備品など。 境界の曖昧な空間をつくらない。
----------------------	--	--

* 共同、集団での生活の中で、問題視される行動につながりやすい特性です。

基本的に、自分以外の人への配慮が難しい人たちであることに配慮した空間作りが望ましいでしょう。ただし、SS で工夫・配慮が可能な部分も多いので、HH だけで解決しようとしないことも大事です。(ex.時間差など)

6. CH 物件アセスメントシートの開発

このアセスメントシート（図表 5-9）は、既存の建物を、主に自閉症スペクトラムの人たちが暮らす CH に改修する際に、彼らの障害特性に配慮しながら、どこをどのように改修していくかをアセスメントするために開発されたものである。

サービス管理責任者または、事業所管理者のレベルで、自閉症スペクトラムの人たちの特性をアセスメントできる資質のある人が、予算、利用者の特性、人員配置などを考え合わせながら、中古物件を CH に活用するために改修する際に、物件をアセスメントするためのチェックリストとして使用することを想定している。（新築物件を考える際にも、使用できるようになっている。）

物件を探すときから、細かな部分の改修まで、3D の視点で、家、建物をイメージしながら見ていただきたい。

【中古物件を、自閉症スペクトラムの人たちの CH に改修するときの前提チェック】

- ①HH の部分で、予算的、あるいは、物理的に改修不可能なウィークポイントがあったら、候補物件中の優先順位は最下位に位置づける。
- ②SS、SH で対応可能と判断できることについては、チェックしておいて、改修後に対応すればいいと考える。
- ③大切なポイントは、開設までの時間、改修等にかかる予算、支援にあたる職員の資質・レベルなどを勘案し、どこをどう改修するか、を明らかにすることである。

図表 5-9 CH 物件アセスメントシート (1/2)

	チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
家が見えてきました	お隣近所との距離感		建物同士が離れている方がいい	音が聞こえる。動きが見える。物を投げる。大声を出す。大きな音を出す。夜の行動。
	車でのアクセスは	敷地内への出入り 敷地内で転回できるか 玄関までの距離、アクセス	出入りしやすい。車で直接玄関前に行けるといい バックしたり、切り返ししたりしなくても出て行ける構造だ 車のドアを開けたら、目の前に玄関があるといい。雨・雪の日に乗りやすいといい(屋根?)。	衝動性が高い。 車の音。ぶつかる危険性。 衝動性が高い。カサの扱いができない。ぬれることを気にする。
	徒歩でのアクセスは	敷地内への出入り	車とは別に、入り口があり、玄関まで道がついている(わかりやすい)といい	1対1対応。危険への配慮ができない。
		玄関までの距離	近すぎず、遠すぎず(道路に近すぎない。他の物が目に入らないなど)	飛び出し。衝動性が高い。
		玄関までの敷地内の様子	近隣との境界 庭の様子 ベランダなど 水道関係	衝動性。短期記憶。 基本的に、乱雑はNG。家の出入りに影響のある視覚刺激は極力無くす。
	ぐるり1周の様子	他の出入り口	通常の出入り口からは見えにくい、出入り口があるとよい	人の出入りにごだわり(職員、その他の人の出入り。郵便、新聞、宅配便、配達なども。。。)
		水、ガスの配管など	できるだけ、裏手に、露出しないよう囲いをあちこちから引かない。ひとまとめに1かっしょから引く。できれば地中化したいくらい。。。。	ごだわり。視覚的にすっきり。
		電気、電話の配線など	できるだけ音のでない構造で。	雨の音。暑さ。雨樋なども壊す対象になりやすい。
		屋根の様子	形状は？雨水の処理はどうなっている？夏の日射の影響はどのくらい？	挨拶ができない。苦手。人へのごだわり。はなしかけ。出入りを気にするなど。
		家の境界はどうなっているか	お隣からの目線、お隣への目線。人と目線が合わない高さがほしい	室温管理。まぶしさなど。
		日照	1日の動き、年間の動き、樹木の影響・成長によっての変化などはっきりとわかりやすいこと。(顔いたりしない。境界がはっきりしている。)	視界がせまい。歩きやすい歩き方。場所の違いを見分けにくいなど。
玄関前で	段差やスロープは			利き手。あげたときに見えるもの。
	どんな戸か	引き戸	どちらからも開くか 動きがスムーズか 強度 音	調節が苦手。きちんと閉まらないと嫌。
		ドア	できるだけ音のでない構造で。 引くより押す。右(左)奥へ開く。が得意。あげた方向に人がいる場合は逆のほうがよい。とっての付け方で左右どちらにもあけられるドアあるか。。。？ゆっくり自動的にしする。	人の出入りが気になる。音過敏。 行動しやすさ。または、危険への配慮ができない。あげた先に見えるもの。
	玄関周りの様子	ポスト・新聞受け	大きな郵便物・配達物、新聞も充分に入りきる大きさ。宅配便ボックスもあるとよい。	はみ出しているのが気になる。何が入っているか確認したい。ごだわり。など
	* 乱雑で刺激になる物がないか	その他の置物 マットなど	傘立て(1対1対応で挿しておけるor下げておける) どの位置に立って戸を開ければいいかがわかりやすい。	1対1対応 視覚的構造化
玄関内に入りました	エントランスの様子 * 使い勝手はいいか？ 片付いているかなど	下駄箱 郵便の脱ぎ場所 上がり口の段差	一人一人用になっているとよい。戸は付いたり外したりが可能なもの。 下駄箱前に十分な広さ 身体に障害がない限り段差0はNG。人によっては座って靴を履くのにちょうど良い高さ。	1対1対応 脱ぎ履きするときに立つ場所
	玄関から見える家の中の様子 * 何がどう見えるか、見えないかなど	廊下	長く続く廊下はNG。	走りたくなる。とりあえず置くまで確認したくなる。人の動きが目に入る可能性が増える。
		部屋・ドア	全て、引き戸か、部屋の中へ開くように。	人の動きに配慮できない。開いていても、玄関からわかりにくい。
		まど	夜以外、曇りでも、電気をつけずに(その人にとって)充分な程度のあかりとり。	共用部分は、人によつての差に対応しにくい。(電気をつけた人、つけたくない人などが重なる可能性も)
家にあがります	とりあえず、どの部屋にも入らず、廊下を歩く	家の構造	入居者、職員の生活動線を考えて。	動きが重ならない。見えにくい。行動しやすい。など
		廊下の広さや床	すれ違いが充分にできる。必要に応じて、中央分離できる。通行が多い場所は、床基礎の補強。防音・吸音などの配慮。	人への配慮が苦手。できない。動きが気になる。音が気になる。必ず同じ動きをするなどで、同じ場所に負荷がかかり易い。
		部屋の配置と入り口の様子 歩いただけで、そこがなにかわかる場所	アクセスしやすい部屋としにくい部屋が必要。 入居者にとってもわかりやすいということ。それでOKの場合とNGの場合あり。	入ってはいけない場所は見えにくなどの構造。
	玄関側から順に各部屋をみます	入り口	全て、引き戸か、部屋の中へ開くように。	人への配慮が苦手。できない。勢いよくあけてしまう。
		見渡す	広さ 天井の高さ 部屋の印象	狭い方がいい人。ある程度広さが必要な人。 1対1対応で場所が必要な人。 圧迫感はない方がいいが、高すぎると不安な人も。 * 難しいが・・・その人の特性で感じる。
		電気スイッチ	ドアを開けたときに手の届きやすい場所。スイッチと照明は1対1対応。(複数の照明機器がある場合、スイッチも、それぞれに対応して設置)	場合(その人の視野や衝動性など)によっては、ドアを開けた目の前にスイッチということも。。。まぶしさ。視覚的な特性。好み。
		照明器具	入居者それぞれに合った照明機器、場所、W数	
		壁	スケジュール、WSなどによって、設置場所(箇所)	
		窓	向き、ガラス、縁	
		床orたたみ	入居者に応じて。体重、行動などによって、床基礎の補強。	
		カーテンなど	カーテンボックスあったほうがいい。あげた時に収納できるのもO。	視覚的構造化。すっきり片付くほうがよい。
		収納	必要充分な収納(入居者による)	
		誰・何に使う部屋になるかな	構造 コンセント位置 窓の位置 壁の様子 音	
		部屋数	第一印象と、その後のチェックで、この部屋は誰が使うといいか、または、何に使うと良いか。。。と考えている	
			活動と場所が1対1対応で必要。居室の他に、活動のできるスペースや部屋が必要。	

CH 物件アセスメントシート (2/2)

	チェックすること			できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
家 に あ が り ま す	トイレはどうなっているか な	様式	洋式・和式 男性用小便 器	男性入居者がいる場合、できれば人数に合わせてほしい。	譲り合いは苦手・できない。1対1対応 のほうがよい。
		数		最低2人に1カ所(座・立一組)ほしい	
		床の材質		掃除しやすい(コーキング重要！)	
		窓			
		水の流れ具合		1回でさっと流れる。復帰がはやく、すぐに次を流せる。音が小さい。	流れず残るのは気になる。音が気にな る。
		手洗い場		1つのトイレに1つあると良い。(小さすぎない！)棚、WSなどの 設置場所	1対1対応。
		収納		トイレの外、でも不足の際にすぐに補充できる場所。(入居者に は、どこにあるかわからないor見えない)	こたわり、使いすぎ。
	お風呂・脱衣所・洗面所	構造	独立か、ワ ンユニットか	それぞれ独立型	1対1対応
		電気スイッチ			
		照明器具			
		広さ		お風呂：介助者が一緒に入って窮屈でない。 脱衣所：棚、カゴなどを置くスペース。脱ぐところ・着るところ。 洗面所：介助者が横に並んで立てる。洗面台は、顔を洗うとき肘 までカバーされるといい。水栓が邪魔にならない。	十分に身体が動かせると。介助者or支 援者が介助or教え易いような配慮。
		使い勝手		入居者に合わせて使える。(可動式棚。収納。電源(コンセ ント)、タオル掛け、など)	
		お風呂の沸かし方		自動式。コントロールパネルは、浴室外(利用者ノータッチ)。	温度へのこたわり(夏冬で違うなど)。 誤操作。事故防止。
		シャワー・水栓の湯温 コントロールは		水栓・シャワーの切り替えレバーではなく、それぞれの水栓。混 合式水栓・コントロールは浴室外。入居者ノータッチ)	1対1対応
		窓・換気扇		ユニット。充分換気できる。掃除しやすい。カビ防止。はがれなど が出にくい。滑り防止。全身映る鏡。	こたわり。入浴の仕方の視覚支援。
		壁			
		床			
	次は台所	構造	ダイニング キッチン、対 面式オーブ ン、キッチン	キッチン・食堂独立(行き来できない)。配膳だな両方向から。	食べ物に関しては、こたわりが強い場 合が多い。予防も含め。 おかわりへの対応も必要な場合が多 いので、両方向からのやりとりがで きることに配慮。
		見渡す(ここで食事を つくり、食べるの は・・・)		キッチン(入居者分のトイレがおける調理台。コンロの口数で きただけたくさん。換気。) 食堂(多くても3人。カウンター、テーブル)	余裕をもって調理できる。余裕をもって 食事ができる。
		電気スイッチ		食べる場所ごとに。スイッチも独立で)	人によって違いがある場合あり。食堂 で食べないということも考慮に入れて 検討。
		照明器具			
		冷蔵庫の位置		キッチン内	こたわり。
		熱源		電気(火力充分)。コンロ口数たくさん。	
		水道		水、混合、熱湯。	
		換気		複数？調理中の臭いまで充分換気される。	感覚の特性。熱処理。
		床		食堂(椅子が動かし易い。掃除しやすい。汚れが付きにくい・目 立たないなど)	こたわり。
		壁		撥水。掃除しやすい。はがれが出にくい。	こたわり。
		収納		キッチン(1週間分くらいの食材、消耗品など、備蓄品など、食 器。)、食堂(ウオークイン収納庫)	食堂には置かない。
そ の 他 の チ ェ ッ ク	冷暖房			各部屋独立。充分な出力。室外機の位置(音。換気など) できれば、風の出にくいもの(蓄熱式暖房とか、床暖房とか、冷 房にもあるのか・・・?)。	人それぞれの適温に対応。風の動き が嫌な場合も。部屋の物が動くことも 気になる場合。対流しないと部屋の上下で温度差。
	配電盤	容量、配線図とブレー カーの対応		充分な容量。各部屋で独立のブレーカー。冷暖房はそれにまた 別。食堂も余裕をもって。緊急時のバッテリー。	全員(調理・職員含む)がフルに冷暖 房や電気器具を使っても大丈夫であ ること。
	スタッフの事務スペース			独立で。オートロック。指紋キー。(開け閉めの手間がなく、職員 以外入れない)。出入り口の配慮(ドアが開いたときに、中が入 居者に見えない)	生活の場であることへの配慮。危険物 (薬、洗剤、薬品、その他)の管理。金 銭管理。データ管理。など
	洗濯・乾燥室			共用に独立で。乾燥室は必須。個々に必要な人は、各部屋につ ける配慮。	
	収納			年間、緊急時を見越した量。掃除用具。入居者用は、できるだけ 1対1対応で収納できるとよい。	活動するときに必要になる以外は目に入 らない。雑然としない。1対1対応で 収納(片付け)。
	近隣からの音			昼夜、週間、月間、年間、一時的など。要聞き取り	聴覚過敏など。
	配置換え、改修などのし やすさ			可動式の壁やバーティション。張り替えやすい壁。床。できれ ば、1室以上の何でもOKの部屋。	こたわり。変化が苦手。汎化が苦手。
	複数の玄関			動線が重なりそうな場合や、人の出入りが気になる場合など。 再構造化の際に、全く変化させたい場合なども。	こたわり。変化が苦手。汎化が苦手。 人への配慮が苦手。
	鍵			それぞれの部屋に。内外から開け閉めOK。ただあげるだけでは 開かないけれど、開け閉めしやすいシャッターなんてあるだろう か。	使う・使わないは状況により判断。
	コンセント			掃除しやすい場所に必要数のコンセント。コンセントカバー。 入居者の居室は、それぞれに応じて場所を考える。	こたわり。視覚的にすっきり。使うところ はわかりやすく。など

以下、チェックのひとつひとつについて、必要な配慮のポイントとなどについて説明する。

1) 家が見えてきました

	チェックすること
1	お隣近所との距離感は
2	車でのアクセスは
3	徒歩でのアクセスは
4	ぐるり1周の様子

* どんな特性の、誰と誰が、どんな暮らし方をするのか。をイメージしながら、周囲の状況、アクセスなどをチェックしましょう。

2) 玄関前です

	チェックすること
1	段差やスロープは
2	どんな戸か
3	玄関周りの様子
	* 乱雑で刺激になる物がないか

* すぐに玄関にはいらず、一度立ち止まって、360 度見渡してみましょう。
 基本的に、整然と片付いている状態が得られかどうか、を見極めましょう。
 誰と誰が、どんな生活をするか、をイメージしながら、入り口までのアクセス、気になることはないか？などをチェックします。

3) 玄関内に入りました

	チェックすること
1	エントランスの様子
2	* 使い勝手はいいか？片付いているかなど
3	玄関から見える家の中の様子
	* 何がどう見えるか、見えないかなど

* 入り口から入ったままの向きで、家の中を見てみましょう。
 衝動的に向かって行きたくなるようなものや、場所はないでしょうか？
 玄関スペースの広さは充分でしょうか。
 収納も充分に必要なになります。

4) 家に上がります

	チェックすること
1	とりあえず、どの部屋にも入らず、廊下を歩く
2	玄関側から順に各部屋をみます
3	トイレはどうなっているかな
4	お風呂・脱衣所・洗面所
5	次は台所

* まず、ドアや戸、ふすまなどを全て閉めた状態で、家の中を歩いてみましょう。
入居者の生活動線を考えながら、家の構造、広さなどをチェックしていきます。

* 見ただけですぐに、何をする場所がありましたか？
さわってみたくなるようなものや場所はありませんか？

5) その他のチェック

	チェックすること
1	冷暖房
2	配電盤
3	スタッフの事務スペース
4	洗濯・乾燥室
5	収納
6	近隣からの音
7	配置換え、改修などのしやすさ
8	複数の玄関
9	鍵
10	コンセント

* 人の暮らしは、建物だけでは成り立ちません。「生活」を考えてチェックしておきましょう。
入居してみたら、足りなかった。考えていなかった。などが出てきて、対応のために コ
ストがかかった。などということもあります。

1-1 家が見えてきました／お隣・近所との距離感は？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
周囲の家（建物）との境界、空間など	建物同士が離れている方がいい	音が聞こえる。動きが見える。 物を投げる。大声を出す。 大きな音を出す。夜の行動。

＊本人の行動面への配慮点のみではなく、周囲の人たちの暮らしぶりなども、考慮が必要です。感覚的な不快刺激がないか？こだわりにつながるようなことはないか？周囲に不快となるような行動はないか？など、お互いの暮らしやすさを確保することを、大切に考えます。

1-2 家が見えてきました／車でのアクセスは？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
敷地内への出入り	出入りしやすい。車で直接玄関前に行けるといい	衝動性が高い。
敷地内で転回できるか	バックしたり、切り返したりしなくても出て行ける構造だといい	車の音。ぶつかる危険性。
玄関までの距離、アクセス	車のドアを開けたら、目の前に玄関があるといい。雨・雪の日に乗りやすいといい（屋根？）。	衝動性が高い。 カサの扱いができない。 ぬれることを気にする。

＊最も大切なことは、事故防止です。飛び出しや、接触事故などが起きないように配慮ができる、スペースや、建物配置になっているかどうかを、チェックします。

＊車から降りたら、建物の入り口が見える、アクセスが良い。などの配慮があるとよいでしょう。

1-3 家が見えてきました／徒歩でのアクセスは？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
敷地内への出入り	車とは別に、入り口があり、玄関まで道がついている（わかりやすい）といい	1対1対応。危険への配慮ができない。
玄関までの距離	近すぎず、遠すぎず（道路に近すぎない。他の物が目に入らないなど）	飛び出し。衝動性が高い。
近隣との境界	玄関まで歩く間に、隣の家の人、音、においなどの影響を受けない	衝動性。短期記憶。
玄関までの敷地内の様子	庭の様子 きれいに片付いている。殺風景ではない。	基本的に、乱雑はNG。家の出入りに影響のある視覚刺激は極力無くす。
	ベランダなど 物干しなどが、目につきにくい配置がいい	
	水道関係 玄関までに、水道はないほうがいい。	

- * 敷地内に入ってから、玄関までのアクセスがいいことは大切ですが、道路に近すぎる玄関は、飛び出しなどによる事故の危険性が想定されます。
- * 外の空間は、視野が広がり、目に入る刺激が増えます。出入りに充分配慮し、目的を忘れず、刺激に左右されるストレスを無くす配慮が必要です。

1-4 家が見えてきました／ぐるり1周の様子は？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
他の出入り口	通常の出入り口からは見えにくい、出入り口があるとよい	人の出入りにこだわり (職員、その他の人の出入り。郵便、新聞、宅配便、配達なども。)
水、ガスの配管など	できるだけ、裏手に、露出しないような囲いを	こだわり。視覚的にすっきり。
電気、電話の配線など	あちこちから引かない。ひとまとめに1ヵ所から引く。できれば地中化したいくらい。	
屋根の様子	形状は？雨水の処理はどうなっている？夏の日射の影響はどのくらい？	雨の音。暑さ。雨樋なども壊す対象になりやすい。
家の境界はどうなっているか	お隣からの目線、お隣への目線。人と目線が合わない高さがほしい	挨拶ができない・苦手。人へのこだわり。はなしかけ。出入りを気にするなど。
日照	1日の動き、年間の動き、樹木の影響・成長によっての変化など	室温管理。まぶしさなど。

- * 住む場所なので、建物内部に目がいきがちですが、家の周囲の状況や構造、ものへのこだわりや、トラブルの可能性も考えられます。
- また、雑然とした環境が、近隣の人たちからの印象を悪くするということもあり得ます。
- 入居者にとっていい環境は、地域の人たちにとってもいい環境である、という発想で考えられるといいのではないのでしょうか。

2-1 玄関前です／段差やスロープは？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
玄関に入るためのステップなど	はっきりとわかりやすいこと。 (躓いたりしない。境界がはっきりしている。)	視野がせまい。躓きやすい歩き方。場所の違いを見分けにくいなど。

- * 段差が無ければいい、ということではなく、住む人に合わせて、どうするのがいいか、を考えましょう。はっきりした段差があることで、気持ちが玄関に向きやすいという人もいます。視野が狭く、躓きやすい人もいます。

2-2 玄関前です／どんな戸でしょうか？

チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
引き戸	どちらからも開くか		利き手。あけたときに見えるもの。
	動きがスムーズか	勢いよくあけてしまうことへの対応。 うまく動かないことにストレスがないように。	調節が苦手。きちんと閉まらないと嫌。
	強度	勢いよくあけてしまうことへの対応	
	音	できるだけ音のでない構造で。	人の出入りが気になる。音過敏。
ドア	どちらへ開くか (押す・引く／右・左)	引くより押す。右(左)奥へ開く。が得意。あけた方向に人がいる場合は逆のほうがよい。とっての付け方で左右どちらにもあけられるドアあるか？ ゆっくり自動的にしまる。	行動しやすさ。または、危険への配慮ができない。あけた先に見えるもの。

* 複数の人が暮らす場所では、出入り口の構造への配慮は、当然のことでしょう。
また、入居者の特性に合わせて、開けやすさ／閉めやすさなども配慮が必要です。

2-3 玄関前です／玄関周りの様子は？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
ポスト・新聞受け	大きな郵便物・配達物、新聞も充分に入りきる大きさ。宅配便ボックスもあるとよい。	はみ出しているのが気になる。何が入っているか確認したい。こだわり。など
その他の置物	傘立て(1対1対応で挿しておける or 下げておける)	1対1対応
マットなど	どの位置に立って戸を開ければいいかがわかりやすい。	視覚的構造化

* 配達物などが中途半端にしか入らないポストや、はがれやすい・ずれやすいなどのマットも、気になります。

SH、HSでの配慮で対応可能ですが、チェックしておくことが大切です。

3-1 玄関に入りました／エントランスの様子は？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
下駄箱	一人一人用になっているとよい。戸は付いたり外したりが可能なもの。	1対1対応
靴の脱ぎ場所	下駄箱前に十分な広さ	脱ぎ履きするときに立つ場所
上がり口の段差	身体に障害がない限り段差0はNG。人によっては座って靴を履くのちょうど良い高さ。	

* でかけるとき、帰ってきたときの行動を考えて、収納や棚、広さなどをチェックします。

3-2 玄関に入りました／玄関から見える家の中の様子は？

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
廊下	長く続く廊下は NG。	走りたくなる。とりあえず置くまで確認したくなる。人の動きが目に入る可能性が増える。
部屋・ドア	全て、引き戸か、部屋の中へ開くように。	人の動きに配慮できない。開いていても、玄関からわかりにくい。
窓	夜以外、曇りでも、電気をつけずに（その人にとって）充分な程度のあかりとり。	共用部分は、人によつての差に対応しにくい。（電気をつけたい人、つけたくない人などが重なる可能性も）

* 玄関は、チャレンジがたくさんの社会への出入り口です。

出かけるときにも、帰ってきたときにも、スムーズにシーンを切り替えられることが大切です。帰ってきたときには、心身の状態がアクティブになっていると考えられますので、家の中の刺激に反応しやすい状態でもあるでしょう。家に入って玄関に立ったとき、刺激がずっと OFF になり、落ち着いた状態に切り替えられるような配慮が必要になります。SS、SH での配慮が大切となりますが、HS、HH で刺激をコントロールする効果は大きいでしょう。

4-1 家に上がります／とりあえず、どの部屋にも入らずに廊下をあるきます

チェックすること	できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
家の構造	入居者、職員の生活動線を考えて。	動きが重ならない。見えにくい。行動しやすい。など
廊下の広さや床	すれ違いが充分にできる。必要に応じて、中央分離できる。通行が多い場所は、床基礎の補強。防音・吸音などの配慮。	人への配慮が苦手・できない。動きが気になる。音が気になる。必ず同じ動きをするなどで、同じ場所に負荷がかかり易い。
部屋の配置と入り口の様	アクセスしやすい部屋としにくい部屋が必要。	入ってはいけない場所は見えにくくなどの構造。
歩いただけで、そこがなにかわかる場所	入居者にとってもわかりやすいということ。それで OK の場合と NG の場合あり。	

* CH は、家族ではなく、共同生活をする人たちの家ですから、居室は基本的に個室です。

プライバシーの確保という点でも大切ですが、他の人との関係性をつくりにくいという特性をもつ人が多いので、お互いの生活がクロスしない、気にならないという配慮が大切でしょう。

HH、HS で、最大限の配慮ができる部分ですが、改修では、難しいこともある部分です。

物件を決める際の、大きなポイントになるでしょう。

4-2 家に上がります／玄関側から順に各部屋を見ます

チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
入り口		全て、引き戸か、部屋の中へ開くように。	人への配慮が苦手・できない。勢いよくあけてしまう。
見渡す	広さ	狭すぎず、広すぎない。仕切りができる。など	狭い方がいい人。ある程度広さが必要な人。1対1対応で場所が必要な人。
	天井の高さ	低すぎず、高すぎない。その人の背の高さによる。	圧迫感はない方がよいが、高すぎると不安な人も。
	部屋の印象	第一印象を大事にする	*難しいが・・・その人の特性で感じる。
電気スイッチ		ドアを開けたときに手の届きやすい場所。スイッチと照明は1対1対応。（複数の照明機器がある場合、スイッチも、それぞれに対応して設置）	場合（その人の視野や衝動性など）によっては、ドアを開けた目の前にスイッチということも。
照明器具		入居者それぞれに合った照明機器、場所、ワット数	まぶしさ。視覚的な特性。好み。
壁		スケジュール、WSなどによって、設置場所（箇所）	
窓		向き、ガラス、縁	
床 or たたみ		入居者に応じて。体重、行動などによって、床基礎の補強。	
カーテンなど		カーテンボックスあったほうがよい。あけた時に収納できるのも○。	視覚的構造化。すっきり片付くほうがよい。
収納		必要充分な収納（入居者による）	
誰・何に使う部屋になるかな	構造	第一印象と、その後のチェックで、この部屋は誰が使うといいか、または、何に使うと良いか、と考えている	
	コンセント位置		
	窓の位置		
	壁の様子		
部屋数	音	活動と場所が1対1対応で必要。居室の他に、活動のできるスペースや部屋が必要。	

*居室は、暮らす人、ひとりひとりに合わせて、最大限の配慮がされるべき場所です。

HH、HSで対応できる場所は、最優先のポイントとなるでしょう。

4-3 家に上がります／トイレはどうなっている？

チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
様式	洋式・和式		
	男性用小便器	男性入居者がいる場合、できれば人数に合わせてほしい。	譲り合いは苦手・できない。1対1対応のほうがよい。
数		最低2人に1カ所（座・立一組）ほしい	
床の材質		掃除しやすさ（コーキング重要！）	
窓			
水の流れ具合		1回でさっと流れる。復帰がはやく、すぐに次を流せる。音が小さい。	流れず残るのは気になる。音が気になる。
手洗い場		1つのトイレに1つあると良い。（小さすぎない！）棚、WSなどの設置場所	1対1対応。
収納		トイレの外、でも不足の際にすぐに補充できる場所。（入居者には、どこにあるかわからない or 見えない）	こだわり。使いすぎ。

* 実は、CH等でもっとも入居者同士のトラブルが発生するのがトイレです。

必要に迫られて使う場所ですから、他の人と使用が重なることをSSでは避けられないからです。できれば、少なくとも2カ所（男性の場合、上手にできないなども含め男性用小便器も）、可能ならば、ひとりに1カ所あるといいでしょう。

4-4 家にあがりました／お風呂・脱衣所・洗面所

チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
構造	独立か、ワンユニットか	それぞれ独立型	1 対 1 対応
電気スイッチ			
照明器具			
広さ		お風呂：介助者が一緒に入って窮屈でない。 脱衣所：棚、カゴなどを置くスペース。脱ぐところ・着るところ。 洗面所：介助者が横に並んで立てる。洗面台は、顔を洗うとき肘までカバーされるといい。水栓が邪魔にならない。	十分に身体が動かせる。介助者 or 支援者が介助 or 教えやすいような配慮。
使い勝手		入居者に合わせて使える。(可動式棚。収納。電源(コンセント)、タオル掛け、など)	
お風呂の沸かし方		自動式。コントロールパネルは、浴室外(利用者ノータッチ)。	温度へのこだわり(夏冬で違うなど)。誤操作。事故防止。
シャワー・水栓の湯温コントロールは		水栓・シャワーの切り替えレバーではなく、それぞれの水栓。混合式水栓・コントロールは浴室外。入居者ノータッチ)	1 対 1 対応
窓・換気扇		ユニット。充分換気できる。掃除しやすい。	
壁		カビ防止。はがれなどが出にくい。	こだわり。入浴の仕方の視覚支援。
床		滑り防止。全身映る鏡。	

* 一般的には、共用が基本となる場所です。SS の配慮で、時間差で個別使用が可能ですが、ひとりひとり、の SH、HS が違いますので、それに対応しうる HH 面での配慮があると、使いやすい場所になるでしょう。

4-5 家に上がりました／次は台所

チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
構造	ダイニングキッチン、対面式オープン、キッチン	キッチン・食堂独立（行き来できない）。配膳だな両方向から。	食べ物に関しては、こだわりが強い場合が多い。予防も含め。おかわりへの対応も必要な場合が多いので、両方向からのやりとりができることにも配慮。
見渡す（ここで食事をつくり、食べるのは・・・）		キッチン（入居者分のトレイがおける調理台。コンロの口数できるだけたくさん。換気。食堂（多くても3人。カウンター、テーブル）	余裕をもって調理できる。余裕をもって食事ができる。
電気スイッチ		食べる場所ごとに。スイッチも独立で）	人によって違いがある場合あり。食堂で食べないということも考慮に入れて検討。
照明器具			
冷蔵庫の位置		キッチン内	こだわり。
熱源		電気（火力充分）。コンロ口数たくさん。	
水道		水、混合、熱湯。	
換気		複数？調理中の臭いまで充分換気される。	感覚の特性。熱処理。
床		食堂（椅子が動かし易い。掃除しやすい。汚れが付きにくい・目立たないなど）	こだわり。
壁		撥水。掃除しやすい。はがれが出にくい。	こだわり。
収納		キッチン（1週間分くらいの食材、消耗品など、備蓄品など、食器。） 食堂（ウオークイン収納庫）	食堂には置かない。
使い勝手		可動式パーティション	感覚の特性。衝動性。
手洗い場（含む 歯みがき）		食堂外に。必要充分。	こだわり。1対1対応。

* 入居者が使うか使わないか、によっても変わってきます。

キッチンが必要とする入居者がいる場合は、個人用を用意できるといいでしょう。

* 食べ物へのこだわりがある人は多く、キッチンへの出入りは制限できる構造が必要になる場合が多いです。

* また、嗅覚、味覚などに特異性をもつ人も多く、換気や消臭・防臭への配慮や、調理を分けるなどの配慮（コンロや電子レンジなどがそれぞれに必要なになる）、冷蔵庫や調理器具を個々に専用に、などの配慮が必要な場合もあります。誰が暮らすのかによって、違ってきます。

5-1 その他のチェック

チェックすること		できればこんな配慮があるといい	特性・行動面でのチェックポイント
冷暖房		各部屋独立。十分な出力。室外機の位置（音、換気など）。できれば、風の出にくいもの（蓄熱式暖房とか、床暖房とか、冷房にもあるのか・・・？）。	人それぞれの適温に対応。風の動きが嫌な場合も。部屋の物が動くことも気になる場合。対流しないと部屋の上下で温度差。
配電盤	容量、配線図とブレーカーの対応	十分な容量。各部屋で独立のブレーカー。冷暖房はそれにまた別。食堂も余裕をもって。緊急時のバッテリー。	全員（調理・職員含む）がフルに冷暖房や電気器具を使っても大丈夫であること。
スタッフの事務スペース		独立で。オートロック。指紋キー。（開け閉めの手間がなく、職員以外入れない）。出入り口の配慮（ドアが開いたときに、中が入居者に見えない）	生活の場であることへの配慮。危険物（薬、洗剤、薬品、その他）の管理。金銭管理。データ管理。など
洗濯・乾燥室		共用に独立で。乾燥室は必須。個々に必要な人は、各部屋につける配慮。	
収納		年間、緊急時を見越した量。掃除用具。入居者用は、できるだけ1対1対応で収納できるとよい。	活動するときに必要なになる以外は目に入らない。雑然としない。1対1対応で収納（片付け）。
近隣からの音		昼夜、週間、月間、年間、一時的など。要聞き取り	聴覚過敏など。
配置換え、改修などのしやすさ		可動式の壁やパーティション。張り替えやすい壁、床。できれば、1室以上の何でもOKの部屋。	こだわり。変化が苦手。汎化が苦手。
複数の玄関		動線が重なりそうな場合や、人の出入りが気になる場合など。再構造化の際に、全く変化させたい場合なども。	こだわり。変化が苦手。汎化が苦手。人への配慮が苦手。
鍵		それぞれの部屋に。内外から開け閉めOK。ただあげるだけでは開かないけれど、開け閉めしやすいシャッター、なんてあるだろうか	使う・使わないは状況により判断。
コンセント		掃除しやすい場所に必要な数のコンセント。コンセントカバー。入居者の居室は、それぞれに応じて場所を考える。	こだわり。視覚的にすっきり。使うところはわかりやすく。など

第 6 章

課題と提言

地域生活を支えるための最大のハードルは CH である。家があることも大事だが、その家がどんな家かはもっと重要である。

私たちは、家で休息をとり、会話をし、余暇を過ごし、そしてリズムを取り戻し、充電をして、また仕事に向かうことができる。家が大切なのは、これらの機能があるからである。今、CHに住んでいる人、そしてこれから CHに住むことになる人に、ただ地域で暮らしているという状態を提供するのではなく、本来の家の機能を提供するために、どうすべきかを考えていかななくてはならない。

もうひとつのハードルは、重い障害のある人たちも、重い障害のある人たちこそ、地域の中で、自分にとって最もいい環境で暮らすことが必要なのだという価値観が、未だ醸成されていないということである。社会全体が変わるためには、彼らを知り、支えている私たち福祉人が変わらなくてははいけないし、家族が変わらなければいけない。

家族が安心して障がいのある我が子を自立に向けて送り出し、安心して死ねること。それを支える上で、暮らしの場の保障は、中核を成す課題である。

このふたつのハードルを超すためのおそらく唯一の答えは、重い障害のある人たちが、穏やかに安心して育ち、大人になって、CHで支援を受けながら、自分らしい人生を楽しんでいる。そして、親亡き後も最期まで地域で暮らし続け、いい死を迎えている。という姿を地域社会の中に作り出していくことだろう。

この研究は CH のあり方をハードの側面から提案することを目的に始められたが、研究を進めるうちに、ハードの側面のみを追及して研究を進めても CH の本当のあり方には近づいていかないということが見えてきた。ソフトとハード、どちらか一方を、もしくは両方をいくら掘り下げても CH の本当の姿は見えてこない。支援・構造化をこれまでとは違う視点＝SS→SH→HS→HH という視点で分析し直しそれぞれの関係性に目をむけることで、やっとなるべき研究の方向性を見出すことができた（第2章参照 SS、SH、HS、HH）。

そして ICF の考え方をベースにして生活機能を捉えることで、あるべき CH の姿と、要件が整理できてきたのである。

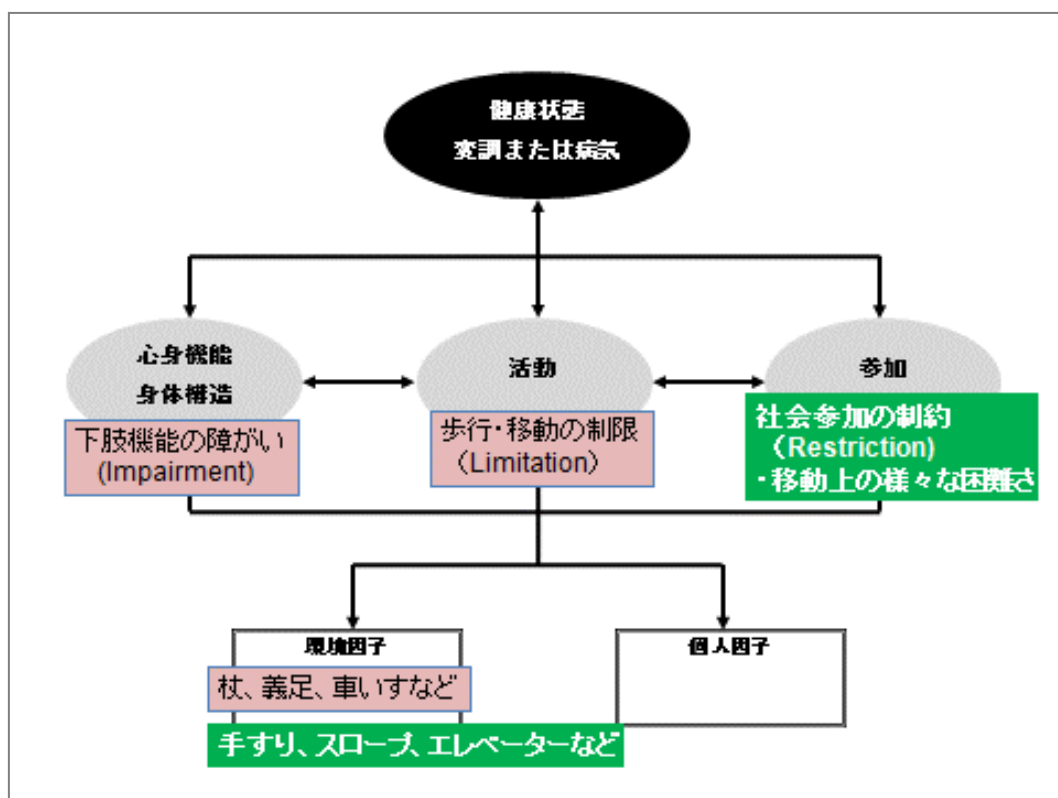
図表 6-1 は「下肢機能の障がい」を持つ人の ICF の状態を表したものである。活動のところで「歩行・移動の制限」が起こるため、環境因子のところで「杖、義足、車いすなど」が必要とされる。つまり環境整備＝支援の中の SH「杖、義足、車いすなど」が不備な状況になると「歩行・移動の制限」が増加するという関係にある。

また、参加のところで「社会参加の制約（移動上の様々な困難さ）」が起きるため、環境因子のところで HS、HH「手すり、スロープ、エレベーターなど」が必要となる。

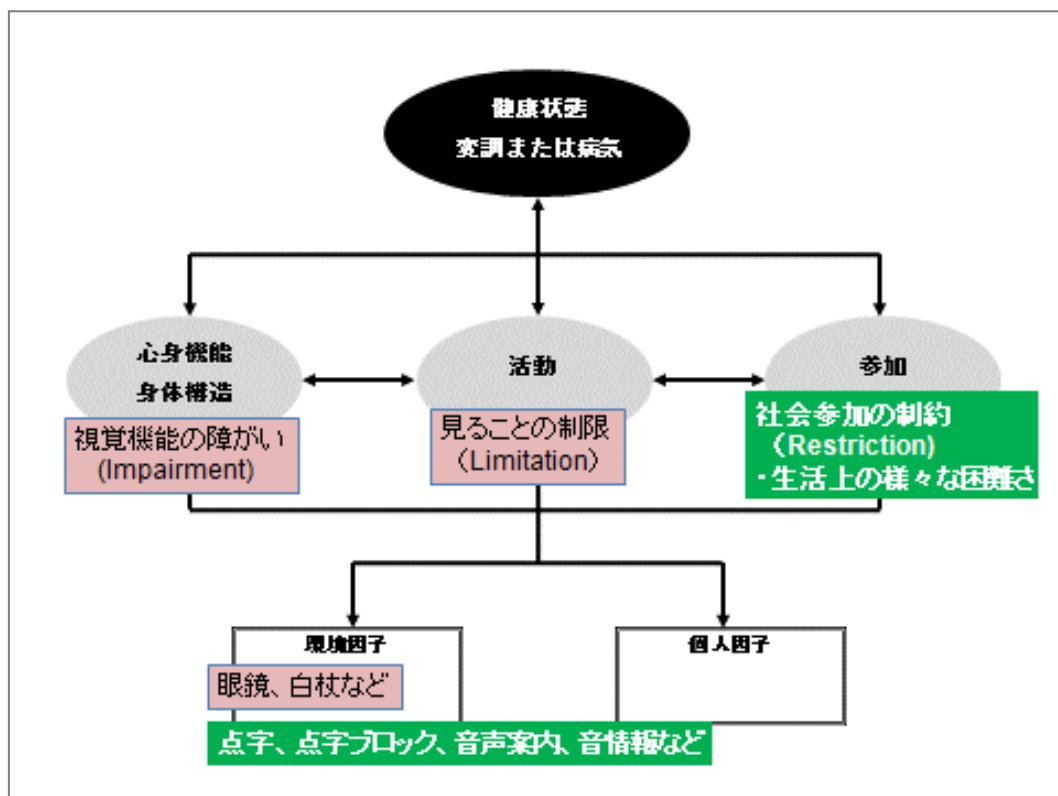
一方、「視覚機能の障がい」のケースで考えたのが図表 6-2 である。

図表 6-3 は「自閉症スペクトラム：脳機能の障がい」のケースである。本研究は主に、このケースを想定して環境因子の部分の改善から社会参加や認知活動のサポートを行うことを念頭に研究は進められた。

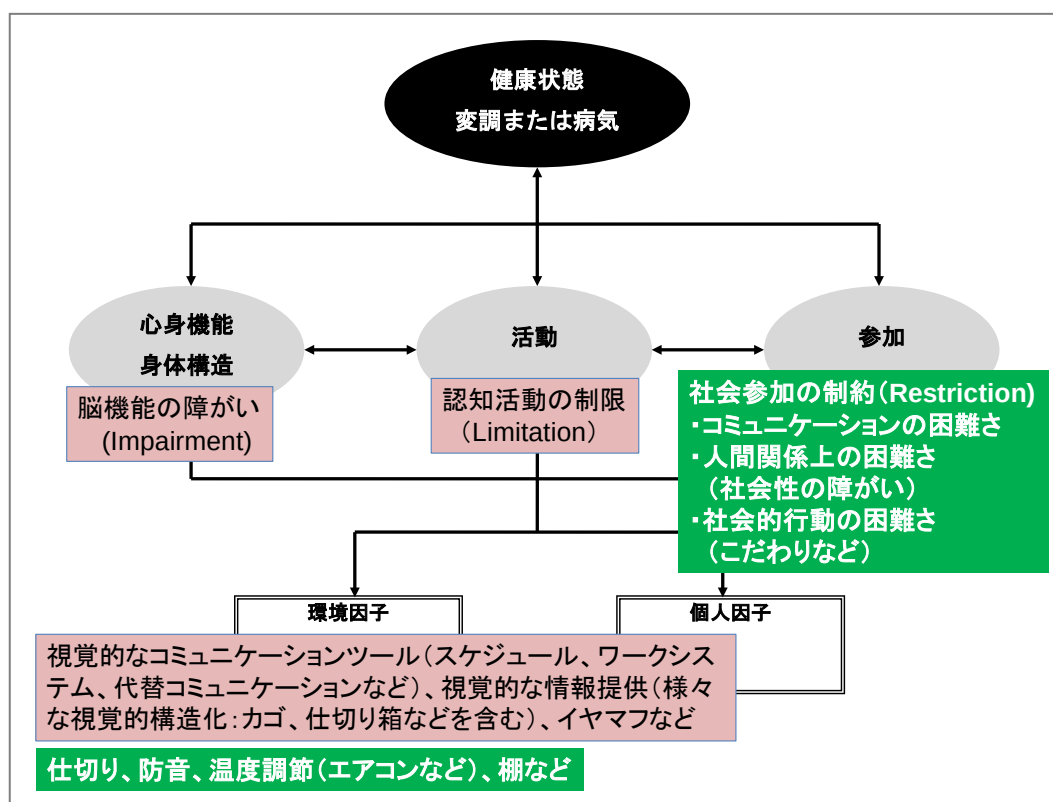
図表 6-1 : ICF「下肢機能の障がいのケース」



図表 6-2 : ICF「視覚機能の障がいのケース」



図表 6-3 : ICF「自閉症スペクトラム：脳機能の障がいのケース」



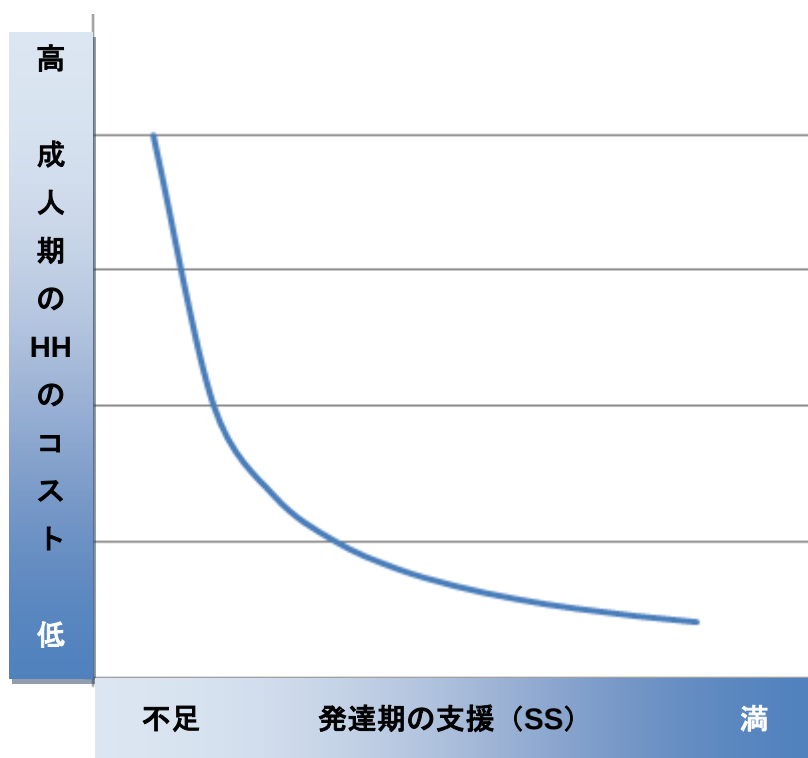
例えば認知活動の制限を引き下げるような環境づくりには、視覚的なコミュニケーションツール（スケジュール、ワークシステム、代替コミュニケーションなど）、視覚的な情報提供（様々な視覚的構造化：カゴ、仕切り箱などを含む）、イヤマフなどの SH、HS の整備が必要であり、それが、社会参加の制約（コミュニケーションの困難さ、人間関係上の困難さ、社会行動の困難さ）を引き下げる。また、仕切り、防音、温度調節（エアコン）、棚などの HH の整備があると、生活しにくい環境が改善されストレスが軽減される。

また、住環境は年齢とともに、また発達の状態や支援の状態によって変化すること、から、年齢と発育との関係や、年齢と支援との関係などを整理して研究することで「療育ハウス」や「行動援護ハウス（⇔行動対策ハウス）」という考え方が出てきて、そこから住環境のあり方を検討することができた。

そして、上記 SS、SH、HS、HH の考えかたと ICF の考え方に、年齢と発育の観点を加えて整理したのが図表 6-4「成人期の HH のコストと発達期の支援の関係」である。

現在の結論＝新たな仮説

図表 6-4：成人期の HH のコストと発達期の支援の関係



発達期の支援の充実度と成人期の HH のコストは反比例する

- ・ 発達期の支援が不足すると、成人期のハード整備のコストが高くなる
- ・ 発達期の支援が満たされると、成人期のハード整備のコストは低くなる

1. ハード整備

- ①最大限の SS と、必要最低限の HH が、個人と社会の ICF の循環をもっともよくする。
- ②発達期の支援の充実度は、2 次障害を予防し、成人期の行動障害に対する HH 面でのコストを下げる。
- ③SS→SH→HS→HH のそれぞれの H には、物理的な整備コストがかかる。S 方向（ソフト）からの H（ハード）がないと、HH に比重が偏り、整備コストが高くなる。

<課題と提言>

- ①本人の障がい特性のアセスメント（見立て）と、構造化のためのアセスメントができる基準づくりとアセスメントができる支援者の人材育成が必要である。
- ②現在入所、入院、あるいは在宅の、行動障害を起こしている人たちの CH（行動援護ハウス）の建設・整備は（発達期の SS の不足に対する手当として）急務である。
- ③SH、HS の H への補助が必要。（参照：ICF の比較）

2. アセスメント

- ①受け入れ前の事前アセスメントと受け入れのための段取り（準備）が、受け入れ後の混乱やストレスを無くし、行動障害の軽減あるいは予防になる。
- ②この研究で開発されたアセスメントシートは全て、サービス管理責任者あるいは事業所管理者レベルで、自閉症スペクトラムの障がい特性のアセスメントができる人が使うことが前提となっているが、そのレベルの人材は大幅に不足している。

<必要な知識・スキル・資質など>

- ①社会資源の開拓、開発（本研究では CH の開設や生活支援の事業、訪問看護の事業など）
- ②自閉症スペクトラムの障がい特性のアセスメントと個別支援計画の策定
- ③現場支援スタッフの育成とスーパーバイズ（OJT）
- ④関係機関との連絡調整
- ⑤家族との連絡調整 など

<課題と提言>

- ①アセスメントシートの現場検証（モデル事業）と標準化が必要である。
- ②アセスメントのための制度的な保障（受け入れを前提とした、受け入れ前のサービスへの報酬）が必要である。
- ③該当レベルの人材不足と、OJT のためのスタッフ配置の保障がない。
- ④人材育成プログラムがない。
 - 人材育成のための具体的なプログラム（ロールモデル）の研究開発とモデル研修
 - 人材育成のための研修と、人員配置（特に OJT のための）
- ⑤アセスメントと適切な支援により、行動障害を軽減あるいは起こさなかったことに対する評価と成果報酬が必要である。

3. 在宅の環境づくり（療育ハウス）

- ①2 次障害の予防が、「行動障害」をなくし、結果として、HH のコストを下げることから発達期の SS が大事である。
- ②療育ハウスが、アセスメントの場となり、同時に、本人の体験・親の障がい受容や支援方法の理解につながる。

<課題と提言>

- ①早期発見、療育、子育て支援、危機介入のシステムと、それを行う人材の育成が必要である。
- ②「療育ハウス」モデル事業の実施が必要である。最終的には圏域にひとつは療育ハウスの整備が望ましい。

4. 給付、補助等資金面での支援

1) ハード整備（HH）

- ①CH（行動援護ハウス）の増設に向けた基盤整備費の積み増し
- ②療育ハウスの基盤整備費の新設

2) ハード・ソフト整備（HS）

- ①CH 改修費の補助金の積み増し（開設時のみではなく、改修ニーズに応じた補助）
- ②破損品の修理、買い替えなどの補助（一定の基準で）

3) ソフト・ハード整備（SH）

- ①支援ツール（備品）の購入補助（個別支援計画に基づいて支給）
- ②支援ツール開発についての委託金、助成金

4) ソフト整備（SS）

- ①行動障害が軽減あるいは予防されたことへの成果報酬（制度化）
- ②アセスメントの制度化と人材育成プログラムの策定（予算化）

おわりに

この研究を通じてまた、たくさんの人の出会いがありました。
そこから、たくさんの異文化コミュニケーションが始まっています。

この研究はソフトウェアからハードウェアへつながる道筋を見つけ出すものでした。
けれども、その最後に、積水ハウス田中さんの「ハードウェアはソフトウェアがあつてこそ」という言葉に行き着きました。
改めて、それが当然の福祉業界にならなくてはいけないと思っています。

2章にあるように、「ハードは換えやすく、逆に心理に根ざしたソフトは換えにくい（問題点を意識しにくく抵抗も大きい）とされて」います。

障がいのある人、とりわけ自閉症スペクトラムの人たちをとりまく社会の価値観を換えていくのは本当に難しいと思います。彼らの文化を理解し、差別しない。という時代になるには、まだまだ時間が必要だと感じています。

でも、発達障害者支援法ができ、特別支援教育が始まりました。障害者自立支援法ができ、行動援護がうまれました。行動援護従事者養成研修が広がりつつあり、今年度3本の研究が行われました。

自閉症スペクトラムの人たちのいる社会のICFの循環が、少しずつだけれど、動きだし、加速していることを感じられ、とても嬉しく感じています。

研究のフィールドワークは、これからです。

新たな仮説を、具体的な取り組みのなかで検証していくことが次のステップになるでしょう。

その先に、ひとりひとり違うことを認められ、お互いに尊重しあいながら共生していける社会が見え始めています。

TEL : 0569-22-4072